鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 90

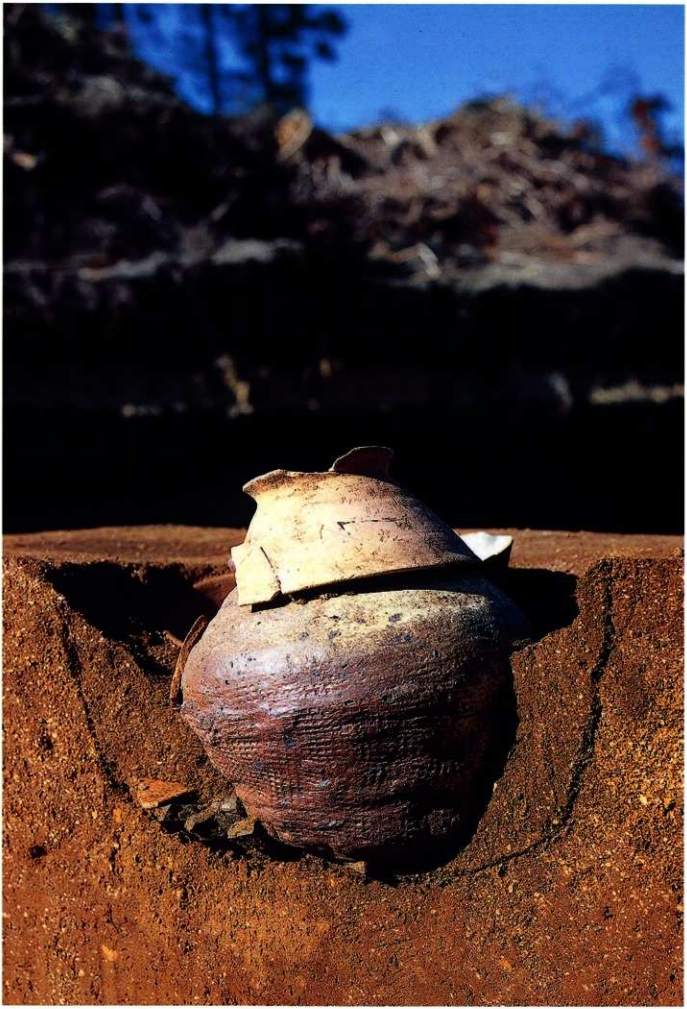
TAKARABEJYOUGAO

財部城ヶ尾遺跡

東九州自動車道建設(末吉財部IC～国分IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 V

２００５年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



序　　文

鹿児島県教育委員会では，東九州自動車道(末吉財部IC～国分IC間)の建設に伴い，平成11年度，財部城ヶ尾遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

この報告書は，「財部城ヶ尾遺跡」の発掘調査の記録です。

遺跡からは，縄文時代や古代の生活跡が発見されています。中でも，平安時代の生活跡は鮮明で，日常雑器の他，墨書土器や個人の墓と考えられる埋納された蔵骨器も発見されました。蔵骨器が完全な状態で発見されることはまれなことで，県内の関連資料との比較検討を行いました。

本書は，南九州に住んだ先人達の歴史の一端を明らかにする貴重な手がかりを提供するものと考えております。文化財の保護や学術研究のための資料として活用していただければ幸いです。

終わりに，調査にあたりご協力いただいた日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所や関係者の方々ならびに地域の皆様に心から感謝申し上げます。

平成17年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　木原俊孝

例　言

1．この報告書は，東九州自動車道建設(末吉財部IC～国分IC間)に伴う「財部城ヶ尾遺跡」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所の受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

3．本書で用いたレベル数値は全て海抜高である。

4．本書の遺物番号は各章ごとの通し番号とし，挿図，表，図版の番号と一致する。

5．発掘調査の実施においては，財部町教育委員会の協力を得た。

6．発掘調査における実測図及び写真撮影は，調査担当者が行った。

7．遺物実測の一部は(株)九州文化財研究所に依頼し，その監修については長野眞一が行った。

8．遺物に関する写真撮影は，鮫山静彦，福永修一，古岡康弘が行った。

9．報告書の製作・整理作業にはデジタル技術を導入し，図版等の作成及び編集に関わるデータ処理は，松尾勉，野間口勇が行い，馬籠亮道，鮫島仲吾の協力を得た。

10．本書の執筆，編集は，松尾，野間口，松田朝由が行った。

11．第Ⅱ章第1節については，立部剛氏(吉田町立吉山南中学校教諭)に依頼した。

12．付編「鹿児島県内の蔵骨器について」の資料収集，および集成については，松田，上床真が行い，編集は長野，松尾，野間口が行った。

13．掲載遺物の縮尺は，土器が1/3，石器は1/1を基本とする。しかし，礫石器等大型のものについてはこの限りではない。また，遺構については1/20を基本としたが，これについても大型の遺構についてはこの限りではない。各々，図中に示したスケールを参考とされたい。

14．土器，石器等の出土位置については，各節毎に記載した。スケールは，図中にグリッドラインを表示したので参考にされたい。

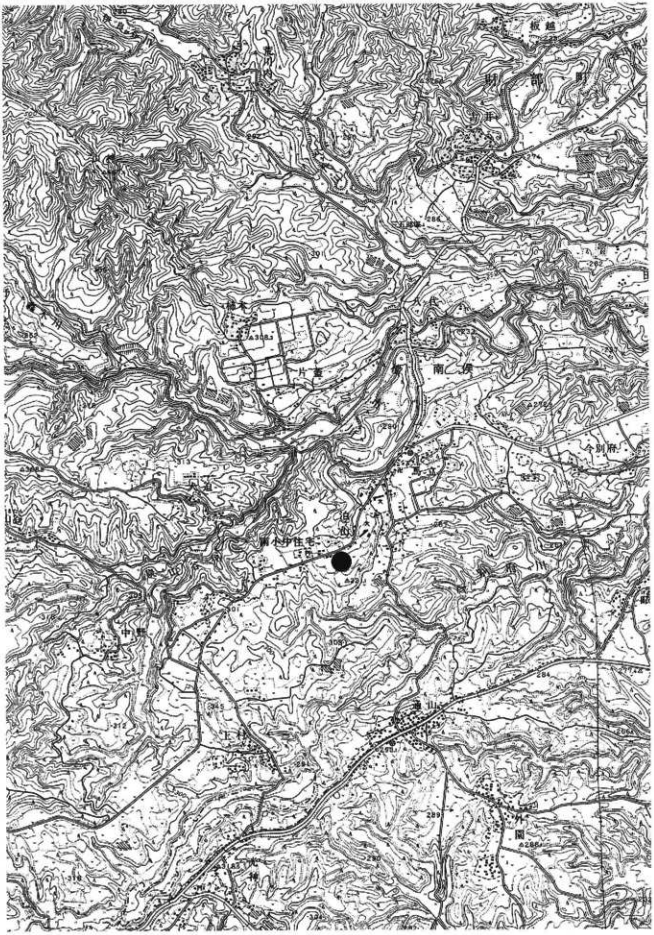
15．本報告書に掲載した出土遺物，図面，写真等は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し活用する。なお，本報告書に使用したデーターの一部は，鹿児島県埋蔵文化財情報管理システム及び埋蔵文化財情報データベース(http://wwwjomon-no-morijp)で公開する予定である。

報　告　書　抄　録

ふりがな	たからべじょうがおいせき
書　　名	財部城ヶ尾遺跡
副 書 名	東九州自動車道（末吉財部IC～国分IC間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	V
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	90
編著者名	松尾　勉，野間口　勇
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒899-4461　鹿児島県国分市上之段1175-1　　TEL 0995-48-5811
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （m²）	調査起因
たからべじょうがお 財部城ヶ尾	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 たからべちょうみなみまた 財部町南俣	464518	65-98-0	31° 41′ 28″	130° 56′ 25″	確認～ 本調査 19990712 ～ 19991224	8,500	東九州自動車道建設（末吉財部IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
財部城ヶ尾	包含地	早期	集石　土坑	押型文土器，手向山式土器	
		中期	土坑		
		後期		阿高式系土器，中岳式土器，出水式系土器	
		晩期	土坑	黒川式土器	
		古代	火葬墓 掘立柱建物跡 焼土 土坑	土師器，須恵器，鉄製品	



遺跡の位置図

本　文　目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……1
　第1節　調査に至るまでの経過……1
　第2節　調査の組織……1
　第3節　調査概要（日記抄）……1
　第4節　今後の取り扱い……2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……3
　第1節　位置と特色……3
　第2節　歴史的環境……4
　第3節　遺跡の層位……12
第Ⅲ章　縄文時代の調査……16
　第1節　調査の方法と概要……16
　第2節　縄文時代の遺構……16
　　1　集石遺構……16
　　2　土坑……16
　第3節　縄文時代の遺物……22
　　1　土器……22
　　2　石器……32
第Ⅳ章　古代の調査……37
　第1節　調査の方法と概要……37
　第2節　古代の遺構……37
　　1　掘立柱建物跡……37
　　2　焼土……39
　　3　土坑……43
　　4　蔵骨器埋納遺構……46
　　5　古道跡……50
　第3節　古代の遺物……51
　　1　土師器坏・椀……51
　　2　赤彩・黒色土器……53
　　3　土師器甕……53
　　4　須恵器坏・皿・蓋……58
　　5　須恵器壺・甕……58
　　6　火葬墓関連遺物……61
　　7　墨書・刻書土器……62
　　8　焼塩壺……64
　　9　紡錘車……64
　　10　鉄製品……64
第Ⅴ章　発掘調査のまとめ……70

挿　図　目　次

第1図　財部城ヶ尾遺跡の周辺の地形……6
第2図　周辺遺跡地図……9
第3図　遺跡と周辺の地形……10
第4図　周辺地形と調査区及びグリッド配置……11
第5図　財部城ヶ尾遺跡標準土層図……12
第6図　土層断面実測図(1)……12
第7図　土層断面実測図(2)……13
第8図　土層断面実測図(3)……14
第9図　土層断面実測図(4)……15
第10図　縄文時代遺構配置図……16
第11図　縄文時代早期集石……17
第12図　Ⅵ層遺構実測図土坑……18
第13図　Ⅴ層遺構実測図(1)……19
第14図　Ⅴ層遺構実測図(2)……20
第15図　Ⅳ層遺構実測図……21
第16図　1類～6類土器出土状況図……22
第17図　1類～4類土器実測図……23
第18図　5類～6類土器実測図……24
第19図　7類土器出土状況図……25
第20図　7A類土器(精製浅鉢形土器)実測図……26
第21図　7A類土器(精製浅鉢形土器)実測図……27
第22図　7B類土器(深鉢形土器)実測図(1)……28
第23図　7B類土器(深鉢形土器)(2)・7C類土器(鉢形土器)実測図(1)……29
第24図　7C類土器(鉢形土器)実測図(2)……30
第25図　縄文時代出土石器分布図……32
第26図　縄文時代　石器実測図(1)……33
第27図　縄文時代　石器実測図(2)……34
第28図　縄文時代　石器実測図(3)……35
第29図　古代遺構配置図……37
第30図　1号掘立柱建物跡及び4号焼土……38
第31図　2号掘立柱建物跡……38
第32図　3号掘立柱建物跡……39
第33図　4号掘立柱建物跡……40
第34図　1,2,3,4号焼土……41
第35図　1,2,3,4号土坑……43
第36図　5，6，7号土坑……44
第37図　8，9，10号土坑……45
第38図　蔵骨器埋納遺構……46
第39図　古道跡検出状況図(1)……47
第40図　古道跡検出状況図(2)……48
第41図　古道跡検出状況図(3)……49
第42図　古道跡検出状況図(4)……50
第43図　古代遺物出土状況図……51
第44図　土師器坏・椀……52
第45図　赤彩・黒色土器……53
第46図　土師器甕(1)……54
第47図　土師器甕(2)……55
第48図　土師器甕(3)……56
第49図　土師器甕(4)……57
第50図　須恵器坏・皿・蓋……58
第51図　須恵器壺・甕……59
第52図　須恵器甕……60
第53図　火葬墓関連遺物……60
第54図　墨書・刻書土器出土状況図……61
第55図　墨書・刻書土器……62
第56図　焼塩壺……63
第57図　紡錘車……63
第58図　鉄製品……63
第59図　時期別出土遺物数の割合……70
第60図　各エリアの遺物出土状況……71
第61図　本遺跡と蔵場遺跡との地理的関係……72

表目次

第1表　遺跡地名表(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第2表　遺跡地名表(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第3表　集石観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第4表　縄文時代土坑観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第5表　1類～6類土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第6表　7類土器観察表（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第7表　7類土器観察表（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第8表　縄文時代　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第9表　掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第10表　焼土観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第11表　土坑観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第12表　土師器坏・椀観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第13表　赤彩・黒色土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第14表　土師器甕観察表(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第15表　土師器甕観察表(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
第16表　須恵器坏・皿・蓋観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第17表　須恵器壷・甕観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第18表　火葬墓関連遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第19表　墨書・刻書土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第20表　焼温度観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第21表　結縄車観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第22表　鉄製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第23表　土師器「東」器厚の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第24表　土師器「坏」の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

図版目次

遺跡近景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版1
①標準土層（Ⅰ～Ⅹ層）ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版2
①2号土坑半截ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版3
①1号掘立柱建物跡ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版4
縄文時代遺構遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版5
①E-5区古遺跡ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版6
縄文時代　1類～6類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版7
縄文時代　7類土器(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版8
縄文時代　7類土器(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版9
縄文時代　7類土器(3)と晩期土器底部・・・・・・・・・・・図版10
縄文時代　石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版11
古代　火葬墓関連遺物(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・図版12
古代　火葬墓関連遺物(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・図版13
古代　土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版14
土師器坏・椀、赤彩・黒色土器・・・・・・・・・・・・・・図版15
須恵器坏・皿と土師器甕(1)・・・・・・・・・・・・・・・・図版16
古代土器　底部ヘラ切り、火葬、器面調整痕・・・・・・・・図版17
土師器甕(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版18
土師器甕(3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版19
須恵器壷・甕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版20
墨書・刻書土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版21
焼塩壷と結縄車、鉄製品・・・・・・・・・・・・・・・・・図版22

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道（末吉財部IC～国分IC間）の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受けて，鹿児島県教育委員会，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県立埋蔵文化財センターとの間で協議を行い，工事予定区内を対象にして，鹿児島県立埋蔵文化財センターが分布調査を行うこととなった。分布調査は，平成6年10月と平成7年5月に実施した。

その結果，工事予定区内に13か所の遺物散布地や確認調査の必要な地点が所在することが判明した。そこで，再度協議を行い，平成8年4月から，用地買収等の条件が整った区域を対象として順次確認調査を実施することとなった。

この結果をもとに，緊急発掘調査の必要な遺跡について，鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

財部城ヶ尾遺跡は確認調査未了のため，確認・本調査のスタイルで8,500㎡の発掘調査を実施し，縄文時代早期・晩期，古代の遺物包含層が残存することが明らかになった。

調査は，平成11年7月12日～12月24日（実働101日）の期間で実施した。

第2節　調査の組織

平成11年度　確認～本調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者

鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　吉永　和人

調査企画者

次長兼総務課長	黒木　友幸
主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
主任文化財主事	長野　眞一

調査担当者

文化財研究員	藤野　義久
〃	宇都　俊一
〃	山崎　克之
〃	有馬　孝一

事務担当者

総務係長	有村　貢
主　　査	政倉　孝弘
〃	今村孝一郎

平成16年度　報告書作成作業

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課

作成責任者

鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　木原　俊孝

作成企画者

次長兼総務課長	賞雅　彰
調査課長	新東　晃一
課長補佐	立神　次郎
主任文化財主事兼第二調査係長	鵜桑　久志
主任文化財主事	長野　眞一

作成担当者

文化財主事	松尾　勉
〃	野間口　勇

事務担当者

総務係長	平野　浩二
主　　事	福山忠一郎

報告書作成検討委員会　平成16年12月27日　所長以下

報告書作成指導委員会　平成16年12月24日　調査課長他

企画担当者　長野眞一，八木澤一郎，黒川忠広，上床真，馬籠亮道，鮫島伸吾

指導者・協力者

日本道路公団九州支社

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

財部町教育委員会

鹿児島大学歯学部　峰　和治

奈良大学文学部　東野治之

平田信芳，松田朝由，上床　真，山崎克之，有馬孝一，立部　剛

整理作業員

瀬戸口良子，平岡増子，宮原美子，岡島明子，赤塚涼子，小村幸子

第3節　調査概要（日記抄）

平成11年7月12日～12月24日まで本調査を実施した。調査の経過については，日記抄をもってかえる。記載は月単位とした。

7月

調査に必要な基準軸，グリッドを設定し，環境整備を実施した。表土剥ぎ，E～G-2～4区のⅥ～Ⅶ層を掘り下げた。E-2区Ⅳ層で古道，F-3区Ⅶ層で集石を検出した。

8月

C～G-2～7区のⅥ層～Ⅷ層を掘り下げた。C～E-2～5区で古道を，また，G-2～4区にかけて縄文時代の土坑を検出した。E～G-2～4区にかけて下層確認のトレンチを設定し，X層～XⅥ層を掘り下げた。

9月

B～E-5～8区のⅣ層～Ⅶ層を掘り下げた。C-3・4区とE-8区で縄文時代の土坑を検出した。

10月

D～F-11～13区のⅣ層を中心に掘り下げを行った。多数のピット，土坑，焼土跡等を検出し，写真撮影，実測を行った。

11月

E・F-13～14区を中心に，Ⅳ層より掘立柱建物跡，焼土等の遺構を検出し，写真撮影，実測を行った。さらに，E-17区で古道を検出した。また，C・D-10～13区にトレンチを設定し，下層確認を行った。

12月

D～G-15～18区にかけて，Ⅳ層を中心に掘り下げを行った。掘立柱建物跡や，蔵骨器埋納遺構を検出し，写真撮影，実測を行った。

第4節　今後の取り扱い

東九州自動車道建設に伴う財部城ヶ尾遺跡発掘調査は，本報告書刊行をもって完結する。しかし，今回の調査区を中心とした東側と西側の範囲には，昭和61年度に実施された発掘調査(県営特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査)によって明らかになった長十塚遺跡(財部町埋蔵文化財発掘調査報告書1)が残存しているため，今後も遺跡の現状保存を要する。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　位置と特色

財部城ヶ尾遺跡は，鹿児島県曽於郡財部町南俣に所在する。

遺跡の所在する財部町は鹿児島県の北東部，宮崎県との県境に位置し，北及び東は宮崎県都城市，西は姶良郡霧島町，国分市，姶良郡福山町，南は曽於郡末吉町と接している。

町市街地は都城盆地の一角をなし，大淀川の上流にあたる溝ノ口川，横市川に沿って水田や集落が散在している。その一方，山林が総面積の67.2％を占める山岳地帯でもある。

町域はほぼ三角形をなしている。西部は叛蓋山(543m)，白鹿岳(604m)，陣が岡(430m)と，山地が南北に連なるが，全体としては南東に位置する都城盆地へと傾斜する台地からなっている。そして，この台地間を大淀川の支流である溝ノ口川，横市川が東流する。地質は大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。年平均気温は15.8度，年間降水量は2,400mm程度である。

さて，本遺跡が所在する南俣地区は財部町の南部にあたり，町西部の山地から東部の都城盆地へ漸移する標高約200～360mの丘陵性台地が卓越する地域である。さらに，この丘陵性台地は，大淀川水系に属する諸河川により侵食を受け，小台地群に分断されているが，本遺跡はこうした小台地のひとつに立地している。

◇遺跡を取り巻く地形・水文環境

まず，５万分の１地形図(図幅の範囲において行った地形分類によって，遺跡のおかれた地形を概観すると，図幅中央をほぼ南北に走る山地があって，東側の都城盆地に傾く地域と西側の国分低地へ傾く地域を分かっている。南部は隣接する岩川図幅と同じく，西岸に高隈山地があり，その東に東へ傾く牧之原台地が付着し，西高東低の地形を形成している。(第１図)

まず山地は北部より南部に向かって，瓶蓋山（543m），黒石岳（524.7m），白鹿岳（604m），荒磯岳（538.7m）と標高500～600mの山々をもつ主として中生代後期から新生代前期からなる小起伏山地が連なるが，瓶蓋山や白鹿岳を中心とした山地には中起伏山地も見られる。これらの山地を九州を構成する大地形の枠組みの中で見ると，西南日本外帯西縁にあたる九州山地とひと続きの地質構造をもち，南の大隅半島側が大きく屈曲することによって，琉球外弧の北端をなすにいたった地域である。さらに九州山地の延長は，宮崎平野から南南西に続く都城盆地により，東側の鰐塚山地と西側の高隈山地に分けられ，本図幅に見られる山地群は西側の高隈山地から穿子島，屋久島へと連なっている。また，この山地群の西は，火山フロント及び琉球内弧による鹿児島地溝の東縁の断層崖によって明瞭に区分される。

次に地形を付言するような形で分布するのが，丘陵地である。上述した山地群は約2.8～2.5万年に噴出した入戸火砕流堆積物によって，その谷が埋められて緩傾斜の丘陵地形を形成したものと思われる。さらに，この火砕流堆積物によって形成された台地も広範囲に分布する。この台地は本図幅中央部の山地群を境に，東西にいずれも約300mの標高を示し，河川による侵食，開析が進んでいるが，その様相は東西で異なる。台地原面を比較的広く残す西側の台地（牧團，春山原，須川原，上野原）に対し，東側は，台地を侵食した河谷の斜面が広い部分を占め，台地原面は局部的に残存するに過ぎない。近接する河谷との比高も西側では200～250mに達するのに対し，東側では100m未満であることが多い。

台地に小規模ながら付着するのが段丘面である。本分類では中位段丘面として取り扱った。大淀川水系に属する横市川，後川などが都城盆地の西縁をなす財部市街地付近に集まる部分に比較的まとまって見出せる。これらは，いずれもシラス台地に多く見られる河成侵食段丘であると思われ，入戸火砕流堆積後，極めて短期間に形成されたであろうことが報告されているが，詳細は後述する。

最後に低地だが，台地や丘陵間の河谷沿いに見られる小規模な谷底平野を除けば，図幅西縁の国分低地が最大である。

この低地を含めた姶良カルデラ北縁地域には完新世段丘が認められるが，その詳細な地形発達史についてはここでは省略する。図幅東縁は，都城盆地西端をなす低地がみられ，財部町市街地にあたる。

都城盆地は，南部九州の基盤をなす地質構造の屈曲を切って，九州山地と鰐塚山地の間に形成された北東－南西方向の低地帯である。本遺跡の位置を地形から概観すると，盆地中心部に向かう傾斜の一角にあたることから，この盆地の概略にも触れる。都城盆地は，宮崎平野と四万十帯の諸県丘陵で分けられるが，その延長ととらえられ，盆地の概形は前期更新世にさかのぼるとされる。現在の盆地の地形を支配しているのは，厚く堆積した入戸火砕流堆積物及び二次的堆積物である。もともと全体として盆地状の地形に火砕流が厚く堆積すると，まず縁辺部がやや高く，中央部に低い浅い皿状の地形が生じ，これに堆積物が厚い中央部ほど大きな溶結作用が加わることで，当初より深い皿状の地形が生じた可能性が指摘されている。

入戸火砕流の堆積後，その侵食・開析過程の中で現地形が形成されたが，これらを地形分類の上からみると，西半分のシラス台地，東半分の層状地性の段丘に分けてとらえることができる。西半分のシラス台地は，東に向かって漸次低くなっており，高度200m付近で，高位段丘面（台地面）と中位段丘面に分けることができる。これらの台地を開析したのは，丸谷川，出内川，横市川といったいずれも大淀川水系に属する諸河川である。東半分の層状地性段丘に目を移すと，これらを形成したのは急峻な山地から流れる東岳川と沖水川である。扇状地は東縁部で約200mの高さを示し，西に緩く傾き下り，大淀川東岸で140mほどである。沖水川以北と以

南の扇状地には標高差が見られる。また，扇状地北縁には10m前後の崖が見られるが，南縁は緩やかに原河川氾濫源に漸移し，その境は明瞭ではない。

さて，以上の地形の概観をふまえて，本遺跡周辺の地形に絞ってみると，黒石岳，白鹿岳，荒隈岳といった山地群から，都城盆地に向かって下る小山地群や中位段丘面に移行する緩やかな斜面上に立地する。本遺跡は横市川と今別府川によって挟まれた台地に立地する。本遺跡に関わる河川は，いずれも大淀川水系に属し東流することから，遺跡の立地する台地は，河川によって南北に分断され，東西に細長い形状をなす。遺跡周辺の地形の基盤をなすのは，山地の主体となっている四万十層群であると思われるが，入戸火砕流堆積物によって，その低所が埋積された。さらに，その後の侵食・開析過程によって，現在の地形を形成している。

この侵食・開析過程については，その大半が入戸火砕流堆積後，無植生のうちに，流水による激しい侵食，開析が極めて短期間のうちに行われたという説明がある。本地域でも，台地面のみならず，河成侵食段丘の段丘面や地形分類に表れにくい小規模な階段状の地形における平坦面などにおいて，シラス上位に後述する成層した二次シラスが，露頭や近辺の発掘調査で数多く確認された。加えて，二次シラスの上にのるローム層中に約2.2～2.3万年前の噴出物とされるSz-Tk6（桜島高峠６・P17）が見出せることは，少なくとも，このテフラの堆積までには，現地形の大半が形成されたことが推察される。

このようにして，台地の分断や高密度の谷分布が本地域でも形成されたが，ここで現在の水系にも目を移してみたい。本遺跡は横市川の侵食，開析に関わる。この河川は，第１図図幅中央部の山地から東流し，都城盆地内にて，大淀川に合流し，鰐塚山地北縁で先行谷をなしつつ，宮崎平野に向けて北流する。この水系の原型は前期更新世中葉から後半というかなり古い時期に推定されている。しかし，大淀川の水系については，過去のある時期，志布志低地に向かって南下していた可能性が指摘されている。都城盆地の入戸火砕流堆積物の下位に，河成または湖成と考えられる都城層が確認されており，この都城層が全体として南方に傾斜しているためである。新しく考えると，阿多火砕流や入戸火砕流が末吉町付近に厚く堆積することで，現在の分水界を形成したという可能性も考えられている。いずれにしろ，本遺跡において後期旧石器時代以降の古水系は，ほぼ現水系とほぼ同一の流向が想定される。

◇遺跡を取り巻く地質環境

地形上の特色は，本地域の地質の相違を反映している。遺跡周辺で見られる最も古い岩石は，砂岩頁岩互層からなる固結堆積物であり，中央部の山地の主体である。これらの岩石は，地質構造的には四万十累帯に属し，秩父累帯とともに九州山地の主部をなすが，九州南部において，西南日本外帯の構造が南北に急変し，広く南陸九州の基盤となっている。

四万十累帯は北帯と南帯とに分かれるが，本地域に見られるものは，主に白亜紀～古第三期からなる北帯である。こうした岩石は，第１図図幅南東部の山地を刻む河谷中にも小露頭が見られることより，図幅南東部には基盤岩として広く分布することが予想される。特に，本遺跡南側は，この砂岩頁岩互層が基盤の高まりとして地表に露出し，小丘陵をなして，本遺跡と接している。また，同様の高まりは周辺で顕著であり，本遺跡の南約1.2kmに位置する耳取遺跡付近で再び露出する。これらの基盤の上に，入戸火砕流堆積物が台地を構成するのだが，基盤の高まりが見られる部分では火砕流の堆積が薄く，基盤の低所では厚く堆積しているのは言うまでもない。

現地形を支配する入戸火砕流堆積物であるが，その大半は非溶結いわゆるシラスである。灰色～淡黄褐色を呈し，その上部は風化により黄褐色に変色していることがある。無層理で淘汰が悪く，軽石礫の他，多数の外来礫を含む。シラス下位においては，溶結凝灰岩に漸移する場合もある。また，シラス上部には成層した二次的な軽石・火山灰層（二次シラス）が認められることが多い。本遺跡及び周辺の遺跡においてもまた同様であった。これは，先述したように火砕流堆積直後，植生に覆われる前に，流水による激しい侵食・堆積が行われたためであると考えられている。

シラス上位，台地面の最上部を覆って，ローム層が分布する。台地面や平坦面においては，３～４ｍの厚さを示す。このローム層中には多数のテフラが確認される。本遺跡においては，上位より，Sz-Ts（桜島大正・P1），Sz-Bm（桜島文明・P3），Kr-M（霧島御池），K-Ah（鬼界アカホヤ），Sz-Sy（桜島末吉・P11），Sz-St（桜島薩摩・P14），Tkn（高野），Sz-Tk4（桜島高峠４・P15），Sz-Tk6（桜島高峠６・P17）といった６枚のテフラが確認されており，基本的層序は違いは見られない。詳細は層序の項を参照されたい。

第２節　歴史的環境

古代の行政区分では，本遺跡周辺は日向国諸県郡財部郷に属した。『和名抄』には財部（たからべ），県（あがた），瓜生（うりゅう），山鹿（やまが），穂佐（むかさ），八代（やつしろ），大用（おおだ），春野（はるの）の八郷を載せ，日向国内では国府所在郡の児湯郡と並び最大の郡である。

「財部」の名の起源については，日光神社に関連する古代「財日奉部」によるとする説がある。「財日奉部」は大和政権の勢力がおよぶ数箇所に，日嗣りに適した処を選び，太陽信仰に基づく日嗣りの祭祀を，日迎えを行っていた。「財日奉部」の「財部」に由来する地名は，同内にいくつかあったが，現在まで残っているのは本隈の財部町だけで，最も古い地名である。

「日嗣り」は日光神社や山鹿岳周辺で行われたのではないかと考えられ，現在も日光神社に引き継がれている。

財部郷は，現曽於郡財部町から宮崎県都城市にかけての地域に比定される。鹿児島県内では最も早く大和政権の勢力が及んだ地域とみられ，現志布志町夏井の飯盛山古墳は５世紀中頃の南方後円墳，現大崎町横瀬の横瀬古墳は５世紀後半の

前方後円墳である。中世は『日向国建久図田帳』に「財部院百余丁」とあり，古代令制下の当郷を継承するものとみられる。

近世には薩摩藩の外城のひとつ財部郷としてみえ，郷域は北諸県郡財部村及び大隅の東曽於郡下財部・北俣・南俣（現財部町）が比定されている。主として現曽於郡財部町を中心とし，宮崎県都城市南東部にわたる一体と考えられる。明治４年７月の廃藩置県後は鹿児島県に属し，同年11月からは都城県に所属した。その後宮崎県に移管され，明治９年８月には再び鹿児島県に合併された。明治22年に町村制が実施され，従来の財部郷を財部村と改称し，北俣，南俣，下財部，３か村の名称は大字に改められた。その後，大正15年の町制施行により財部町となり現在にいたっている。

埋蔵文化財は，昭和58年に鹿児島県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査によって多くの遺跡が確認された。その後も，農政関係の分布調査などにより遺跡の数は増加しつつある。

昭和61年には長十塚遺跡（財部城ヶ尾遺跡）と石仏段遺跡の確認調査が行われ，縄文時代晩期や古代の遺物が出土している。昭和62年には横尾遺跡，横尾山遺跡，中崎上遺跡確認調査が行われている。横尾遺跡からは縄文時代早期の土器や石鏃等が出土し，中崎上遺跡からは縄文時代早期の押型文土器，撚糸文系土器，塞ノ神式土器，前期の曽畑式土器，中期の阿高式土器，後期の岩崎上層式系土器等が出土している。

昭和63年には中崎上遺跡の一部の全面調査が行われ，西之表市下剥峯遺跡出土の縄文時代早期の貝殻文系円筒土器に類似する土器が出土している。

平成５年には宮原・霧島迫Ａ，Ｂ遺跡の確認調査が実施され，縄文時代早期や晩期の遺物が出土している。

平成９年には西栗柄遺跡の確認調査が実施され，縄文時代早期や後・晩期の遺物が出土している。

平成12年には田平下遺跡の発掘調査が行われている。

また，東九州自動車道建設（末吉財部IC～国分IC間）にともなう大規模な発掘調査は平成８年～12年にかけて実施され，旧石器時代から近現代の遺構，遺物が確認された。

＜参考文献＞

1「九日田遺跡　供養之元遺跡　前原和田遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書』(36)2002

2「高篠坂遺跡　永磯遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書』(61)2003

3「長十塚遺跡　石仏段遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)1988

4「横尾遺跡　横尾山遺跡　中崎上遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)1988

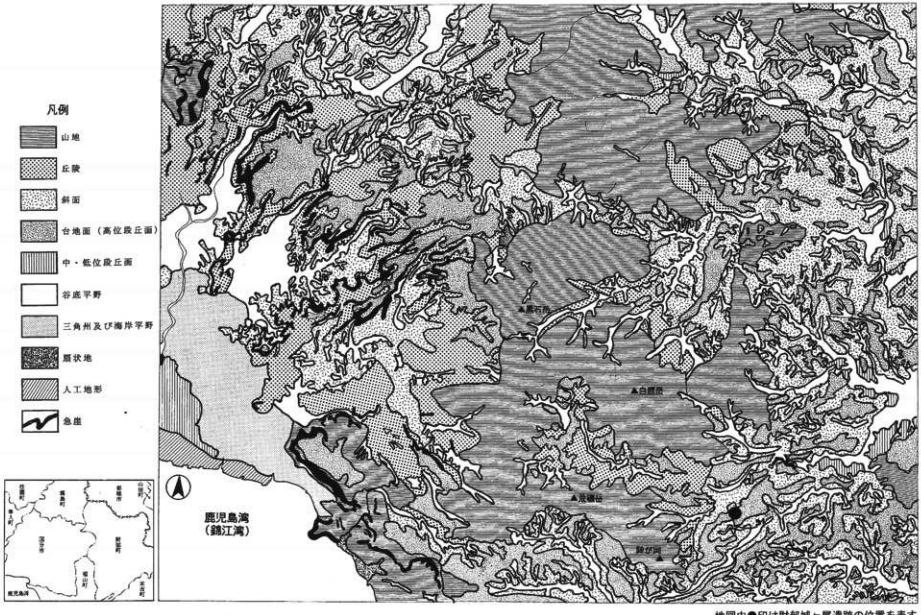
5「横尾遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)1989

6「宮原遺跡，霧島迫Ａ・Ｂ遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)1994

7「西栗柄遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)1998

8「財部町郷土史」財部町郷土史編纂委員会　1997

9「九要岡遺跡　鍋塚遺跡　高篠遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書』(71)2004



地図中●印は財部城ヶ尾遺跡の位置を表す

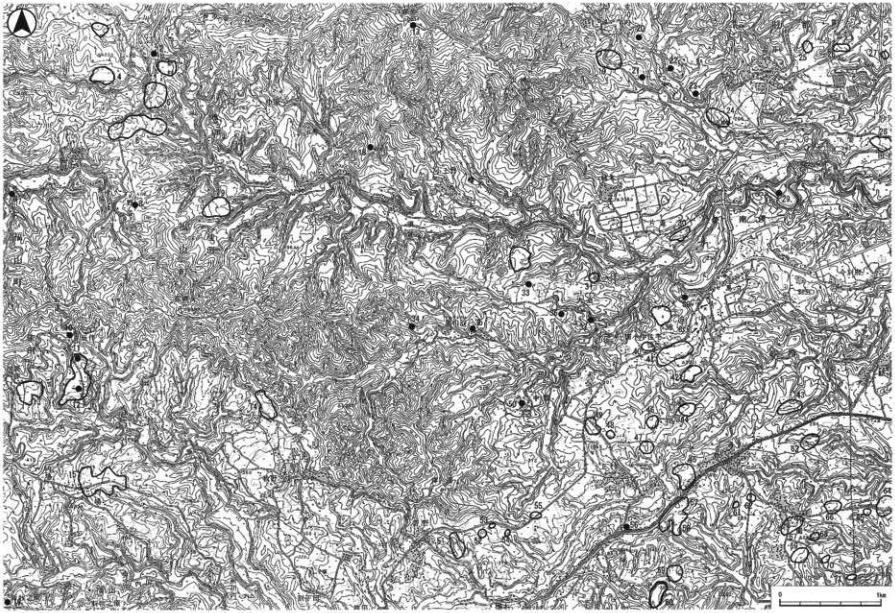
第１図　財部城ヶ尾遺跡の周辺の地形

第1表　遺跡地名表(1)

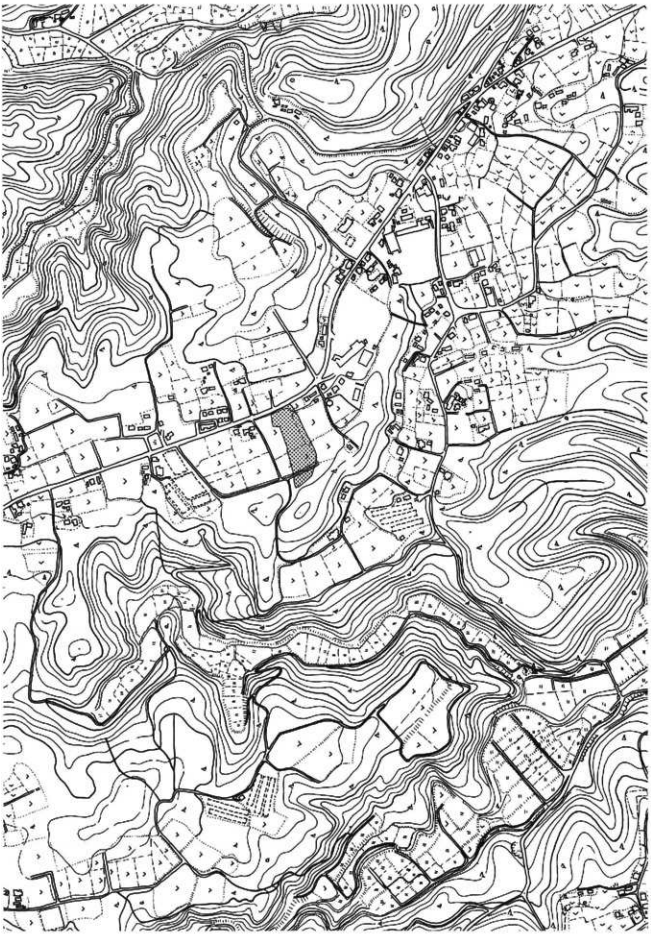
番号	遺跡名	所在地			地形	時代	遺物等	備考
1	小坂元A	福山町	比曽木野	小坂元		縄・古・歴	土器・成川式・土師器	
2	新村	〃	〃	新村	台地	縄(中)	岩崎式	
3	前原	〃	〃	前原	台地	縄・古・歴	土器・成川式・土師器	
4	城ヶ尾	〃	〃	城ヶ尾	台地	旧・縄・古	ナイフ形石器・塞ノ神式・成川式	H15.3 報告書
5	前原和田	〃	〃	前原和田	台地	旧・縄(早)	ナイフ形石器・押型文	H14.3 報告書
6	供養之元	〃	〃	供養之元	台地	縄・古	塞ノ神式・成川式	H14.3 報告書
7	長谷	〃	〃	長谷	台地	弥	大型石斧	
8	野谷下	〃	〃	野谷下		古・歴	成川式・土師器	
9	永磯	〃	〃	永磯	台地	旧・縄・歴	細石器・手向山式・土師器	H15.3 報告書
10	辰伴	福山町	伴例川	辰伴	台地	弥	土器	
11	栗ノ脇	〃	〃	栗ノ脇		縄	土器	
12	芹牟田	〃	〃	芹牟田		縄	土器	
13	赤松段	〃	〃	赤松段		縄	土器	
14	山神段	〃	〃	山神段		縄	土師器	
15	一本松	〃	〃	一本松	台地	縄(中・後)	阿高式・岩崎上層式・指宿式	H10 調査
16	花建原	〃	下牧之原	花建原			須恵器	
17	黒棚城柳	財部町	南俣	天子馬場				
18	花平陳跡	〃	〃	丸稀城ヶ原				
19	黒棚	〃	北俣	黒棚	台地	縄(早)・歴	押型文・磨製石斧・土師器	
20	松峯	〃	〃	松峯	台地	歴	内黒土師器	
21	下戸越	〃	〃	下戸越	台地	歴	土師器	
22	柳ノ口	〃	〃	柳ノ口	台地	縄(前～後)	轟式・春日式・河原式・指宿式・石鏃	
23	古井後ヶ谷	〃	〃	古井後ヶ谷	台地	縄		
24	西原	〃	〃	西原	台地	縄(早)・歴	押型文・土師器	
25	古井下原	〃	〃	古井下原	台地	歴	土師器	
26	宮後	〃	〃	宮後	台地	歴	土師器	
27	霧島迫B	〃	〃	霧島迫	台地	歴		
28	田代ノ上	〃	南俣	田代ノ上	台地	縄・歴	土師器・須恵器	
29	久保谷	〃	〃	久保谷	台地	歴	土師器	
30	八ヶ代上	〃	〃	八ヶ代上	台地	縄(早・後)・歴	前平式・土師器	
31	高篠坂	〃	〃	高篠坂	台地	縄(早)	前平式・手向山式	H15.3 報告書
32	高篠	〃	〃	高篠	台地	古代	土師器・須恵器	H16.3 報告書
33	大迫A	〃	〃	大迫	台地	縄(早・前)	轟式・黒曜石	
34	炭山谷	〃	〃	井牧ヶ平俣迫	台地	縄・歴	石斧・土師器	
35	炭山	〃	〃	炭山	台地	縄(後)・歴	指宿式・土師器	
36	大迫B	〃	〃	大迫	台地	歴	土師器	
37	片薮前	〃	〃	片薮前	台地	縄(早・前)	押型文・塞ノ神B式・チャート	

第2表　遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地			地形	時代	遺物等	備考
38	九養岡	〃	〃	九養岡	台地	旧・縄・歴	三稜尖頭器・手向山式・土師器	H16.3 報告書
39	馬立	〃	〃	馬立	台地	歴(奈良)	土師器・須恵器	
40	石仏段	〃	〃	石仏段	台地	縄(晩)・歴	黒色磨研土器・土師器	S61 調査
41	財部城ヶ尾(長十塚)	〃	〃	長十塚	台地	縄・歴	土器・石鏃・土師器・須恵器・鉄製品	本報告書(H11 調査)
42	踊場	〃	〃	踊場	台地	縄(早)・歴	塞ノ神式・土師器・須恵器	H16.3 報告書
43	王ヶ平	〃	〃	王ヶ平	台地	歴	土師器・須恵器	
44	九日田	〃	〃	九日田	台地	縄(早・後)・歴	石坂式・黒川式・土師器	H14.3 報告書
45	耳取	〃	〃	耳取	台地	旧・縄・歴	ナイフ形石器・古田式・土師器・縄文	H11～12 調査
46	前山2	〃	〃	前山	台地	縄(晩)・歴	黒色磨研土器・土師器	
47	前山1	〃	〃	前山	台地	歴	土師器	
48	芭蕉ヶ迫2	〃	〃	芭蕉ヶ迫	台地	縄・歴	石皿・敲石・土師器	
49	芭蕉ヶ迫1	〃	〃	芭蕉ヶ迫	台地	縄・歴	土器・土師器	
50	中野	〃	〃	中野	台地	歴	土師器・須恵器	
51	長田	〃	〃	長田	台地	縄・歴	土器・土師器	
52	梅田	〃	〃	梅田	台地	縄・歴	土器・土師器	
53	荷床2	〃	〃	荷床	台地	歴	土師器	
54	八畝	〃	〃	八畝	台地	縄・歴	土器・土師器	
55	荷床1	〃	〃	荷床	台地	歴	土師器	
56	野方	〃	〃	野方	台地	縄・歴	土器・土師器・内黒土師器	
57	桐木	末吉町	諏訪方	桐木	台地	旧・縄・歴	ナイフ形石器・船元式・土師器	H9～13 調査
58	桐木B	〃	〃	桐木	台地	旧・縄・歴	塞ノ神式・深浦式・土師器・住居遺構	H12～13 調査
59	関山西	〃	〃	関山西	台地	縄・弥・中世	土器・土師器・須恵器	H13 調査
60	関山	〃	〃	関山	台地	縄	土器	H13 調査
61	通山上川路	〃	深川	五位塚通山上川路	台地	縄(晩)・中世	夜臼式	S59 調査
62	真方入口	〃	〃	真方入口	台地	縄(前・晩)	轟式	S59 調査
63	中牛牧	〃	〃	中牛牧	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
64	楠木岡C	〃	〃	楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
65	楠木岡B	〃	〃	楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
66	楠木岡A	〃	〃	楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
67	臼杵	〃	〃	臼杵	台地			
68	下ノ窪	〃	〃	五位塚下ノ窪	台地	縄(晩)・古代	入佐式・土師器	
69	四枝道	〃	〃	四枝道	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
70	仮牧	〃	〃	五位塚仮牧	台地	古代	土師器・須恵器	S60 調査
71	五位塚渡り下	〃	〃	五位塚渡り下	台地	縄(早)	山形押型文	S60 調査



第２図　周辺遺跡地図



第３図　遺跡と周辺の地形

第４図　周辺地形と調査区及びグリッド配置図(1/1250)

第3節　遺跡の層位

Ⅰ層　暗褐色土　現表土

Ⅱ層　黄白色軽石層　P-3　文明ボラ　西暦1471年頃の桜島の噴出物（一部に残存）

Ⅲ層　黒色腐植土　縄文晩期～古代遺物包含層

Ⅳa層　黄褐色土　縄文時代後期～晩期及び古代の遺物が混在する包含層

Ⅳb層　黄褐色細粒軽石混硬質土　御池軽石　約4,200年前の霧島御池の噴出物

Ⅴa層　暗橙色土　Ⅴb層の腐植土

Ⅴb層　明橙色火山灰　アカホヤ火山灰　約6,400年前の鬼界カルデラの噴出物

Ⅵa層　黄褐色軽石混淡茶褐色土　縄文時代早期の遺物含層

Ⅵb層　黄褐色軽石層　P-11　約7,400年前の桜島の噴出物

Ⅶ層　明茶褐色土　縄文時代早期の遺物包含層

Ⅷ層　黒褐色土　縄文時代早期の遺物包含層

Ⅸ層　黄白色火山灰　P-14　サツマ火山灰　約11,000年前の桜島の噴出物

Ⅹ層　黒褐色土

ⅩⅠ層　黄褐色軟質ローム

ⅩⅡ層　暗茶褐色軟質ローム

ⅩⅢ層　褐色土

ⅩⅣ層　暗褐色硬質土　当該層上部び下部付近に赤褐色パミス(P-15)が点在する。

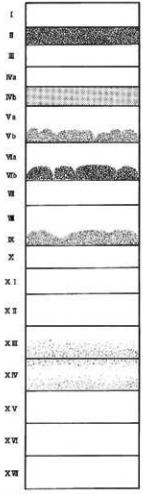
ⅩⅤ層　暗褐色硬質土

ⅩⅥ層　暗褐色硬質土　赤褐色パミス(P-17)が点在する。

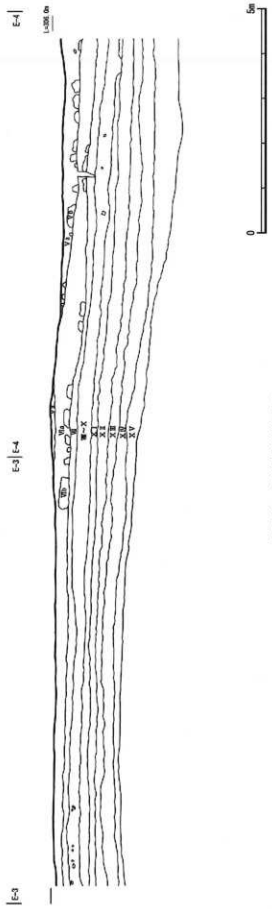
ⅩⅦ層　濁黄白色砂質土　シラス　角礫混明黄白色砂質土約25,000～28,000年前の姶良カルデラの噴出物

P＝パミス＝軽石

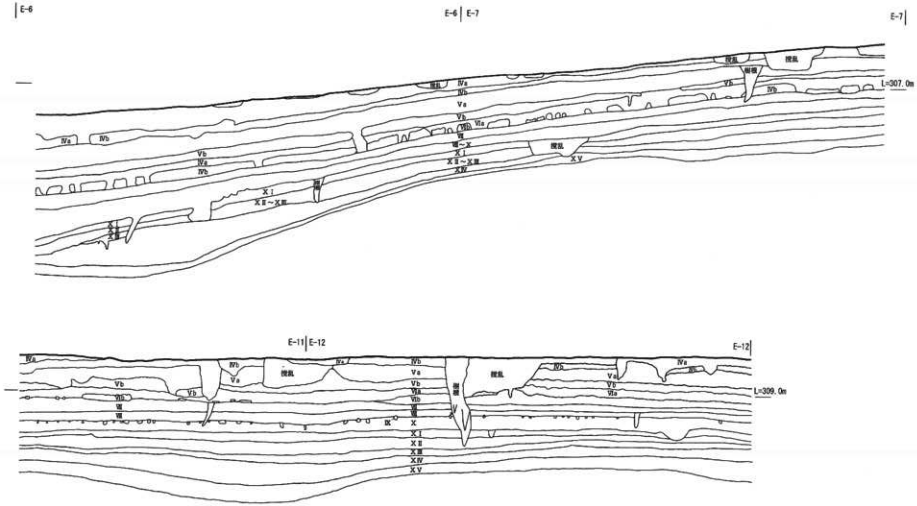
桜島の噴出物に新しいものから順に番号を付している。



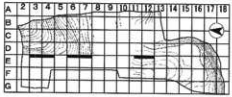
第5図　財部城ケ尾遺跡標準土層図



第6図　土層断面実測図(1)

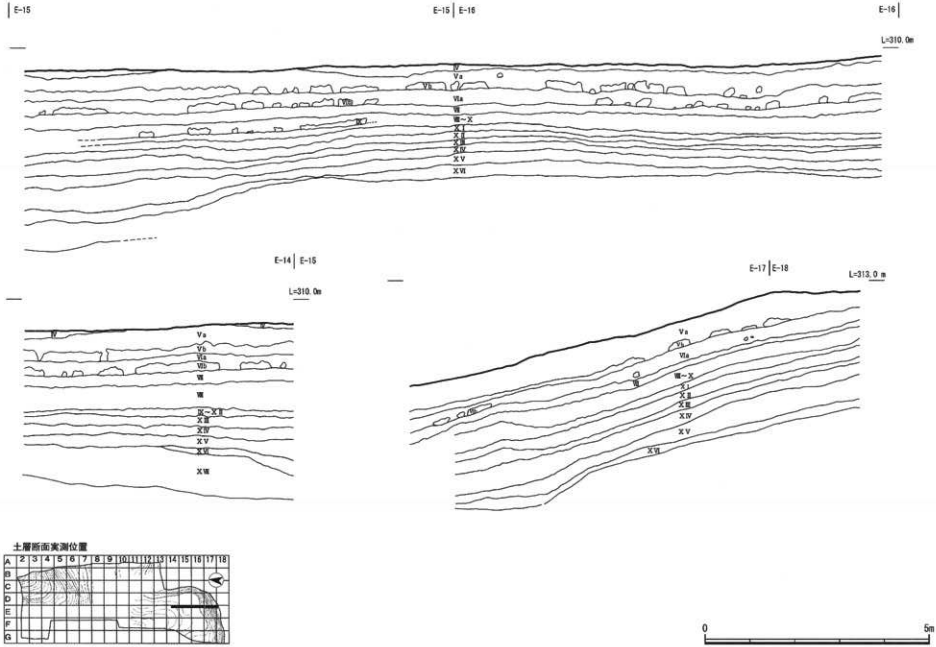


土層断面実測位置

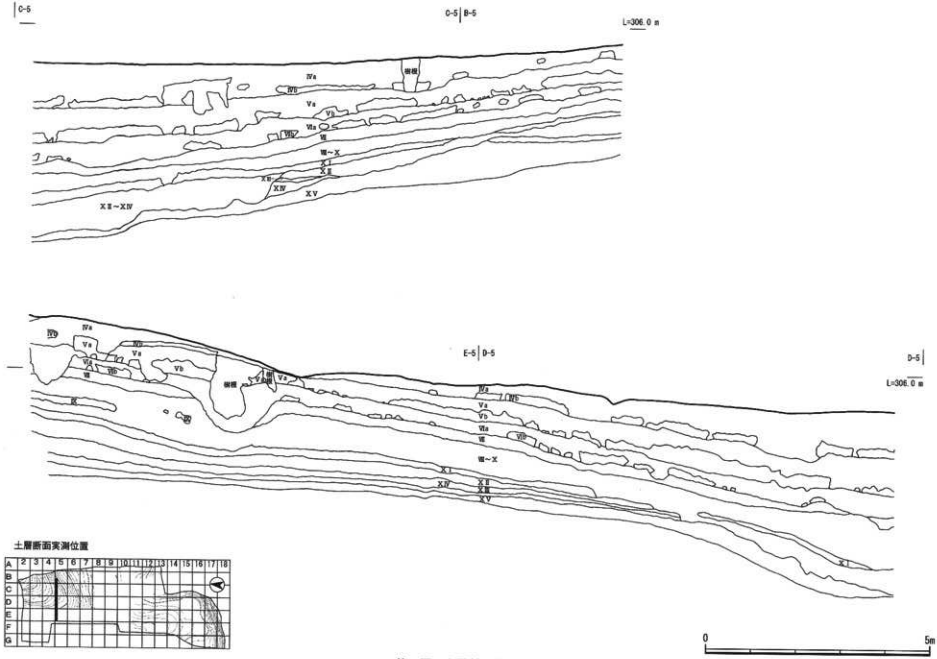


0 5m

第７図　土層断面実測図(２)



第８図　土層断面実測図(３)



第9図　土層断面実測図(4)

第Ⅲ章　縄文時代の調査

第1節　調査の方法と概要

縄文時代の調査は10m四方のグリッドを設定し，全面発掘調査を行った。

調査区内は，中世相当のⅢ層がほとんどの区で削平が進んでいたが，古代から縄文時代の遺物包含層は，整然と堆積した複数の火山灰層に挟まれ，良好に保存されていた。Ⅱ層の薩摩火山灰層(P-14)と Ⅵb層の桜島起源軽石噴出(P-11)との間に縄文時代早期の遺構と遺物を，Ⅳb層御池軽石火山灰層の上位に縄文時代後期及び晩期の遺構，遺物を発見した。

縄文時代早期の調査では，土坑２基，集石遺構１基を，縄文時代中期の調査では，土坑４基を，縄文時代晩期の調査では，土坑３基を確認した。

第2節　縄文時代の遺構

1　集石遺構(第11図)

Ⅶ層で１基検出した。検出した区域は平坦な地形であったが，礫にはまとまりが見られず，散逸した状態である。礫は５～15cm大の角礫が多く，10cm以内の大きさのものが主体である。礫間のレベル差は10cm以内に収まり，掘り込みは確認できなかった。

2　土坑(第12～15図)

調査区北側を中心に縄文時代早期から晩期にかけての土坑を９基検出した。埋土の色調等は図版に併載した。

(1)1号土坑

F-4区，Ⅶ層で検出した。上面プランは隅丸長方形，底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は底面に近いところでⅦ層土の明茶褐色土，その上位にはP-11と思われる黄褐色軽石を含む淡茶褐色土が流入していることから，P-11堆積以前と判断している。

(2)2号土坑

D-5区，ⅩⅠ層で，北側に向かって傾斜していく地点で検出した。上面プランは楕円形で，逆台形状の掘り込みの底部には明瞭な楔状の逆茂木痕が３本伴うが，樹皮等，杭の痕跡は確認できなかった。逆茂木痕の深さは平均約36cmである。

(3)3号土坑

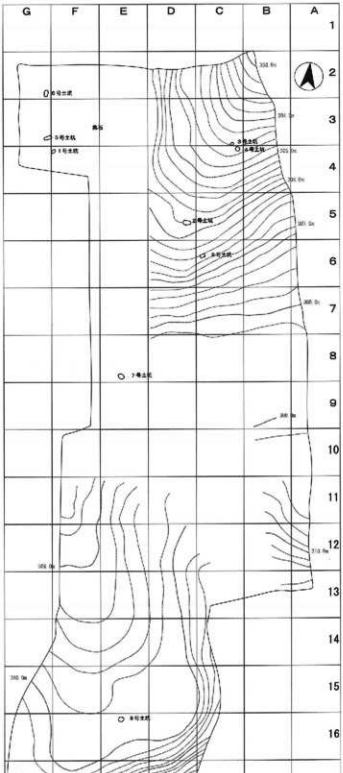
C-3区，Ⅳb層で検出した。上面プランはほぼ円形で，底面はほぼ平坦である。

(4)4号土坑

上面プランは円形で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや丸みをもち，中央に炭化物片を検出した。

(5)5号土坑

上面プランは隅丸長方形で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中の上面に棒状（約50cm大）の炭化物が含まれていた。炭化物は周縁部が黒炭化しているが，内部は土層が混入している。土坑は検出面より上位で掘り込まれているが，後年何らかの作用により削平等を

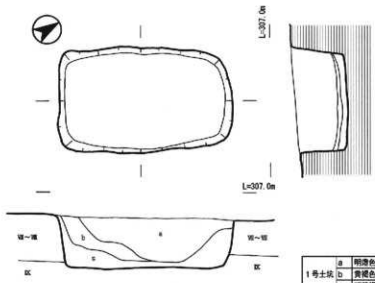


第10図　縄文時代遺構配置図(S=1/800)

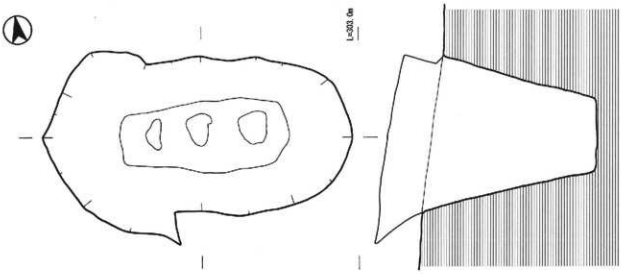
第11図　縄文時代早期集石

第３表　集石観察表

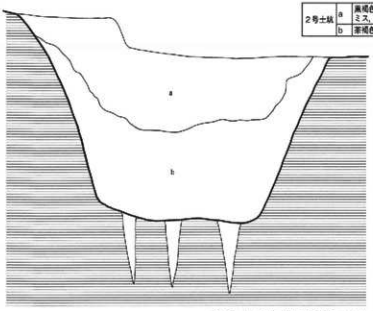
押図番号	検出区/群	長径(cm)	短径(cm)	礫数(個)	備　考
11	F-3/Ⅶ	282	205	99	礫の密集性が低く，崩れた状態である。



1号土坑	a	明澄色土に黄褐色の経石を含む淡茶褐色土の混入土
	b	黄褐色の経石を含む淡茶褐色土
	c	明茶褐色土

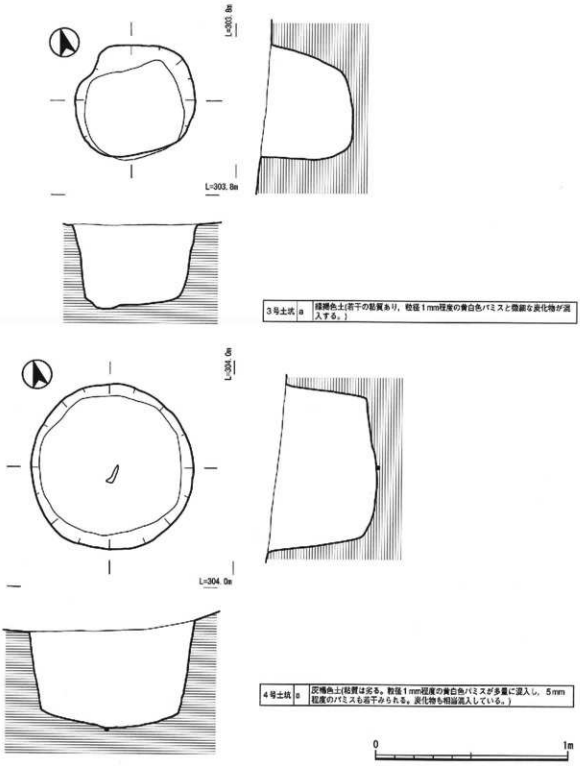


2号土坑	a	黒褐色土(やや粘質がある。上層には白色粒が目立つ。5～10mm程度の白色パミス、10～30mm程度の黄色パミスが混入する。)
	b	茶褐色土(1よりやや粘質である。10mm程度の黄白色パミスが点在する。)



0 1m

第12図　Ⅶ層遺構実測図土坑



第13図　Ⅴ層遺構実測図(1)

受けたものと思われる。

(6)6号土坑

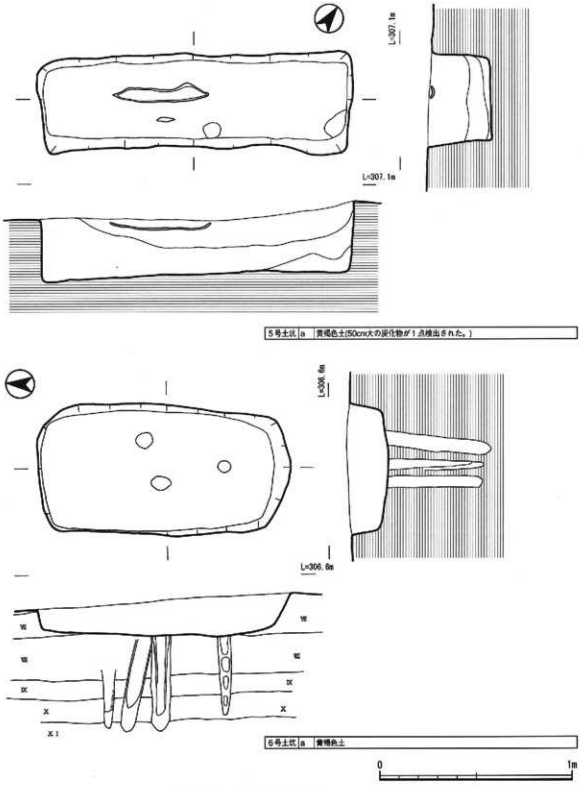
上面プランは隅丸長方形，底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面に逆茂木痕を4本確認したが，長さに顕著な差異はみられない。痕跡はⅩⅠ層上面まで達し，検出した掘り込みよりも深いことから，土坑自体は上位で掘り込まれたが，後年何らかの作用により削平等を受けたものと思われる。

(7)7号土坑

上面プランは円形，壁はすり鉢状にすぼまり，底面はほぼ平坦である。Ⅴ層まで掘り込まれているが，土坑上部は，後年何らかの作用により削平等を受けたものと思われる。

(8)8号土坑

検出面は縄文時代早期のⅨ層で検出したが，堀土はⅣa層

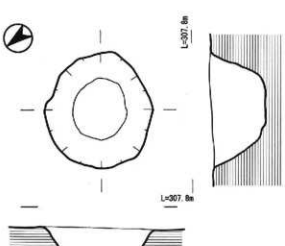


第14図　Ⅴ層遺構実測図(2)

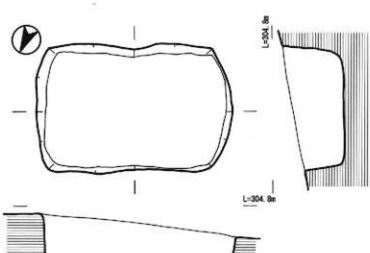
であるため，遺構の形成時期は御池軽石火山灰堆積以降と判断した。平面プランは隅丸長方形，壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面は緩斜面だが，遺構底部は平坦でほぼ水平である。

(9)9号土坑

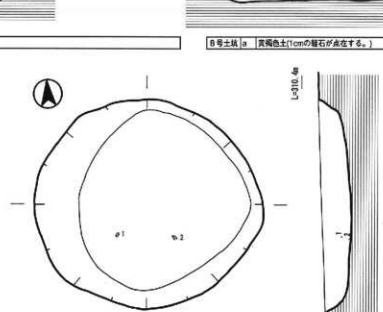
平面プランは円形で，断面は浅いレンズ状である。床面近くの埋土中より土器片２点が出土したが，形式等は不明である。



7号土坑 a 黒褐色土



8号土坑 a 黄褐色土(1cmの礫石が点在する。)



9号土坑 a 褐色土(粒子の粘質あり、粒径1mm程度の黄白色パミスと微細な炭化物が混入する。)

0 1m

第15図　Ⅳ層遺構実測図

第4表　縄文時代土坑観察表

挿図番号	遺構番号	検出区/層	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
12	1号土坑	F-4/Ⅶ	91	56	26
	2号土坑	D-5/XⅠ	162	95	102
13	3号土坑	C-3/Ⅳb	64	59	44
	4号土坑	C-4/Ⅳb	88	85	52

挿図番号	遺構番号	検出区/層	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
14	5号土坑	G-3/Ⅵb	131	68	20
	6号土坑	G-2/Ⅶ	163	50	33
15	7号土坑	E-8/Ⅳb	62	57	27
	8号土坑	C-6/Ⅸ	103	65	32
	9号土坑	E-16/Ⅳa	120	111	19

第３節　縄文時代の遺物

１．土器

１類土器(第17図　１．２)

１は，楕円押型が施文されている。２はややいびつな底部である。山形押型文が施文されている。

２類土器(第17図　３)

３は，手向山式土器である。おおよそ体部上半から胴部屈曲部にあたる。胴部屈曲部の残存状況は良好ではないが，明確な屈曲を持つ器形を呈することが想定される。間延びした山形押型を施文した後に沈線を施すものである。

３類土器(第17図　4-1～4-4)

4-1，4-2，4-3は，太形の押線文を施すことから阿高式系の土器であると考えられる。ただし，押線文を施す以前に貝殻条痕が施文として施されていない点が通常の阿高式土器と異なる点である。これらは同一個体と考えられるが，明確に接合するものではないのであえて別図で示した。これらを復元すると4-4のようになる可能性が高い。

４類土器(第17図　5-1，5-2)

５は出水式系土器である。口縁部には，並行した２本の沈線によって区画された文様帯の中に，タテ方向の連続した直線文を施す。

５類土器(第18図　６～10)

６～10はおおよそ後期後葉～晩期初頭頃に該当する土器であると考えられる。

６は口縁部が直行するもので外に開くものである。口縁部下の外面にヘラもしくは貝殻によるとみられる沈線が施される。納屋向タイプに類似するが，口縁部のみであるので明らかでない。

７，８は口縁部で，口唇部がおおよそ平らに面取りされ，口縁部内面に屈曲がみられる。口唇部施文帯には２条の沈線が巡る。器面調整は内外面ともヘラミガキである。

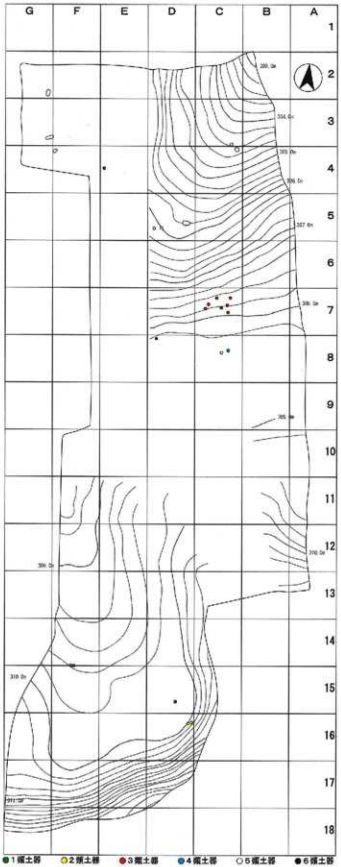
９，10は胴部で，頸部から胴部にかけて３条の沈線を巡らす。外面の器面調整は，胴部の施文部位を境にして上部はミガキで，下部はナデが施される。内面は板目状工具による条痕を施したのちナデを施す。

10は緩やかにくの字に屈曲する胴部を持ち，胴部外面の屈曲部より上部は丁寧なナデを，胴部外面の屈曲部より下部は丁寧な上下方向のミガキを施す。内面は板目状工具による条痕を施したのちナデを施す。

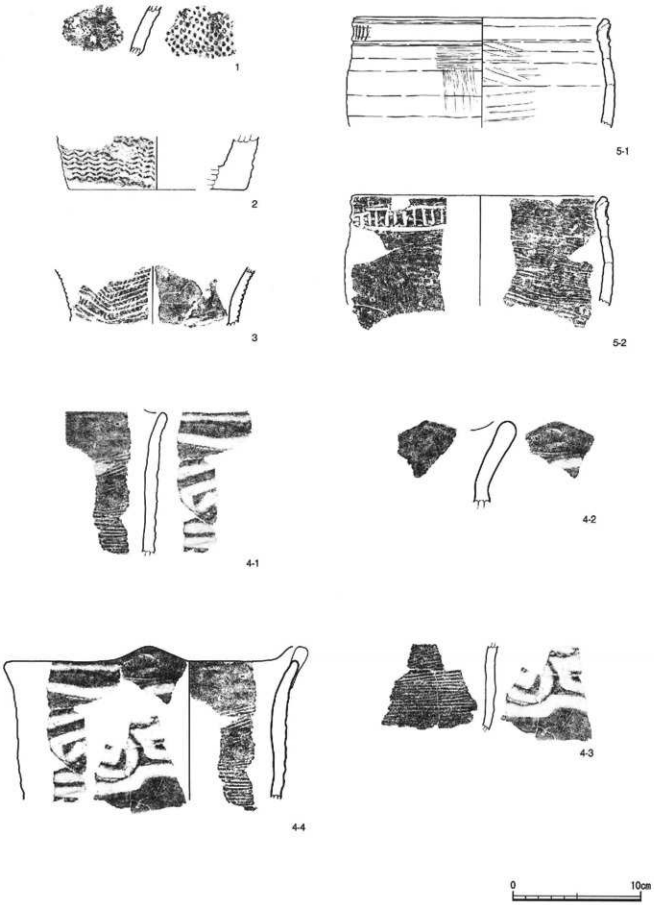
これらの中で７～10は，中岳Ⅱ式土器に類似するが，やや古い要素を持つことから，さらに古い時期に該当する可能性がある。

６類土器(第18図　11)

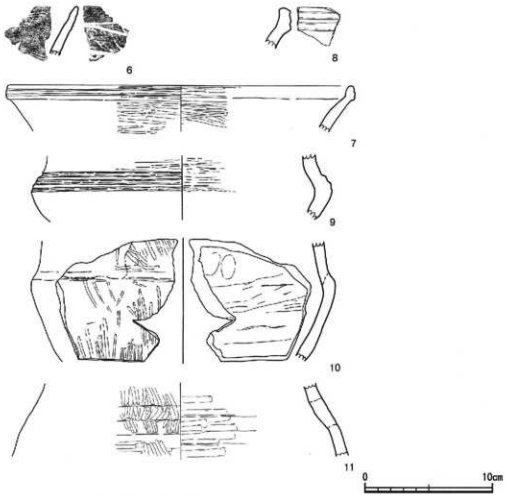
11は胴部から頸部にかけた土器片と思われ，外面に横位のナデを施した後に頸部から口縁部に向けた縦位のミガキが見られ，内面は板目状工具による条痕が見られる。推定復元すると壺形土器が想定され，中岳式土器に



第16図　１類～６類土器出土状況図(S=1/800)



第17図　1類～4類土器実測図



第18図　５類～６類土器実測図

第５表　１類～６類土器観察表

挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区／層)	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
17	1	3896(D-15/Ⅶ)	砂粒・角閃石	-	(3.9)	-	-	不良	5YR4/6 (赤褐色)	-	押型文	-
	2	90(E-4/Ⅶ)	赤色粒・石英・長石	-	(4.0)	(14.0)	-	不良	10YR6/4 (にぶい黄橙)	-	押型文	-
	3	3903(D-16/Ⅶ) 3904(D-16/Ⅶ)	石英・角閃石	-	(4.7)	-	-	不良	10YR6/3 (にぶい黄橙)	-	押型文 沈線	-
	4-1 4-2 4-3 4-4	145(C-7/Ⅳ) 146(C-7/Ⅳ) 151(C-7/Ⅳ) 152(C-7/Ⅳ) 160(C-7/Ⅳ) ←接(小)	角閃石	(21.4)	(11.0)	-	-	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-	凹線	阿高式土器
	5-1 5-2	143(C-8/Ⅳ)	石英・長石・緑石細粒を多く含む	19.5	(8.7)	-	-	不良	10YR5/4 (にぶい黄橙)	条痕	沈線	出水式土器
18	6	144(C-8/Ⅳ)	-	-	-	-	-	不良	7.5YR3/3 (暗褐色)	-	沈線	-
	7	223(D-5/Ⅳ)	雲母	26.9	(3.3)	-	-	良好	7.5YR6/3 (にぶい黄橙)	ミガキ	ミガキ	-
	8	220(D-5/Ⅳ)	-	-	(3.2)	-	-	-	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-
	9	←接(小)	長石、石英、角閃石	(19.5)	(5.1)	-	-	不良	5YR5/6 (明赤褐色)	ミガキ	ミガキ	-
	10	3473(F-15/Ⅶa) 3479(F-15/Ⅶa)	石英、赤色粒多い	(21.8)	(10.0)	-	-	不良	7.5YR6/8 (橙)	ナデ、ケズリ・指押さえ	ミガキ	-
	11	141(D-8/Ⅳ)	石英・長石・角閃石・砂粒・赤色粒が多い	(21.2)	(6.0)	-	-	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ヨコヘラナデ	タテミガキ	-

付随するものとして掲載したが，縄文時代晩期終末時期の可能性もある。

7 A類土器(第20・21図　12～32)

胴部が曲線をもって屈曲し，短い口縁部をもつタイプを主体とする。口縁部径が胴部最大幅よりも幅広くなる資料はなく「黒川式土器」に属する。胴部の稜線の鋭いタイプもみられるが口縁部径が胴部最大幅よりも大きくなる資料はなく「入佐式土器」は認められない。色調は黒色あるいは灰色が多いが，わずかに茶褐色もみられる。法量は口径が10～14cmの小型と，20～24cmの中型，30～40cmの大型がみられる。内外面には丁寧な横方向のヘラ研磨が施されている。以下では個別の説明を行う。

12は長い口縁部と強く張る胴部をもつ。13～16は短い口縁部である。口縁部は玉縁状を呈する。13は口縁部外面の沈線が形骸化している。14は外面が部分的に橙色を呈している。口縁部内外面に沈線がみられる。15は胴部最大径と内面胴部上端に稜をもつ。口縁部外面の沈線は形骸化している。16は口縁部内外面に沈線がみられる。

17は胴部最大幅に鋭い稜線をもち，そこから口縁部にかけて「く」の字に外反する。口径は胴部最大幅とほぼ同じである。器面の研磨痕は他の資料程の光沢をもたない。口縁部外面に沈線を施し，内面は段を形成している。18は胴部下半である。胴部最大幅の部分には鋭い稜線を認める。胴部下半まで器厚はほとんど変らない。23は口縁部である。外反しながら長く立ちあがり口縁端部は玉縁状を呈する。内面が沈線状，外面が段状を呈する。色調はオリーブ黒を呈する。

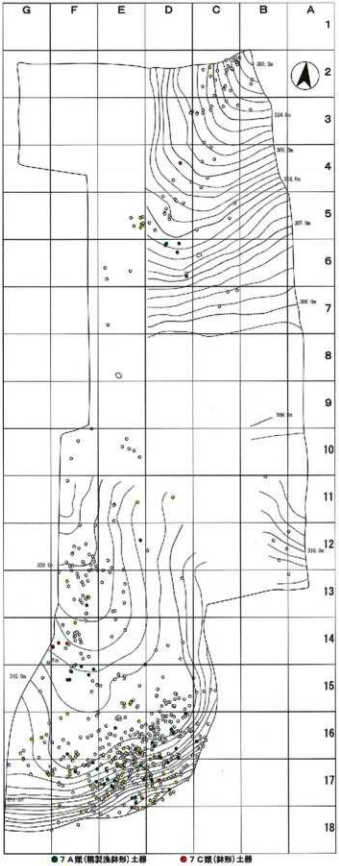
20は口縁部片で穿孔が認められ，両面から穿たれている。調整は内外面ナデである。

21，22は形態が類似する。口縁端部は上方に立ち上がり気味である。口縁部は胴部から「く」の字状に屈曲する。21は浅黄色を呈する。研磨は内外面にみられるが，光沢は認められない。口縁部は玉縁状を呈し，外面には痕跡的な沈線，内面には段がみられ，外面の器面の凹凸が目立つ。22は口縁部外面に明瞭な沈線を認め，内面には段が認められる。口縁端部の接合痕が断面で観察される。

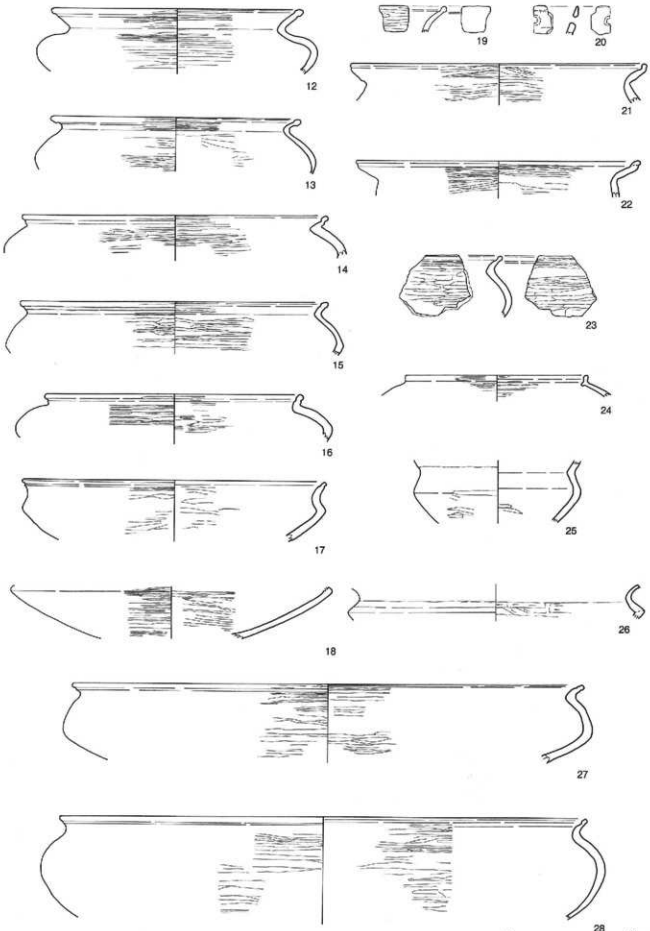
23は内面の胴部から口縁部にかけて稜が観察される。24は短い口縁部をもち口縁部と胴部の境はナデが不十分で粘土が水平に突出している。器壁が薄く外面は赤褐色を呈する。口縁部内面に沈線を施すが，外面にはみられない。24，25は小型である。砂粒を多く含み，器面のミガキも荒い。外面の胴部と口縁部の屈曲部ではナデによってわずかな段を形成している。

26は胴部最大幅部分が鋭い稜を呈し，そこから上位は「く」の字状に大きく外反する。器面はナデでミガキは認められない。

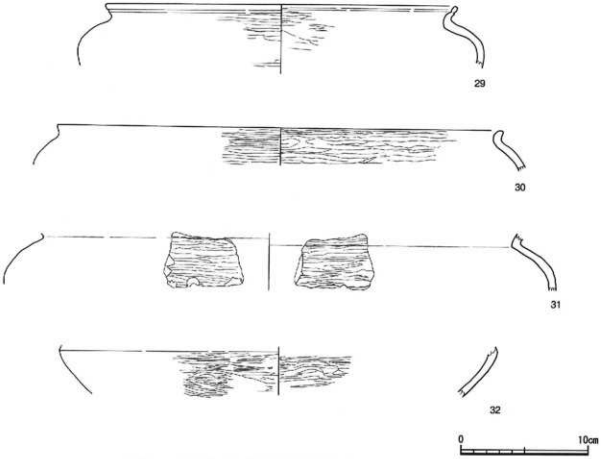
27～32は大型である。口縁部はすべて短い。27は灰黄褐色を呈する。口縁部内外面に沈線を施す。28は外面に丁寧なミガキがみられる。口縁部外面に沈線，口縁部内



第19図　7類土器出土状況図(S=1/800)



第20図　７Ａ類土器（精製浅鉢形土器）実測図（１）



第21図　７Ａ類土器（精製浅鉢形土器）実測図（２）

面には幅広の浅い沈線を認める。色調はにぶい黄色から灰白色を呈する。断面観察から器壁表面側１mm弱の厚みで微粒の土をかぶせているようである。焼成による剥離等は見られないほど密着していることから，化粧土的な効果を期待した制作行為の結果ではないかと考えられる。29は口縁部外面に沈線，口縁部内面には幅広の浅い沈線を認める。30は胴部上端から短い口縁部を形成する。口縁部内外には沈線が認められない。外面は一部橙色を呈していることが断面から観察される。31は胴部上位である。胴部最大幅付近で外面からの穿孔が観察される。32は胴部下位である。内外面ともに丁寧なミガキがみられる。胴部最大幅部分は稜がつよく，外面の色調はにぶい黄色を呈する。

７Ｂ類土器(第22・23図　33～52)

頸部と胴部の屈曲部が近接し，肩に段を有するものがみられる。外面には，板目状工具によるとみられるヨコ方向の条痕を施すものと，ヘラミガキを施すものとがある。内面は，ヘラミガキ，ナデなどで器面調整が行われる。おおよそ器形は，口縁部が外湾し，肩は「く」の字状になっている。

43～45は，頸部屈曲部にリボン状の突起が貼り付けられるものである。内面は丁寧なナデが施される。外面にはススが付着し，丁寧なナデが施されるものと表面の剥落が激しいものがある。

46は，口縁部下に断面が台形に近い形状の突帯を１条貼り付けるものである。全体的に調整は精緻ではないが，突帯の上面については丁寧なナデが施される。

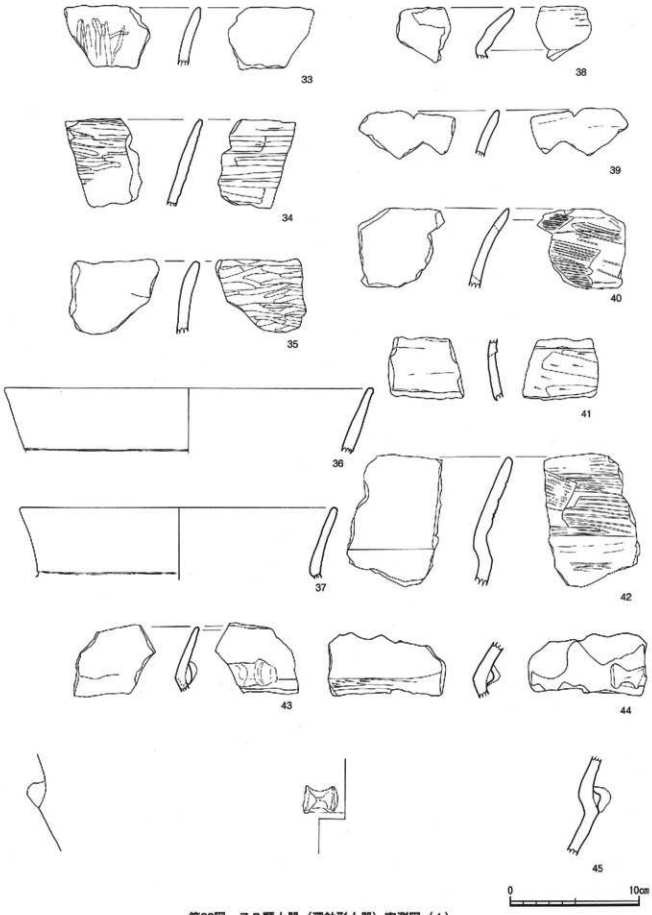
７Ｃ類土器(第23・24図　60～64)

ボール状に立ち上がる器形のもので，底の形状は明確ではないが，丸底の可能性が高いと考えられる。調整は外面が板目状工具による条痕，ナデを施し，内面には板目状工具による条痕の上をヘラミガキしている。

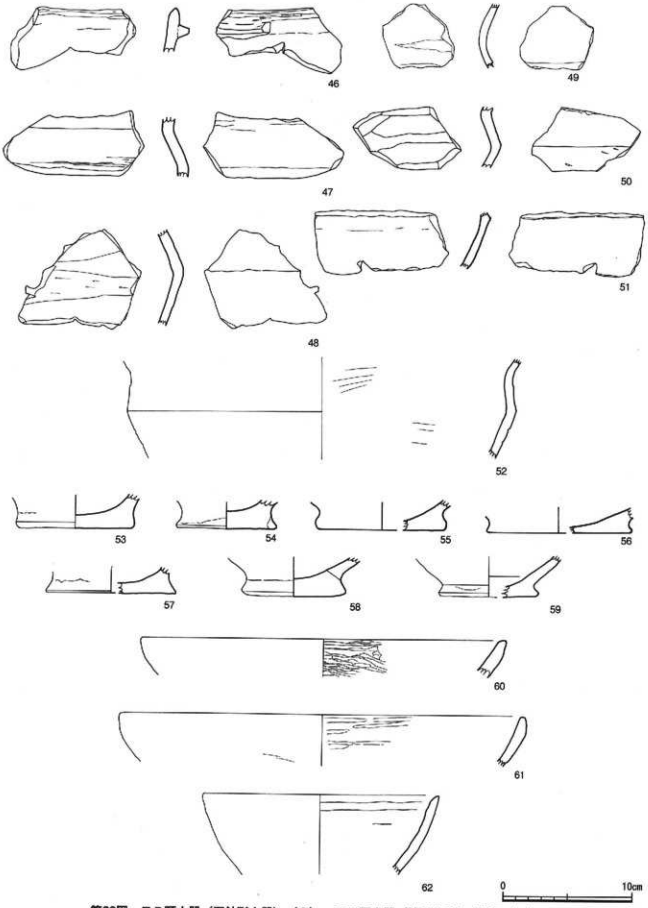
底部(第23図　53～59)

晩期土器の底部を一括した。

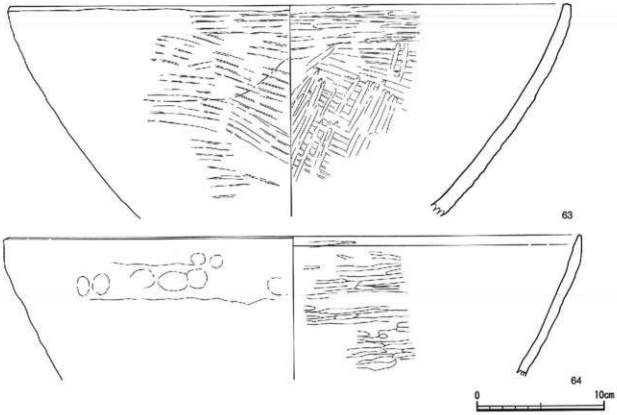
53～59は平底で，いずれも張り出し状の厚底となっている。



第22図　７Ｂ類土器（深鉢形土器）実測図（１）



第23図　７Ｂ類土器（深鉢形土器）（２）・７Ｃ類土器（鉢形土器）実測図（１）



第24図　７Ｃ類土器（鉢形土器）実測図（２）

第６表　７類土器観察表（１）

挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区／層)	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
20	12	1120(E-12/Ⅳa)	長石	19.4	(5.1)	-	-	良好	2.5Y1/4 (にぶい黄)	ミガキ	ミガキ	-
	13	2773(E-15/Ⅳa) 3634(F-16/Ⅳa)	雲母	19.2	(4.2)	-	-	良好	10YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
	14	2929(D-17/Ⅳa) 3000(D-16/Ⅳa) 3135(C-16/Ⅳa)	長石	23.8	(3.4)	-	-	不良	10YR3/2 (黒褐色)	ミガキ	ミガキ	-
	15	156(D-6/Ⅳ) 209(D-6/Ⅳ) 211(D-6/Ⅳ)	長石、石英	24.0	(4.2)	-	-	良好	2.5Y3/1 (黒褐色)	ミガキ	ミガキ	-
	16	2439(E-17/Ⅳa) 2922(D-17/Ⅳa)	長石	20.0	(3.7)	-	-	良好	5Y4/1 (灰)	ミガキ	ミガキ	-
	17	2763(F-15/Ⅳa) 3469(F-15/Ⅳa)	長石、角閃石	23.6	(4.8)	-	-	良好	2.5Y4/2 (暗灰黄)	ミガキ	ミガキ	-
	18	213(D-6/Ⅳ) 214(D-6/Ⅳ)	長石	(25.2)	(4.1)	-	-	良好	10YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
	19	3002(D-17/Ⅳa)	結晶	-	(2.0)	-	-	良好	2.5Y7/2 (灰黄色)	ミガキ	ミガキ	-
	20	2310(F-13/Ⅳa)	-	-	(2.2)	-	-	-	10YR1.7/1 (黒)	ハケ後丁寧なナデ	ハケ後ナデ	口縁部穿孔有り,穿孔径1cm
	21	2360(E-17/Ⅳa)	長石、石英	23.0	(3.0)	-	-	不良	2.5Y7/3 (浅黄)	ミガキ	ミガキ	-
	22	2528(E-16/Ⅳa)	長石	22.0	(2.9)	-	-	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ミガキ	ミガキ	-
	23	3462(F-15/Ⅳa) 3674(F-15/Ⅳa)	結晶、長石	-	(4.0)	-	-	良好	5Y3/1 (オリーブ黒)	ミガキ	ミガキ	-
	24	2914(D-16/Ⅳa)	長石	14.0	(1.8)	-	-	不良	5YR4/6 (赤褐色)	ミガキ	ミガキ	-
	25	3127(D-17/Ⅳa)	長石、石英	(12.6)	(5.0)	-	-	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ミガキ	ミガキ、ナデ	-
	26	3313(F-17/Ⅳa)	長石、石英	(22.4)	(2.9)	-	-	不良	7.5Y R7/3 (にぶい橙)	ナデ	ナデ	-
	27	3292(F-17/Ⅳa) 3310(F-17/Ⅳa) 3356(E-17/Ⅳa) 2542(E-16/Ⅳa) 3344(E-17/Ⅳa) 2554(D-16/Ⅳa) 2553(D-16/Ⅳa) 2949(D-17/Ⅳa) 2989(D-17/Ⅳa) 3104(D-16/Ⅳa)	結晶	40.0	(3.5)	-	-	良好	10YR4/2 (灰黄褐色)	ミガキ	ミガキ	-

第7表　7類土器観察表（2）

挿図番号	報告番号	取上番号（出土区／層）	胎土	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
20	28	2368(E-17/Ⅳa) 2369(E-17/Ⅳa)	精級、長石	41.0	8.1	-	-	良好	10YR7/3 (にぶい黄)	ミガキ	ミガキ	-
21	29	2341(E-17/Ⅳa) 2376(E-17/Ⅳa)	長石	27.6	(5.0)	-	-	不良	2.5Y6/2 (灰黄色)	ミガキ	ミガキ	-
	30	3198(F-15/Ⅳa) 3613(F-17/Ⅳa) 3724(F-15/Ⅳa)	長石	34.6	(3.0)	-	-	不良	10YR1.7/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
	31	3065(D-16/Ⅳa)	長石	(36.6)	(4.5)	-	-	良好	7.5YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
	32	2359(E-17/Ⅳa) 2437(E-17/Ⅳa)	長石、石英	(34.0)	(4.0)	-	-	良好	2.5YR6/3 (にぶい黄)	ミガキ	ミガキ	-
22	33	2353(E-18/Ⅳa)	長石、石英	-	(4.6)	-	-	不良	7.5YR4/4 (褐色)	ケズリ後ナデ	ナデ	-
	34	3350(E-17/Ⅳa) 3638(F-17/Ⅳa)	角閃石	(6.8)	(7.9)	-	-	良好	10YR4/2 (灰黄褐色)	ミガキ	条痕	-
	35	3709(G-16/Ⅳa)	長石	-	(5.8)	-	-	良好	2.5Y2/1 (黒)	ナデ	ミガキ	-
	36	3686(F-16/Ⅳa)	長石、石英	28.8	(5.2)	-	-	不良	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ナデ	ナデ	-
	37	3360(E-17/Ⅳa) 3666(G-17/Ⅳa)	長石、石英	24.8	(5.8)	-	-	良好	10YR4/2 (灰黄褐色)	ナデ	粗いナデ	-
	38	2302(F-14/Ⅳa)	長石	-	(4.3)	-	-	不良	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデ	ケズリ後ナデ	-
	39	2459(D-17/Ⅳa) 3246(E-17/Ⅳa)	長石、石英	-	(3.8)	-	-	良好	10YR3/2 (黒褐色)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-
	40	―括(-/-)	赤色粒、長石、角閃石	-	(5.3)	-	-	不良	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	ミガキ	条痕	-
	41	1439(C-2/Ⅳa)	長石、石英、角閃石	-	(4.8)	-	-	良好	5YR6/6 (橙)	ケズリ	ミガキ	-
	42	82(E-5/Ⅳ) 85(E-5/Ⅳ) 245(E-5/Ⅳ上)	砂粒、長石	-	(10.2)	-	-	不良	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	ナデ	ナデ、条痕	-
	43	3624(F-17/Ⅳa)	長石、角閃石	-	(5.3)	-	-	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ナデ	ナデ	-
	44	3333(F-18/Ⅳa) 3348(E-17/Ⅳa)	長石	-	(4.9)	-	-	良好	7.5YR6/6 (橙)	ナデ	摩滅	-
	45	2021(F-13/Ⅳa) 2913(E-15/Ⅳa) 2622(E-15/Ⅳa) 3207(E-15/Ⅳa)	長石、石英、角閃石	(44.0)	(7.7)	-	-	不良	10YR5/3 (にぶい黄褐色)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-
23	46	2462(D-17/Ⅳa) 2544(E-16/Ⅳa)	長石、石英、角閃石	-	(4.6)	-	-	良好	5YR3/2 (暗赤褐色)	ケズリ	ミガキ	突帯上面丁寧なナデ
	47	2354(E-17/Ⅳa)	石英、角閃石	-	(4.6)	-	-	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	ナデ	ケズリ後ナデ	-
	48	3649(G-17/Ⅳa) 3650(G-17/Ⅳa)	長石、石英	-	(7.6)	-	-	良好	2.5Y2/1 (黒)	ケズリ	ナデ	-
	49	3639(F-17/Ⅳa)	長石、石英	-	(5.0)	-	-	良好	2.5Y5/2 (暗灰黄)	ナデ	粗いナデ	-
	50	3384(F-18/Ⅳa)	砂粒、角閃石	-	(4.9)	-	-	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ナデ	ミガキ後ナデ	-
	51	2919(D-17/Ⅳa) 2994(D-17/Ⅳa)	長石、石英、角閃石	-	(4.4)	-	-	良好	10YR4/1 (褐灰)	ナデ	丁寧なナデ	-
	52	2604(E-16/Ⅳa) 3710(G-16/Ⅳa)	長石、角閃石	(31.0)	(8.1)	-	-	不良	5YR5/6 (明赤褐色)	ナデ	ケズリ後ナデ	-
	53	2389(E-17/Ⅳa) 2393(E-17/Ⅳa) 2503(E-16/Ⅳa) 3259(E-17/Ⅳa) 3263(E-17/Ⅳa)	赤色粒、石英、長石、角閃石	-	(2.7)	8.6	-	不良	5YR6/6 (橙)	ナデ	ケズリ後ナデ	-
	54	2456(D-17/Ⅳa)	石英、砂粒	-	(2.1)	7.6	-	不良	2.5YR5/6 (明赤褐色)	ミガキ	ミガキ	-
	55	2471(D-17/Ⅳa) 2998(D-17/Ⅳa)	長石、石英	-	(2.5)	10.0	-	不良	5YR4/8 (明赤褐色)	ナデ	ナデ	-
	56	1071(D-11/Ⅳa) 2985(D-17/Ⅳa)	長石、石英	-	(2.0)	11.0	-	不良	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ナデ	摩滅	-
	57	1551(F-13/Ⅳa) 1981(E-11/Ⅳa)	石英	-	(2.1)	10.0	-	不良	2.5Y5/6 (明褐色)	ナデ	ミガキ	-
	58	2451(D-17/Ⅳa)	砂粒	-	(2.2)	8.0	-	不良	5YR5/6 (明赤褐色)	ナデ	ケズリ	-
	59	3407(F-17/Ⅳa) 3413(F-17/Ⅳa)	砂粒	-	(3.2)	7.4	-	不良	5YR5/6 (明赤褐色)	ナデ	ケズリ	-
	60	1542(D-4/Ⅳ)	長石、石英	28.5	(3.0)	-	-	不良	7.5Y2/1 (黒)	ミガキ	ナデ	口縁部スス付着
	61	2480(E-16/Ⅳa)	石英	32.0	(3.8)	-	-	不良	7.5YR5/6 (明褐色)	ミガキ	ナデ	-
	62	2467(D-17/Ⅳa)	長石	18.4	(6.4)	-	-	不良	5YR5/6 (明赤褐色)	ナデ	ナデ	-
24	63	2350(E-18/Ⅳa)	長石、石英	43.6	(17.0)	-	-	不良	10YR7/6 (明黄褐色)	ケズリ後ナデ	条痕	-
	64	3499(F-14/Ⅳa) 3499(F-14/Ⅳa) 3532(F-14/Ⅳa) 3601(F-14/Ⅳa)	砂粒	45.0	(11.4)	-	-	不良	10YR7/6 (明赤褐色)	ミガキ	ナデ、指押さえ	-

2，石器

石鏃（第26図　65～77）

13点の石鏃を掲載した。全て打製石鏃で，65は Ⅶ層，外は全てⅣ層出土の石鏃で，石材は黒曜石，チャート，頁岩，玉髄を使用する。

基部調整法によって凹基・平基の２種に分けることができる。

凹基は11点で，えぐりの深いものと浅いものに大別できるが，浅いものが多い。66～74のえぐりは浅く丸みをおびており，67は一部に自然面を残すものの，どれも丁寧な二次加工を施す。73，74は長さの割に幅の狭い長二等辺三角形を呈するが，先端部はやや鈍角となる。76，77は深いえぐりをもち，脚部が細い。いずれも調整は細かく丁寧である。

65，75は平基の石鏃で，65は主要剥離面を残さない丁寧な調整を施すが，75は自然面，主要剥離面を残し，調整も粗く未製品の可能性もある。

微細剥離痕剥片（第26図　79，80）

79は玉髄製，81はチャート製で，いずれも縁辺部を中心に使用痕と思われる微細な痕跡がみられる。

二次加工剥片（第26図　78，81　第28図　93）

78，81，93は二次的な調整痕が認められる加工品として抽出した。78は菱形の断面形を呈しており，加工の状態から楔形石器の可能性もある。81は黒曜石製で，正面下端，および裏面側縁部に調整が明瞭にみられる。93は頁岩製で，正面が主要剥離面の可能性もあるが，作図の関係上表示している。裏面の両側縁に平坦な二次加工が認められ，先端部は直線的となり，ヘラ状石器，あるいは楔形石器的機能も認められる。

石核（第26図　82，83）

82はチャート製，83は黒曜石製の石核で，83は頻繁に打面転移を繰り返す。

打製石斧（第27図　84，85）

84，85は扁平な頁岩の素材剥片を使用した打製石斧であり，Ⅳ層から出土している。

形状は，84は上部の一部を欠損する。中央部がやや厚く，縁辺部にいくほど薄くなっている。85は全体的に薄く，扁平である。両者とも扁平な素材を活かし素材の周縁部を加工して使用しており，研磨した痕は確認することができない。

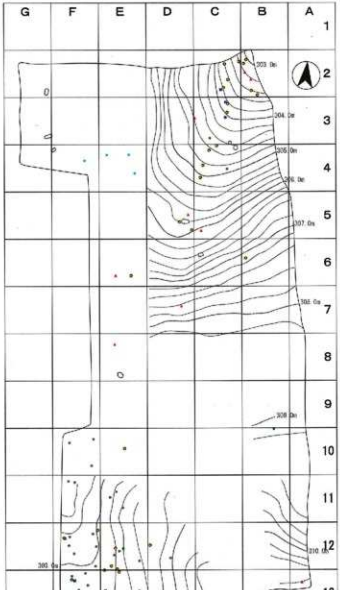
磨石，敲石，石皿類

本遺跡から，出土した磨石，敲石，石皿類のうち，磨石・敲石３点，敲石１点，磨石１点，凹石１点，石皿１点を資料化した。石材には，輝石安山岩，砂岩が使用されている。

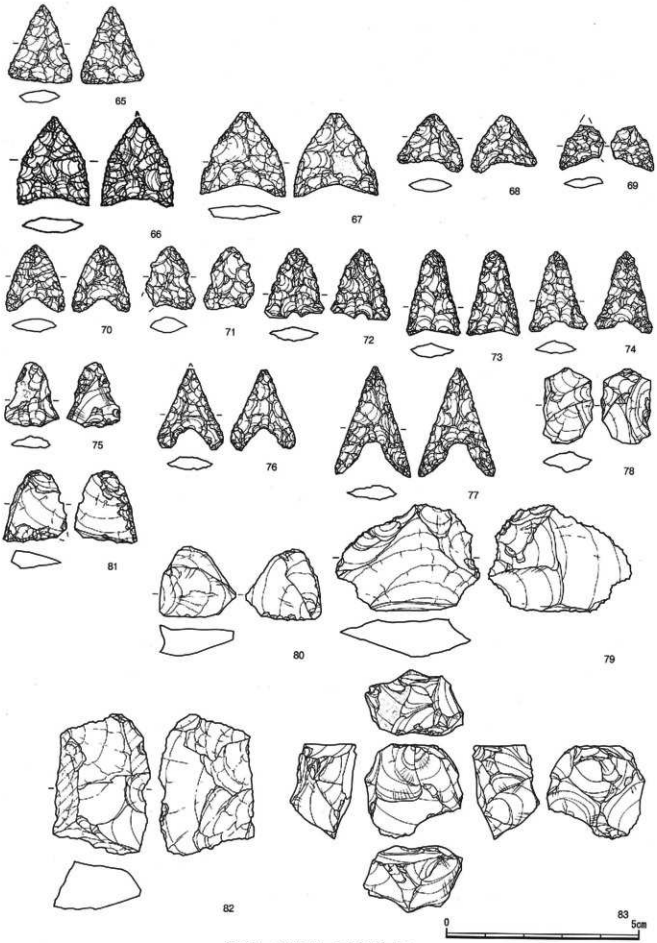
86，87がⅦ層出土で他はすべてⅣ層である。

凹石(第27図　86)

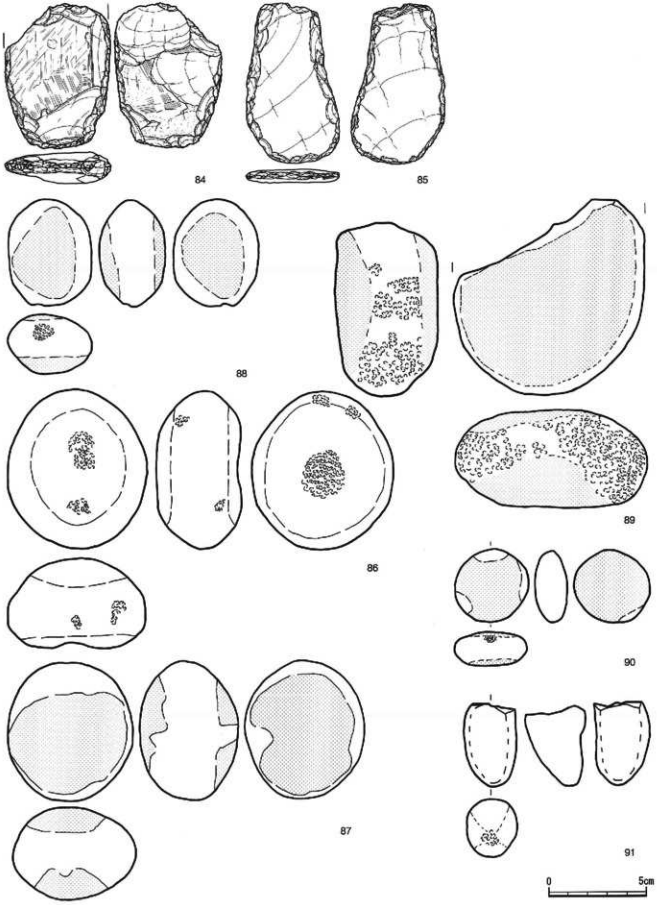
86は，円礫を使用した凹石である。表面中央部，縁辺部，側面部に敲打痕がみられ，表面中央部がやや円形にくぼんでいるのが確認できる。この資料は，表面が赤



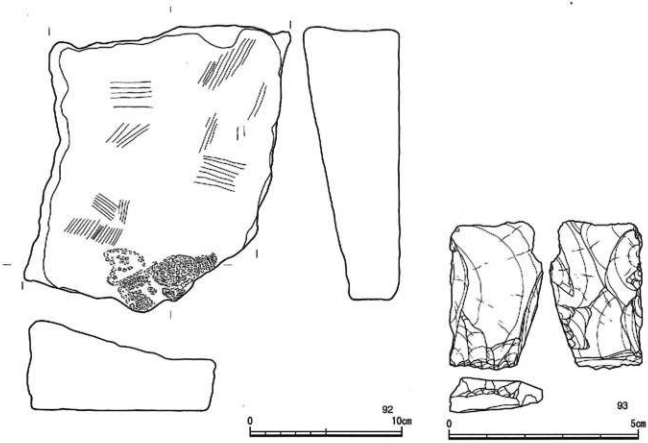
第25図　縄文時代出土石器分布図(S=1/800)



第26図　縄文時代　石器実測図(1)



第27図　縄文時代　石器実測図(2)



第28図　縄文時代　石器実測図(3)

化しており，被熱により，赤化したのではないかと考えられる。

磨石(第27図　87)

87は，円礫を使用した磨石で，断面形は楕円を呈する。表面全般に磨面が形成されているのが確認でき，表面及び側面部には敲打面は確認できない。

磨石・敲石類(第27図　88～90)

円，亜円礫を使用し，磨面および敲打面が形成される石器である。88，90は円礫を使用し，表面に磨面が作られ，側面部には部分的に敲打面が形成されている石器である。88は下方部に敲打面が発達しているのが確認でき，90は表面が全般的に磨面になっているのが確認できる。

89は，先述した磨石敲石類よりもやや大型の円礫を使用した磨石・敲石で，途中で破損しており，断面形は楕円を呈する。表面全般に磨面が形成されているのが確認でき，側面部には，多くの敲打面を確認することができる。特に，右下側面部に，敲打痕が集中しているのを確認することができ，この部分を頻繁に使用していたのではないかと考えることができる。

敲石(第27図　91)

91は，柱状の礫を使用した石器である。途中で破損しているため形状は指状になっている。平面形は楕円を呈している。先端部に敲打痕を確認することができる。磨面は確認できない。

石皿(第28図　92)

92は，大型の扁平礫を使用した石皿である。破損しているが3分の2以上は残存していると思われる。礫の傾斜面を利用して，使用された痕跡がみられる。下方部に敲打痕が集中しているのを確認することができる。

第８表　縄文時代　石器観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区／層)	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
26	65	3900(D-16/Ⅶ)	石鏃	玉髄	20.9	16.0	3.5	0.87	-
	66	255(D-5/Ⅳ)	石鏃	o b	24.0	19.0	4.0	1.45	-
	67	3307(F-17/Ⅳa)	石鏃	黄岩	22.0	22.0	3.1	1.13	-
	68	1430(B-2/Ⅳa)	石鏃	黄岩	14.7	16.7	3.3	0.61	-
	69	1428(B-2/Ⅳa)	石鏃	o b	(12.0)	(11.3)	(2.1)	(0.27)	-
	70	1517(D-3/Ⅳa)	石鏃	チャート	17.3	15.3	3.9	0.65	-
	71	2477(E-16/Ⅳa)	石鏃	チャート	(16.7)	(13.4)	(3.9)	(0.70)	-
	72	3618(F-17/Ⅳa)	石鏃	o b	18.7	16.0	3.9	0.73	-
	73	3433(F-15/Ⅳa)	石鏃	チャート	22.7	14.0	4.3	0.91	-
	74	3417(F-17/Ⅳa)	石鏃	チャート	22.0	15.3	3.5	0.66	-
	75	1419(B-2/Ⅳa)	石鏃	o b	16.7	14.7	1.2	0.50	-
	76	1324(A-13/Ⅳa)	石鏃	黄岩	(21.3)	17.3	3.9	(0.63)	-
	77	3534(F-14/Ⅳa)	石鏃	チャート	28.7	20.0	3.1	0.94	-
	78	3389(F-17/Ⅳa)	二次加工剥片	チャート	20.0	13.3	4.2	1.18	-
	79	3376(F-18/Ⅳa)	微細剥離痕剥片	玉髄	28.0	37.3	9.0	8.12	-
	80	3355(E-17/Ⅳa)	微細剥離痕剥片	チャート	18.0	19.3	7.7	2.60	-
	81	一括(E-11/X)	二次加工剥片	o b	19.3	(16.0)	(3.2)	(1.00)	-
	82	3342(E-17/Ⅳa)	石核	チャート	36.7	26.0	11.6	10.31	-
	83	2404(E-17/Ⅳa)	石核	o b	24.7	26.0	13.5	9.35	-
27	84	1466(C-3/Ⅳa)	石斧	黄岩	(77.0)	54.0	(15.0)	(72.36)	-
	85	1475(C-3/Ⅳa)	石斧	黄岩	53.0	50.0	6.0	38.13	-
	86	3914(D-15/Ⅶ)	台石	砂岩	63.5	75.0	45.0	340.0	-
	87	3913(D-15/Ⅶ)	敲石	砂岩	72.5	64.5	49.0	300.0	-
	88	1344(B-10/Ⅳa)	磨石/敲石	輝石安山岩	54.0	44.0	32.0	105.0	-
	89	964(E-12/Ⅳa)	磨石/敲石	輝石安山岩	(90.0)	(97.0)	(52.0)	(740.0)	-
	90	76(E-6/Ⅳ)	磨石/敲石	輝石安山岩	40.0	38.0	18.0	40.0	-
	91	2406(E-17/Ⅳa)	敲石	輝石安山岩	(45.0)	(27.0)	(30.0)	(45.0)	-
28	92	2754(E-14/Ⅳa)	石皿	輝石安山岩	(178.0)	(146.5)	(59.0)	(3110.0)	-
	93	3722(G-16/Ⅳa)	二次加工剥片	黄岩	38.7	24.7	6.4	7.90	早期

第Ⅳ章　古代の調査

第１節　調査の方法と概要

古代の調査は，10m四方のグリッドを設定し，Ⅲ，Ⅳ層を中心に全面発掘調査を行った。古代の遺構はⅣa，Ⅳb層で検出し，遺物はⅢ層下部からⅣa層上面で大半が出土する傾向を確認している。

遺構は掘立柱建物跡，ピット（柱痕を含む），焼土跡，土坑，古道，火葬墓（蔵骨器埋納遺構）を検出している。掘立柱建物跡は調査区南側の丘陵平坦部で４棟，土坑は南側の丘陵を中心に10基，焼土は４基検出した。焼土の１基は掘立柱建物跡に付随する可能性が高い。また，建物跡と認定できないピット（柱痕）を多数検出したが，本報告では検出状況を平面図で記録するにとどめた。

第２節　古代の遺構

１，掘立柱建物跡

Ｅ・Ｆ-13～15区の狭いエリアより４棟検出した。建物周辺は平坦面をなし，遺跡内では安定した地形である。

２間×３間が３棟，２間×２間が１棟である。規格性の認められる柱痕から判断したもので，上屋構造は復元できない。床面積は最小8.40㎡，最大25.58㎡で均一性がない。梁間平均は334.38cm，桁行平均は475.25cmである。柱痕の平面形は楕円形もしくは円形，断面は矩形状，底面は平坦もしくは丸味を帯びる。平面の長径平均は27.63cm，短径平均は22.95cm，深さの平均は43.35cmである。掘立柱建物跡を中心としたエリアでは，土師器食膳具を中心に赤彩・黒色土器や須恵器，さらに焼塩壷の小片等が多数出土した。調査区Ｆ-12～14区のエリアでの遺物出土の空白域は，現代の耕作による攪乱によるものである。

①１号掘立柱建物跡（第30図）

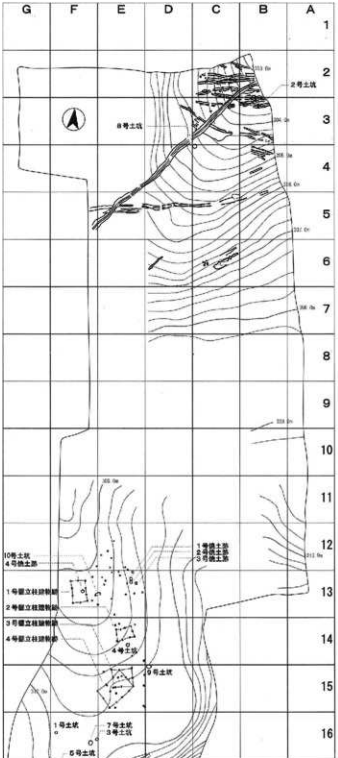
Ｆ-13区，Ⅳb層上面で検出し，主軸を南北，柱並びが４棟中最も整っている。ピットの深さの平均は４棟中で最も浅く，24.5cmである。ピットの平面形は楕円形が多く，断面は矩形状を基本とするが丸味をなすものもある。身舎中央からややずれた位置で４号焼土を検出した。

<４号焼土>

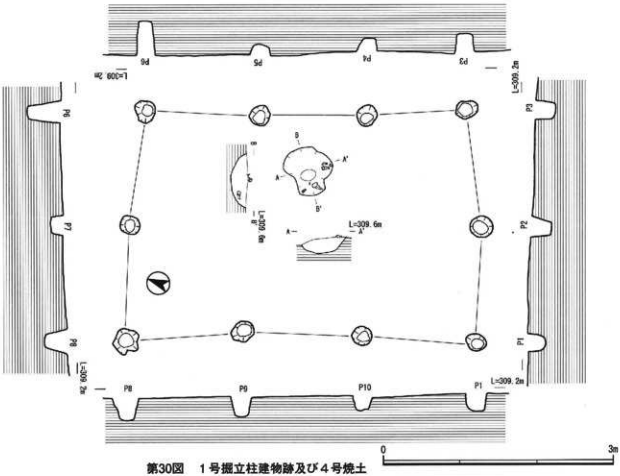
建物跡とは検出面が異なるが，埋土に差異はなく敷設遺構と判断した。平面形は変則的な楕円形，断面はレンズ状，残存状況は被熱によって生じた白桃色の灰とⅣa層の明褐色土が混ざった状態である。

②２号掘立柱建物跡（第31図）

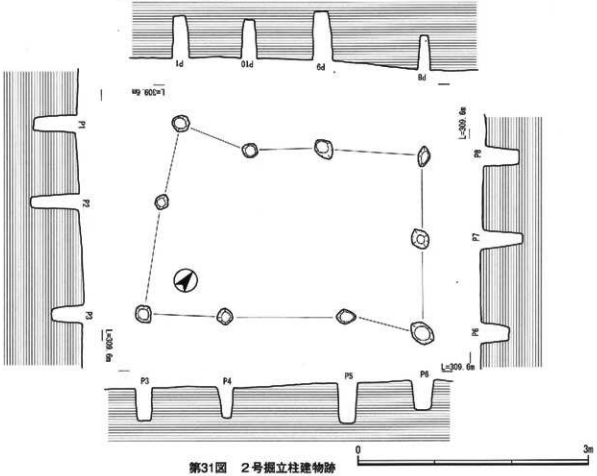
Ｅ-14区，Ⅳb層上面で検出し，主軸を東西にとる。４棟中最も床面積が小さく(8.40㎡)，柱並びは不揃いである。ピットは平面が楕円形で，断面が矩形状になる。南側に４号土坑が隣接する。



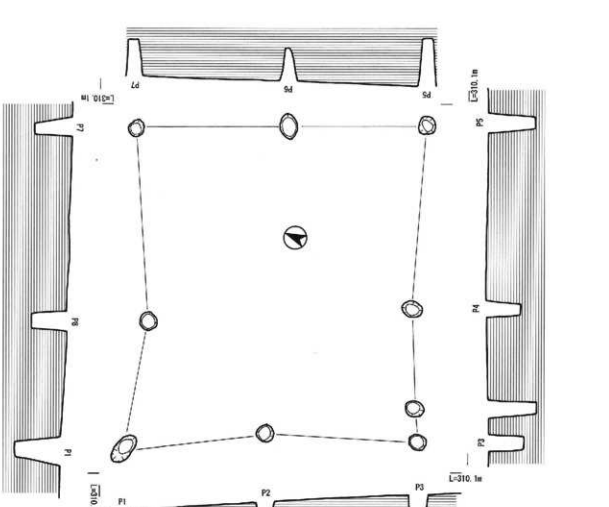
第29図　古代遺構配置図(S=1/800)



第30図　１号掘立柱建物跡及び４号焼土



第31図　２号掘立柱建物跡



第32図　3号掘立柱建物跡

③3号掘立柱建物跡（第32図）

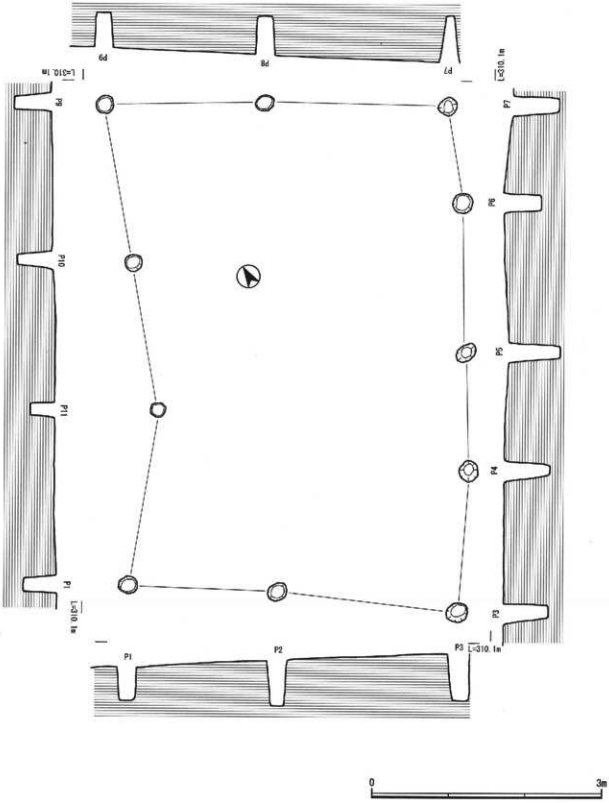
E-15区，Ⅳb層上面で検出し，主軸を東西，柱並びはほぼ直線的で4号掘立柱建物跡と切り合い，ピット2本を共有する。ピットは平面が楕円形で断面は矩形状，検出面とピットの埋土の相違は明確ではないため断定は困難であるが，主軸を基準とした場合，より南北に近い軸をとる4号掘立柱建物跡が先行していた可能性がある。西側約1mに内黒土師器の高台付皿が1点出土したピットがある。

④4号掘立柱建物跡（第33図）

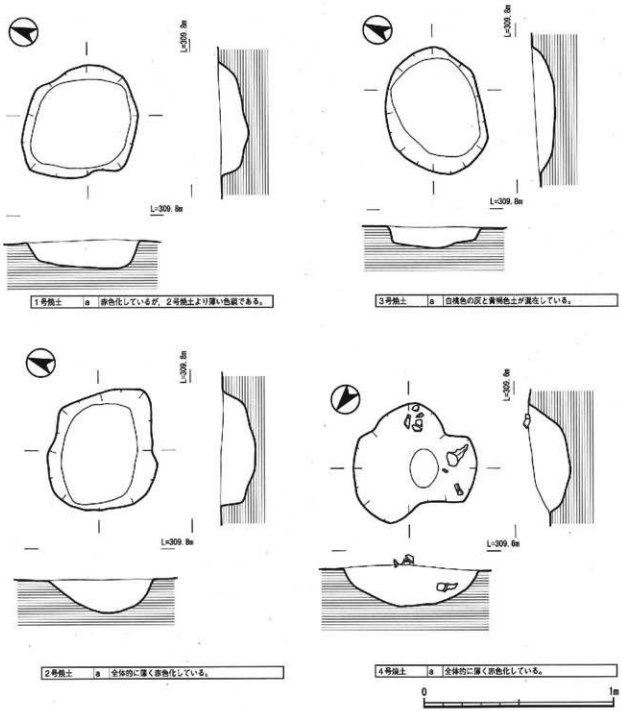
4棟中最大の床面積である(28.58㎡)。E-15区，Ⅳb層上面で検出し，主軸は北東，柱並びは概ね直線的である。ピットの平面形は楕円形もしくは円形，断面は矩形状で底面は平坦である。東側で3号掘立柱建物跡と切り合い接触する。ピットの平面形状は，楕円形と円形がほぼ同数で，内2基が3号掘立柱建物跡と共通する。なお，3号と4号建物のピットの構造上明確な差異は指摘できない。

2，焼土（第34図）

E・F-13区で4基検出し，1号と2号掘立柱建物跡の中間に位置する。4号焼土は1号掘立柱建物跡に付随すると判断したが，他の3基はL字状に並び，長径が60cm前後の円形もしくは楕円形で，被熱深度20cmを超えるものは無い。



第33図　4号掘立柱建物跡



第34図　1,2,3,4号焼土

①1号焼土

E-13区，Ⅳa層上面で検出した。直径約60cmの円形状で被熱により土層が薄く赤化し，また赤化した軽石の小片も含んでいる。隣接して2号焼土を検出し，並列した可能性も想定できる。

②2号焼土

E-13区，Ⅳa層上面で検出し，1号焼土と形状が類似する。全体的に薄く赤化し，上部には黒色化した炭化物を10個程度含んでいた。

③3号焼土

E-13区，Ⅳa層上面で，1号焼土より約70cm東側で検出した。土層が被熱により薄く赤化し，同じく赤化した軽石の小片を含んでいる。

3，土坑（第35～37図）

Ⅲ層下面からⅣa層上面で，10基検出した。検出エリアは調査区北端部と南部の2地点に分けられる。両地点とも緩や

第９表　掘立柱建物跡観察表

1号掘立柱建物跡(第30図)

2間	梁間総間(cm)	梁間間(cm)	3間	桁行総間(cm)	桁行間(cm)	主軸方位	Pit No	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	Pit 掘り方	埋土色調	床面積(m²)	備　考
P8−P7	160	316	P8−P9	128	438	N21° W	1	24	26	21	楕円	暗茶褐色土	15.04	東側に10号土坑が隣接する
P7−P6	156		P9−P10	142			2	26	30	30	円	暗茶褐色土		
P1−P2	154	306	P10−P1	168			3	27	27	23	楕円	暗茶褐色土		
P2−P3	152		P3−P4	170	476		4	17	27	23	楕円	暗茶褐色土		
			P4−P5	158			5	15	25	24	方形	暗茶褐色土		
			P5−P6	148			6	44	29	27	楕円	暗茶褐色土		
							7	17	26	24	方形	暗茶褐色土		
							8	30	35	30	楕円	暗茶褐色土		
							9	27	31	25	楕円	暗茶褐色土		
							10	19	26	26	円	暗茶褐色土		
	155.5	311		152.3	457	平均		24.5	28.2	25.3				

2号掘立柱建物跡(第31図)

2間	梁間総間(cm)	梁間間(cm)	3間	桁行総間(cm)	桁行間(cm)	主軸方位	Pit No	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	Pit 掘り方	埋土色調	床面積(m²)	備　考
P8−P7	110	236	P8−P9	135	306	N57° E	1	53	23	23	円	暗茶褐色土	8.40	南側に４号土坑が隣接する
P7−P6	126		P9−P10	95			2	61	22	17	楕円	暗茶褐色土		
P1−P2	108	258	P10−P1	106			3	32	37	23	楕円	暗茶褐色土		
P2−P3	150		P3−P4	106	370		4	39	25	21	楕円	暗茶褐色土		
			P4−P5	160			5	51	26	21	楕円	暗茶褐色土		
			P5−P6	104			6	35	36	25	楕円	暗茶褐色土		
							7	50	29	23	楕円	暗茶褐色土		
							8	45	28	17	楕円	暗茶褐色土		
							9	65	30	22	楕円	暗茶褐色土		
							10	51	21	20	円	暗茶褐色土		
	123.5	247		117.7	336	平均		48.2	26.3	20.8				

3号掘立柱建物跡(第32図)

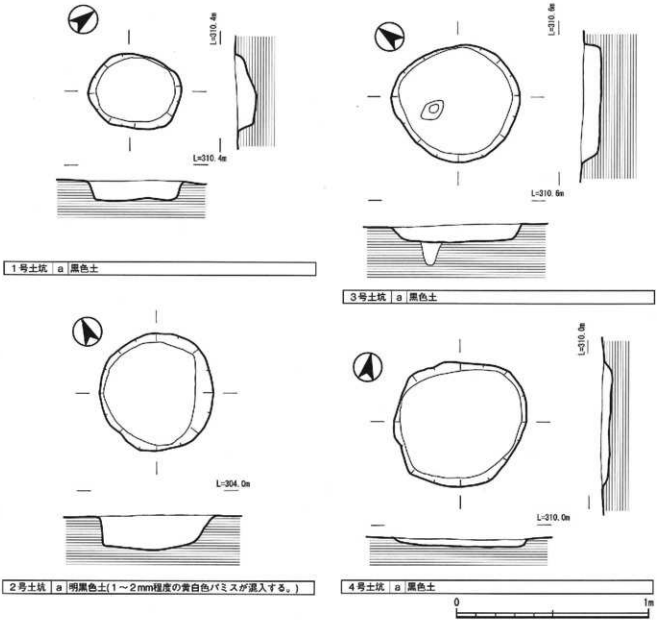
2間	梁間総間(cm)	梁間間(cm)	2間	桁行総間(cm)	桁行間(cm)	主軸方位	Pit No	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	Pit 掘り方	埋土色調	床面積(m²)	備　考
P7−P6	199	384	P7−P8	260	433	N79° E	1	60	44	23	楕円	暗茶褐色土	16.34	４号掘立柱建物跡と切り合い、ピット２基共通する
P6−P5	185		P8−P1	173			2	45	24	22	円	暗茶褐色土		
P1−P2	182	380	P3−P4	173	421		3	42	24	21	楕円	暗茶褐色土		
P2−P3	198		P4−P5	248			4	45	28	22	楕円	暗茶褐色土		
							5	62	26	25	楕円	暗茶褐色土		
							6	45	37	23	楕円	暗茶褐色土		
							7	48	26	20	楕円	暗茶褐色土		
							8	47	26	23	円	暗茶褐色土		
	191	382		213.5	427	平均		49.3	29.4	22.4				

4号掘立柱建物跡(第33図)

2間	梁間総間(cm)	梁間間(cm)	4間?	桁行総間(cm)	桁行間(cm)	主軸方位	Pit No	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	Pit 掘り方	埋土色調	床面積(m²)	備　考
P9−P8	210	450	P9−P10	213	646	N33° E	1	43	26	23	円	暗茶褐色土	28.58	３号掘立柱建物跡と切り合い、ピット２基が共通する
P8−P7	240		P10−P11	198			2	59	29	24	楕円	暗茶褐色土		
P1−P2	195	434	P11−P1	235			3	58	30	26	楕円	暗茶褐色土		
P2−P3	239		P3−P4	194	712		4	49	28	25	楕円	暗茶褐色土		
			P4−P5	153			5	67	31	20	楕円	暗茶褐色土		
			P5−P6	197			6	50	28	27	円	暗茶褐色土		
			P6−P7	178			7	62	26	25	円	暗茶褐色土		
							8	53	27	22	楕円	暗茶褐色土		
							9	47	26	23	円	暗茶褐色土		
							10	45	24	22	円	暗茶褐色土		
							11	32	21	20	円	暗茶褐色土		
	221	442		194	579	平均		51.4	26.6	23.3				

第10表　焼土観察表

検出区番号	遺構番号	検出区/層	最大幅(cm)	最短幅(cm)	焼成深度(cm)	備　考
34	1号焼土	E-13/Ⅱa	59	58	14	２号と極めて近く、形状等も類似している。
	2号焼土	E-13/Ⅱa	63	55	18	赤変した小さな軽石が共伴する
	3号焼土	E-13/Ⅱa	66	48	10	赤変した小さな軽石が共伴する
	4号焼土	F-13/Ⅱa	65	58	20	３Ｂ１内検出、軽石、土器片が共伴する
平　均			63.3	54.8	15.5	



第35図　1,2,3,4号土坑

かな傾斜地で，8基は南部にあり，掘立柱建物跡4棟の検出エリアに隣接している。堀土は主として皿層黒色土で，色調等は図版に併載した。形状は1基を除いて，平面が円形もしくは楕円形で，長径の平均が79.2cm，短径の平均が66.8cmである。掘り込みは浅く4～27cmで，平均では16.7cmとなる。

①1号土坑

F-16区，Ⅳa層上面で検出し，平面形は楕円形で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。全土坑中，最小径である。

②2号土坑

B-3区，Ⅲ層で検出し，同層で検出した古道の硬化面掘削後に検出した。平面形は円形で，壁はほぼ垂直に立ち上がるが掘り込み深度は浅い。調査区の最北端に位置する。

③3号土坑

E・F-16区，Ⅳa層上面で検出し，平面形は円形で壁はほぼ垂直に立ち上がるが掘り込み深度は浅い。床はほぼ平坦に仕上げている。

④4号土坑

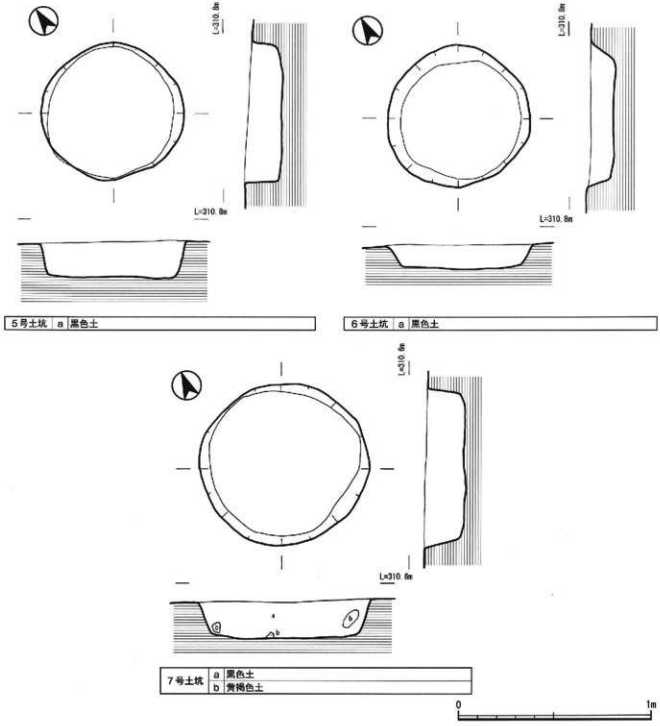
E-14区，Ⅳa層上面で検出した。平面形は楕円形で壁はほぼ垂直に立ち上がり，掘り込み深度は全土坑中最も浅い。床面は平坦で，2号掘立柱建物跡の南側に隣接している。

⑤5号土坑

F-17区，Ⅳa層上面で検出し，平面形は円形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

⑥6号土坑

F-17区，Ⅳa層上面で検出し，平面形は円形で壁はほぼ垂



第36図　5,6,7号土坑

直に立ち上がる。4号土坑と似かよった構造である。

⑦7号土坑

F-16区，Ⅳa層上面で検出し，平面形は円形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は，Ⅲ層の黒色土を主体に一部Ⅳa層がブロック状に混入している。

⑧8号土坑

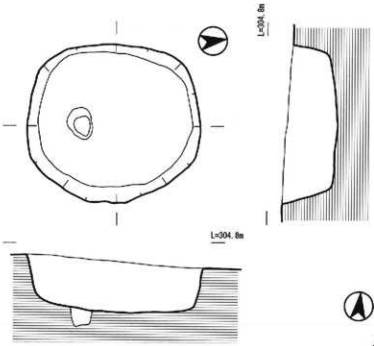
C-3・4区，Ⅳa層上面で検出した。平面形は楕円形で壁はほぼ垂直に立ち上がり，掘り込みは最大約30cmでⅣb層まで達している。

⑨9号土坑

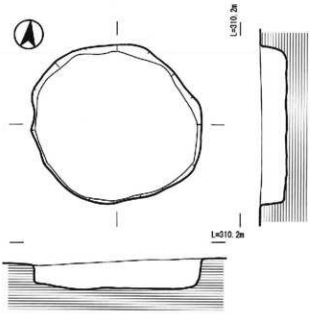
D-15区，Ⅳa層上面で検出した。平面形はほぼ円形で，壁は垂直に立ち上がるが掘り込み深度は約12cmと浅く，床面は平坦である。

⑩10号土坑

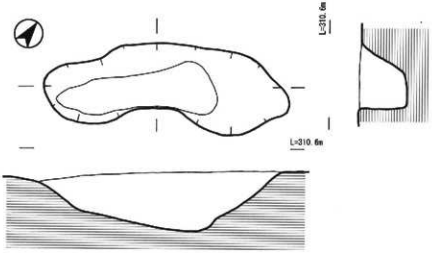
E・F-13区，Ⅳa層で検出した。平面形は変則的な縦長の楕円形で，断面の長軸方向はレンズ状に掘り込みが見られ，



8号土坑	a	黒色土(粘質は無く，1mm程度の黄白色パミスが混入する。)



9号土坑	a	黒色土



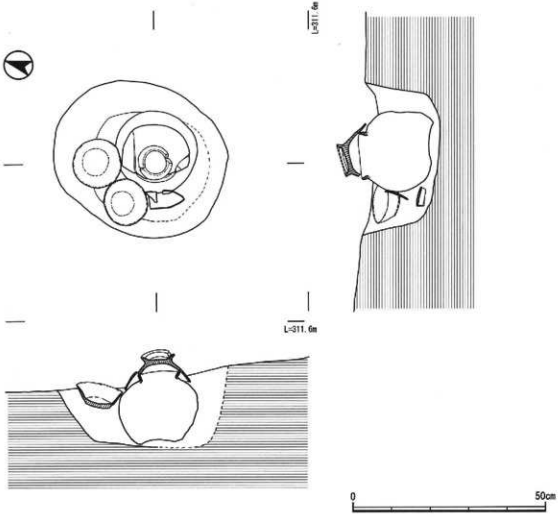
10号土坑	a	黒色土(粘質は無く，1mm程度の黄白色パミスが混入する。)

0 1m

第37図　8,9,10号土坑

第11表　土坑観察表

挿図番号	遺構番号	検出区/層	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
35	1号土坑	F-16/Ⅳa上	49	40	11
	2号土坑	B-3/Ⅲ	63	60	19
	3号土坑	E・F-16/Ⅳa上	67	62	9
	4号土坑	E-14/Ⅳa上	69	67	4
36	5号土坑	F-17/Ⅳa上	75	73	18
	6号土坑	F-17/Ⅳa上	76	75	12
	7号土坑	F-16/Ⅳa上	89	85	20
37	8号土坑	C-3・4/Ⅳa上	91	84	27
	9号土坑	D-15/Ⅳa上	89	88	17
	10号土坑	E・F-13/Ⅳa上	124	34	30
平均			79.2	66.8	16.7



第38図　蔵骨器埋納遺構

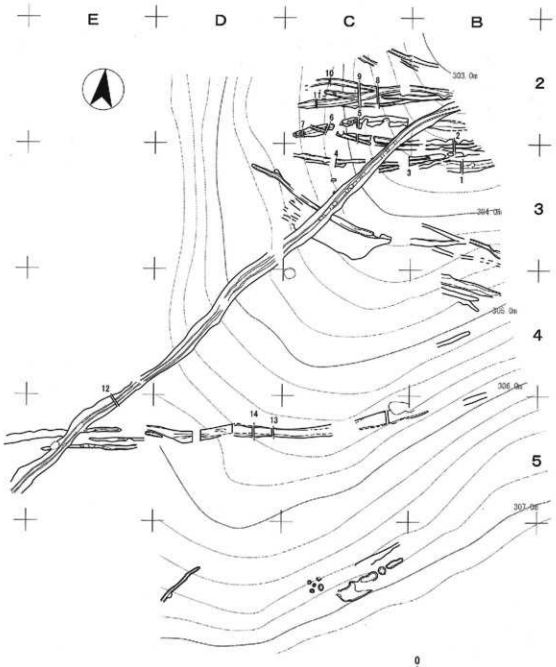
短軸方向は一部垂直に立ち上がる壁が見られる。

4，蔵骨器埋納遺構(第38図)

G-18区，北向きの傾斜地のⅣa層中で検出し，深さ20cmの竪穴状の土坑に埋納されていた。土坑内には須恵器の壺が埋納され，土坑の底面には別個体の須恵器の小破片を伴っていた。壺の口はやや大型の土師器椀で蓋がされており，他に2点の土師器坏が共伴していた。須恵器壺内には覆土が流入し，骨片が納められていた。

5，古道跡(第39～42図)

調査区北側と南側で多数の古道跡を検出した。「古道跡」とは，硬化面を有し，筋状もしくは円形の凹面をある程度連続的に形成するものとした。また，硬化面は有しなくとも，



a	暗灰色硬質土。bより暗色でやや軟質。
b	暗灰色硬質土。白色粒が少し混入し，鉄分集中による縞状の赤色化がわずかに見られる。

a	灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。
b	灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化は見られないが，周辺土より硬化している。

a	灰茶褐色硬質土。底部に御池パミスを多く含む。
b	灰茶褐色硬質土。御池パミスを多く含む。
c	暗灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。
d	灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。
e	暗灰色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。他と比較してやや軟質。

a	灰褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。

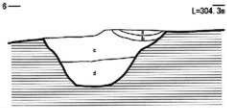
0 1m

第39図　古道跡検出状況図(1)

5 —

a	明黄褐色硬質土。御池火山灰を主体とする硬化面で，御池1次パミスが混入する。
b	灰褐色硬質土。粒径1～2mm程の白色粒を多量に混入する。鉄分集中による赤色化が縞状に見られる。
c	灰茶褐色硬質土。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。
d	鉄分集中による赤色化がわずかに見られるが，C より弱い。
e	明褐色硬質土。Ⅲ層中に御池火山灰がやや混じった状態。底部に鉄分集中による赤色化が見られる。

6 —



a	黄褐色硬質土。御池火山灰を主体とする硬化面。やや軟質。
b	灰褐色硬質土。白色粒を混入し，底部に鉄分集中による赤色化が見られる。
c	黄褐色硬質土。粒径1～2mm程の御池パミスを多く混入し，鉄分集中による赤色化が縞状に見られる。
d	暗灰褐色硬質土。粒径1mm程の白色粒を多く混入する。鉄分集中による赤色化が縞状に見られ，非常に硬化している。

7 —

a	灰褐色硬質土。非常に硬質で鉄分集中による赤色化が縞状に見られる。
b	灰褐色硬質土。非常に硬質で鉄分集中による赤色化が縞状に見られる。下部に御池パミスと砂粒を多く含む。
c	暗灰褐色硬質土。粒径2mm程の白色粒を多く含む硬質土。部分的に鉄分集中による赤色化が見られる。

8 —

a	明茶褐色硬質土。御池火山灰2次とⅢ層土が混じったような土で，白色粒がわずかに混入する。鉄分集中による赤色化が縞状に見られる。
b	暗灰褐色硬質土。白色粒が少量混入する。部分的に鉄分集中による赤色化が見られる。
c	暗灰褐色硬質土。粒径2mm程の黄白色パミスを若干混入する。鉄分集中による赤色化がわずかに見られる。

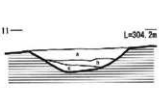
10 —

a	黒色土。Ⅲ層土の混入土。
b	灰褐色硬質土。非常に硬質で砂粒を含む。部分的に鉄分集中による赤色化が見られる。

9 —

a	暗黄褐色硬質土。御池火山灰2次を主体とし，Ⅲ層土と混じりあった土。鉄分集中による赤色化が見られる。
b	白色粒が混入する。鉄分集中による赤色化が見られる。
c	暗黄褐色土。御池火山灰2次の混入土。
d	暗灰褐色土。

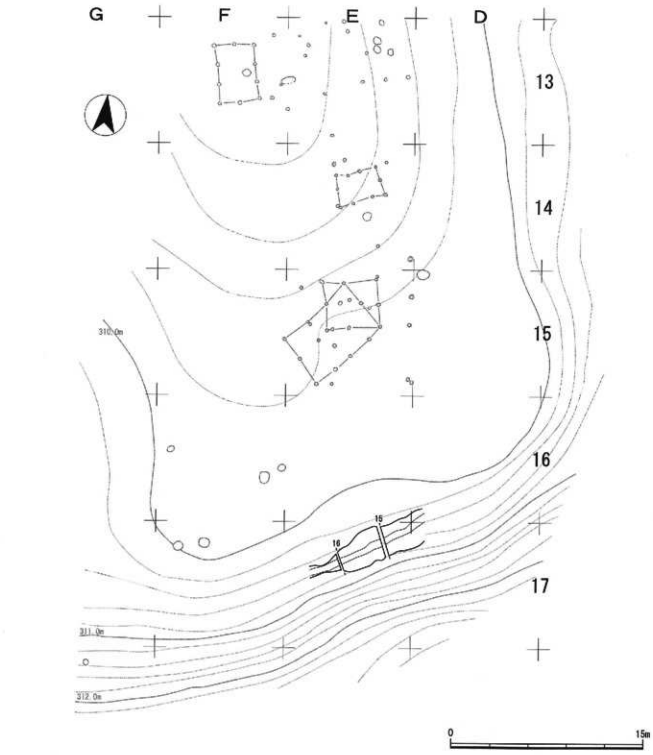
11 —



a	黒色土。Ⅲ層土の混入土。
b	灰褐色硬質土。C と比較しややや軟質であるが硬化している。粒径1mm程の御池パミスがかなり混入している。
c	暗灰褐色硬質土。粒径2mm程の白色粒がわずかに混入する。部分的に鉄分集中による赤色化が見られる。

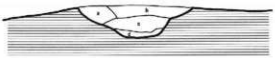
0 1m

第40図　古道跡検出状況図(2)



第41図　古道跡検出状況図(3)

13—

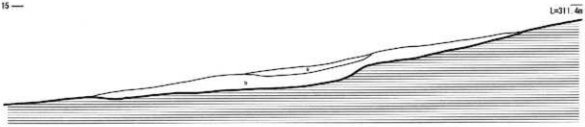


a	茶褐色土。粘質は固く粒径1mm程の黄白色パミスが少し混入する。
b	茶褐色土。aと類似した土色であるが，粒径1mmの黄白色パミスがかなり混入し，非常に硬化している。一部に赤色化も見られる。
c	暗灰褐色土。粘質はなく，粒径1～3mm程の黄白色パミスを混入し，鉄分集中による縞状の赤色化が見られる。
d	暗茶褐色土。Ⅱ～Ⅳ層の漸移層の土色で，一部に赤色化が見られ，粒径2mm程の黄白色パミスを混入する。硬化は弱い。

14—

a	暗灰褐色土。粘質はほとんどなく，粒径1mm程の黄白色パミスを混入し，硬化している。
b	暗灰褐色土。粘質はほとんどなく，粒径1mm程の黄白色パミスを混入し，鉄分集中による縞状の赤色化が見られる。非常に硬化している。

15—



a	黄白色軽石。文明ボラ。
b	黒色土。Ⅲ層の流入土。

16—

a	黄白色軽石。文明ボラ。
b	黒色土。Ⅲ層の流入土。
c	黄褐色土。Ⅳa層の流入土。

0　1m

第42図　古道跡検出状況図(4)

周辺土壌と異なる色調，質感等を有し，筋状に形成されたものも古道跡とした。

発掘調査時には既に削平された部分もあるが，Ⅲ層～Ⅳ層より古道跡を検出しており，いずれもⅡ層の文明ボラ(1471年頃の桜島噴出物)下位であり，遺構の周辺や埋土中から土師器片が出土していることから，概ね古代～中世の時期の遺構と考えられる。

調査区北側の２～３区付近で検出した古道跡は，いずれも複雑に切り合ったり重なり合ったりして東西方向に形成され，畑土層観察からはⅣ層(御池火山灰)に比定されるパミスと鉄分集中による茶褐色を呈した縞目模様の葉理(ラミナ)が多数入る。それらを北東－南西方向に斜めに切る古道跡は直線で40m強を測り，一部の底部に円形凹面(波板状凹凸面)を形成する。

調査区南側の17区付近でも，北東－南西方向に延びる古道跡１条を検出した。山頂に向かって傾斜がきつくなる斜面で等高線に沿うように形成され，その先に存在する巌骨器埋納遺構との関連性が想定できる。

第3節　古代の遺物

Ⅳa層を主体に出土している。確認できる遺物は，土師器（坏，椀，鉢，甕），須恵器（坏，皿，蓋，壺，甕），赤彩・黒色土器（坏，椀，皿，鉢），墨書・刻書土器，焼塩壺，紡錘車，鉄製品である。

1．土師器坏・椀(第44図)

平底を坏，高台坏を椀とする。

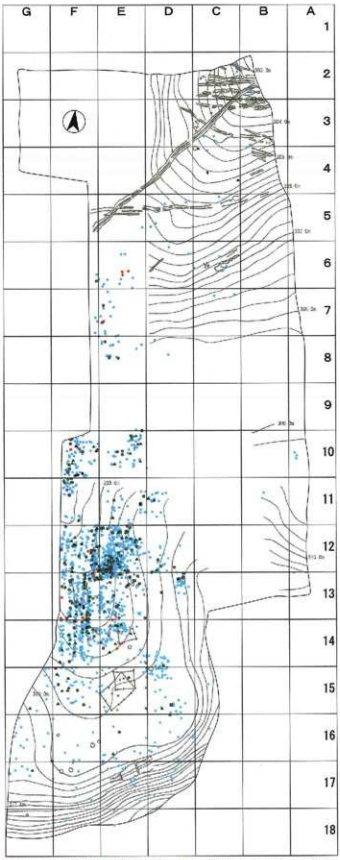
1～29は土師器坏である。底部は突出のない平底でいわゆる充実高台はみられない。わずかに底部の突出するものはあるが少数である(24，25)。器高は4cm前後が多く5cm前後の深手のものは認められない。以上から形態差の比較的少ない状況が指摘できる。

口径は10～14cmの中に集約されるが，11～12cmが多い。色調は浅黄橙色と橙色がみられ，大部分が浅黄橙色である。形態は箱形を呈するものと体部傾斜の強いものが認められるが，法量，製作技法で差異がみられないことから時期的な差はないものと考える。

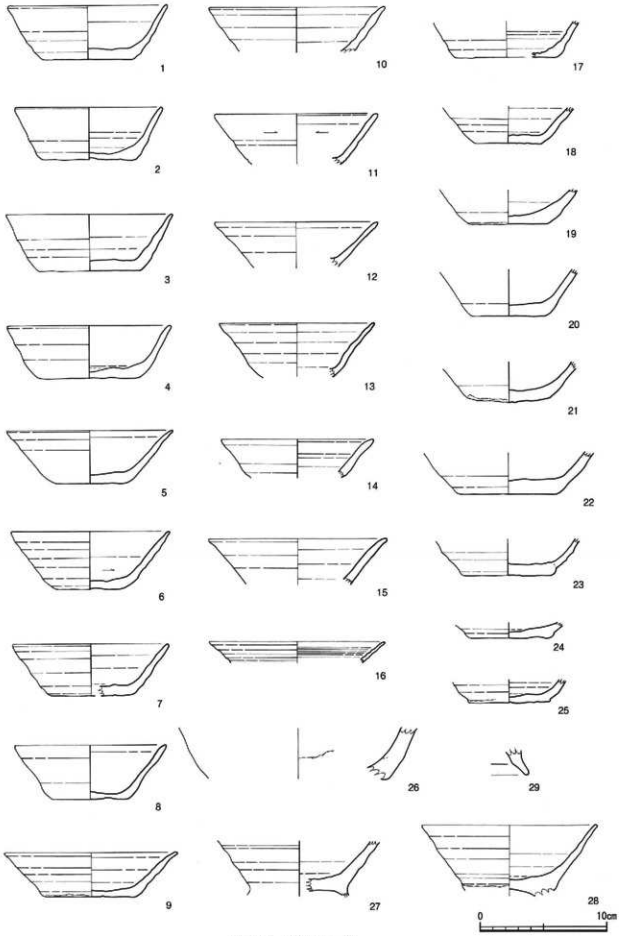
1～4は箱形を呈し，体部外面下端の未調整はみられない。1は橙色を呈し砂礫を多く含み，見込みには静止状態でのナデ，底部外面にはヘラ切りが消し切れず残される。2は内外面は丁寧なナデ，底部の断面は焼成不良により暗元色を呈す。4はやや厚手で，底部外面に板状の圧痕があり，見込みには強い指ナデがみられる。5は脆弱な器面である。6は橙色を呈し，体部の外面で右方向への砂粒の動きが観察され，凹凸のナデは均等に口縁部まで施される。7は体部外面の一部が剥離するが，丁寧なナデを施し，体部外面から底部は部分的に黒化している。8は橙色を呈し，器表面に砂粒の抜けた孔がみられる。底部外面には右回りのヘラ切り痕が観察される。9は体部の傾斜が強く，体部内外面に凹凸のあるナデを施す。

10～16は体部から口縁部である。11は砂粒を多く含み，外面は右方向，内面は左方向に砂粒の動きが観察される。12の器壁は薄く，硬質である。13は砂粒を多く含み，器面は精緻である。16は器壁が薄く，体部内外面に凹凸のあるナデがみられる。

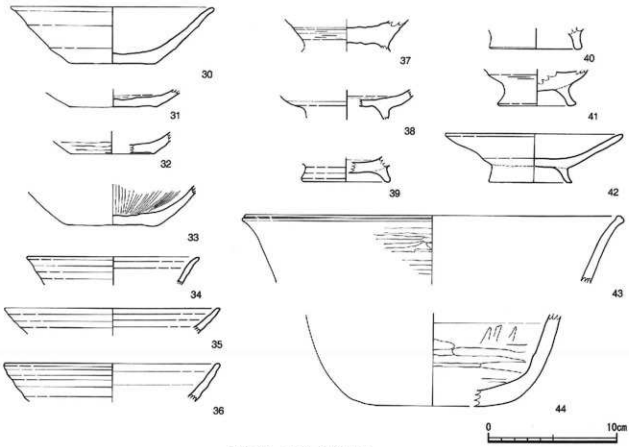
17～25は底部で，17～23は平底，24，25が突出気味の底部である。18，23は体部の一部に炭化物が付着しているが，断面にも認められることから廃棄後の付着と判断する。18，19は体部外面下端に未調整部分がみられる。21は硬質で，体部外面下端に未調整部分が残り，ヘラ切り時の粘土がはみ出す。22は大型で，底部外面は丁寧なナデでヘラ切り痕を完全に消し，見込みには静止状態でのナデを密に施す。23は体部外面下端から丁寧なナデがみられ，底部と体部の接合線は断面で観察でき，内面の底部と体部の境には強いナデを認める。24は体部外面下端に沈線状の強いナデがみられ，見込みの中央は強い指押さえによりその部分の器壁は薄い。25は橙色で，全体的に丁寧なナデによってヘラ切り痕は消され，胎土に白色の細砂を多く含む。



第43図　古代遺物出土状況図(S=1/800)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

第44図　土師器坏・椀



第45図　赤彩・黒色土器

26は残存状態から器種の断定はできないが，大型鉢の可能性が高い。色調は浅黄橙色を呈し，内面にはハケ状の痕跡がみられ，器面が一部黒化しているが，接合ラインで分かれるため破損後の付着と判断する。

27～29は椀で，27，28は高台を欠損する。27は外面にナデによる強い凹凸が，見込みには不整方向のナデが密にみられ，体部外面下端には高台の接合線が観察される。27は白色気味の浅黄橙色を呈する。29は高台で，内面に変化点がある。

2．赤彩・黒色土器(第45図)

赤彩土器は図化した2点(30，31)で，黒色土器は全て内黒である。器種は平底と高台付があり，他に鉢が2点確認できる。

30は赤彩土器で，口径が15.8cmと大きく，全面にミガキがあり，体部立ち上がりが若干曲線的である。31も赤彩土器で，剥離が著しいが全面に赤色を呈し，底部外面にまでミガキが認められる。

32，33は平底である。32は外面に横方向のミガキを施し，体部と底部の境界部分が高台状に若干突出し，底部外面を含め全面にミガキが施されている。33は内面に放射状のミガキを施し，外面は底部外面にまでミガキが認められ，底部外面は部分的に黒化している。

34～36は口縁部で，34の口縁部は外反する。35，36は同じ厚さで端部に至り，外面にナデやケズリを認める。

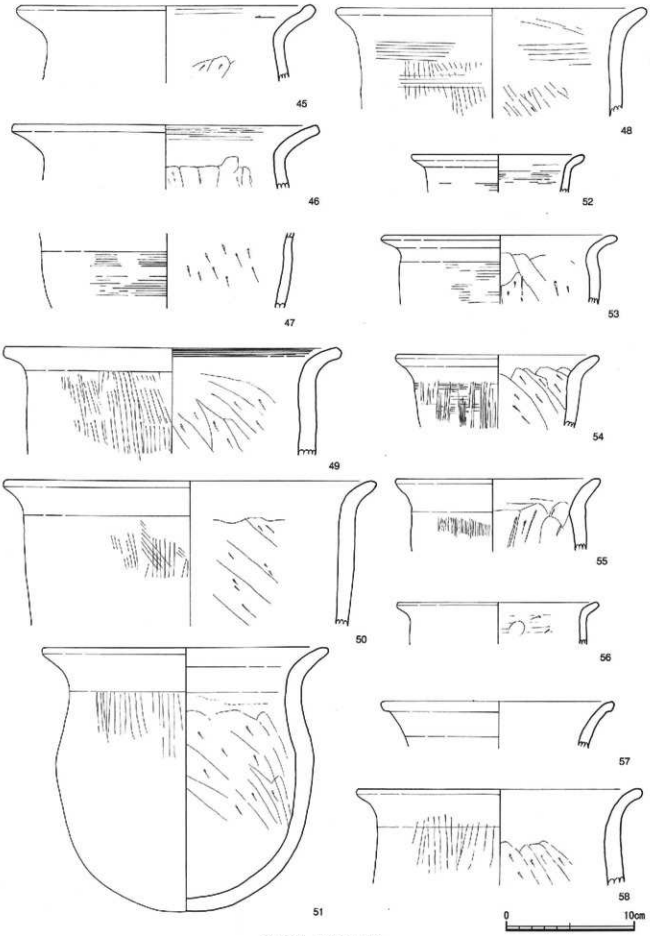
37～41は椀で，37，38は口縁部を欠損する。37は外面にケズリがみられる。38は橙色を呈し硬質で，内面は剥離のため判然としないが外面には丁寧なナデが施されている。39は外反する高台で端部を丸く納める。40，41は端部を平坦にし，41は外面にケズリを認める。42は高台付皿で，高台底部に回転ナデがみられる。

43の外面は横方向にミガキが主体で，口縁端部は平坦で若干肥厚し外反気味である。44は鉢の底部から体部で，底部から丸味をなし体部に至る。外面は剥離のため調整が判然としないがミガキは確認され，内面は横方向のミガキを施し，黒化処理しているが色調はやや薄く黄灰色を呈する。

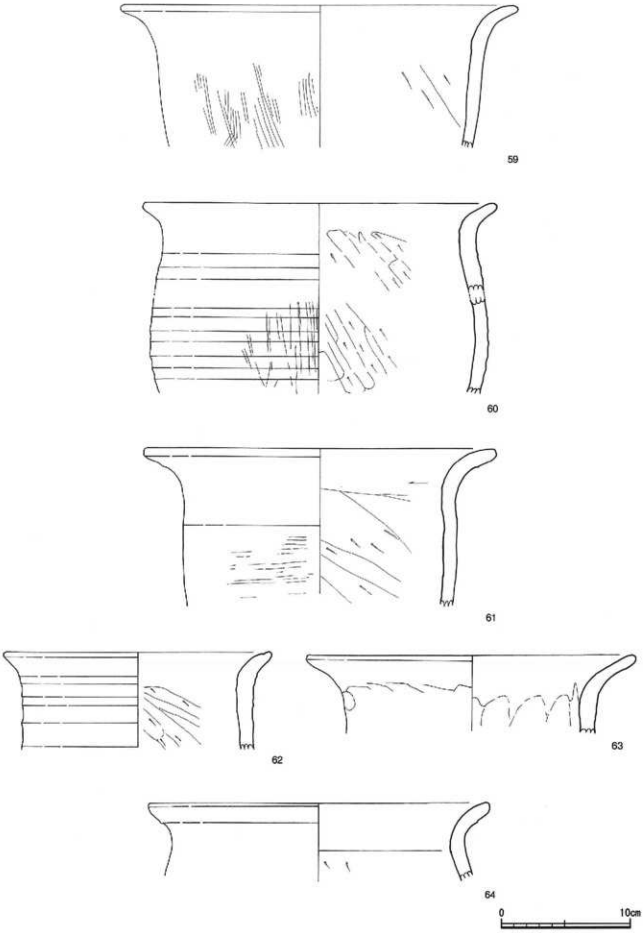
3．土師器壺(第46～49図)

出土遺物の中で最も出土量が多い。本遺跡の土師器壺の特徴，傾向は，①調整技法として外面が縦ハケで浅黄橙色から褐色の色調を呈するものと，②外面がナデ調整のみで褐色を呈するものに大別される。また，全体的に器壁が厚く，口縁部の短いものが一般的である。高篠遺跡で多くみられた砂粒を多く含み横ハケを胴部外面に施すタイプは少量である(47)。また，鉢は確認できない。法量は20cmを境に大型と小型の2種に分類され，小型は外面にハケを施すものが多い。

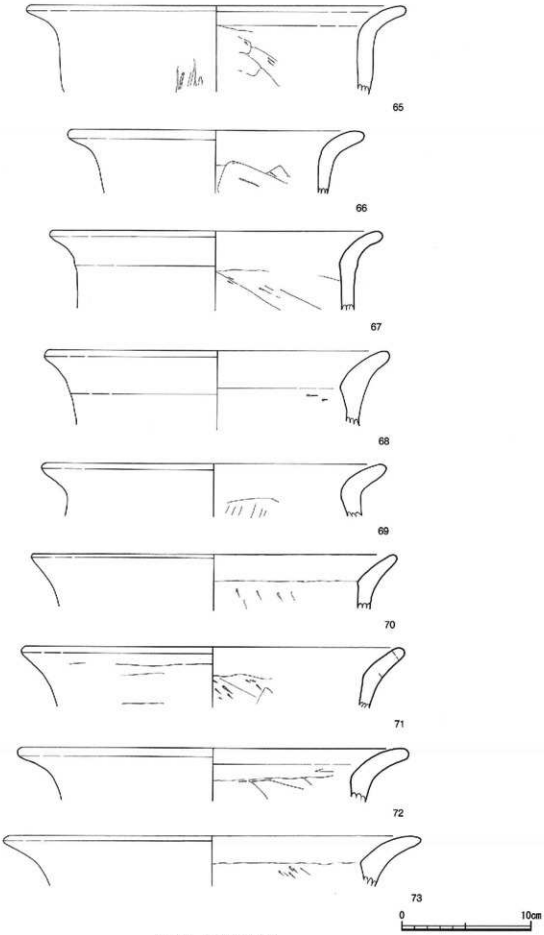
45，46は口縁部の長いタイプに区分できる。45は口縁部外面に2段のナデを認め，くびれ部が内外面共に黒化している。46の口縁端部は面をなし，胴部外面の器面は粗く，口縁部内面にハケがみられる。47は砂粒を多く含み，胴部外面に



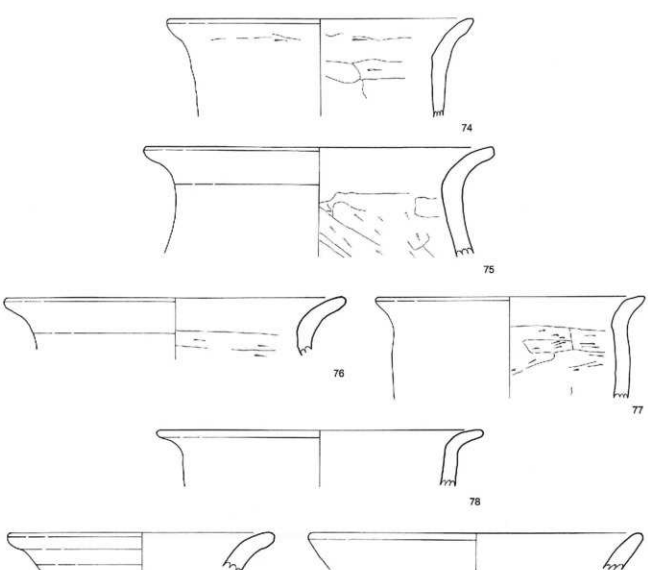
第46図　土師器甕(1)



第47図　土師器甕(2)



第48図　土師器甕(3)



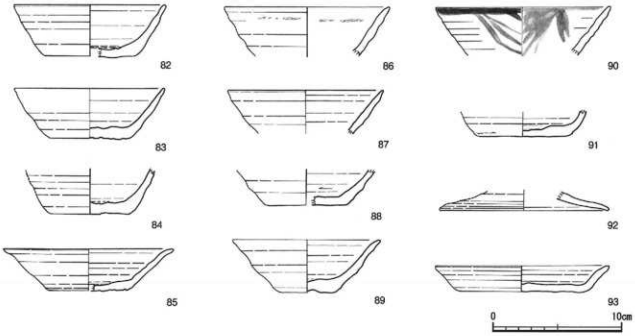
第49図　土師器甕(4)

は回転台を用いた横ハケが観察できる。48～51，54，55，58は胴部外面に縦ハケを主体とする。48は縦ハケ後に部分的に回転の横ハケを認め，ハケ間は3～4mmと幅広い。49は外面に煮炊きによると思われる黒化がみられ，ハケ間は幅広い。50は浅黄橙色を呈し，胴部外面には不整方向にハケが施され，胴部中位から下位には煤の付着がみられる。復元観察からは，長めの口縁部と若干膨らみ気味の胴部に特徴があり，胴最大幅部分から下位には煤が付着し，外面のハケ調整は胴部上位までみられる。焼成はやや不十分と判断する。58は外面に焼成時と思われる黒化がみられ，器壁は胴部から口縁部に向い細くなる。内面のケズリは比較的低い部分にみられる。

52～57は小型の甕である。

52は胎土に赤色粒を多く含み，器面の剥離は著しく，胴部内面に横ハケを認める。54は胴部外面に回転の横ハケを施した後，部分的に縦ハケを施している。56の胎土は砂粒を多く含み，胴部内面に横ハケが観察される。57は胴部から口縁部にかけ緩やかに外反し，口縁部外面は玉縁状を呈している。

59は浅黄橙色を呈し，外面は縦ハケで，胴部下端付近がわずかに黒化し，煮炊きによる痕跡と推測される。60は外面に凹凸の強い横ナデを施した後，部分的に縦ハケを施す。61は胴部中位から下位まで横ハケを施し，その後ナデにより部分的に消される。特に，口縁部内面ではナデによって砂礫が左方向に移動していることを観察できる。



第50図　須恵器坏・皿・蓋

62以降は，ナデ調整が主体で，62の外面の凹凸は強いナデにより，内面のケズリは幅狭く深く施している。63は板ナデによる工具痕が胴部外面の上端にみられ，角閃石を多く含む胎土を用いている。64は内面のケズリ上端を水平に揃えているが，稜を形成するには至らない。67は胴部上端付近まで横ナデを施し，下位は縦ナデで，内面ケズリの上端はほぼ水平に揃え，器面は若干光沢をもち堅緻である。68は内面ケズリの上端を揃え，明瞭な稜線を形成し，胎土に角閃石を多く含む。69は胴部に強い屈曲と短い口縁部を形成し，器壁は口縁部に向かい細くなる。70，71は内面ケズリの上端を揃え，明らかな稜線を形成し，外面のナデは沈線状を呈し粗い。73は外面に白色粉が付着している。

74～77は内面ケズリの上端を水平に削り，上端を水平に仕上げ，稜線は強く屈曲するものと稜線のみられないものがある。74は外面の胴部から口縁部への屈曲部に接合線がナデきれずに残り，断面でも観察される。75は胴部上端まで横ナデ，下位は不整の縦ナデがみられる。内面ケズリは上端を水平に削るものと斜め方向の削りもあるが，上端は水平に揃えている。77の胴部は若干膨み，下位までナデが確認できる。78は胴部内面のケズリは残存部では認められない。81は口縁端部に斜め方向の面を持ち，須恵器甕との関わりが想起される。

4，須恵器坏・皿・蓋(第50図)

須恵器食膳具は全て平底である。標準的な須恵器の色調のもの，酸化焔焼成のもの，火襷が内外面にみられるもの等様々なタイプが認められる。器種は坏が大多数を占め(82～91)，皿(93)，蓋(92)が１点ずつみられる。

坏は形態的に土師器坏と大差なく，口径10～14cm，器高は４cm前後である。89は器高５cm前後の深手に属すが，少数である。

82～84は灰色の色調を中心とする標準的な須恵器の色調で，３点とも体部外面下端から丁寧なナデが施される。82は見込みのナデが右回りに観察され，83は底部外面の調整が不十分でヘラ切り痕が明瞭に残り，84は見込みに渦巻き状のナデを右回りに認める。

85～91は酸化焔焼成を主体とする。85は内面がにぶい橙色，外面がにぶい黄橙色で色調が異なる。見込みの中央は強く押えて凹み，底部外面はヘラ切り痕を一部残し，見込みの一部分に炭化物の付着を認める。86は体部外面に強いナデを施し，体部内外面の一部が還元している。87は灰黄色を呈す。88は底部外面から体部にかけて丁寧にナデを施し，ヘラ切り痕やヘラ切りによる粘土のはみ出しは完全にナデ消されている。89は底部外面のナデは不十分で，見込みは静止状態でナデを施し，体部外面下端にはわずかに未調整部分を認める。90は火襷で，器面は硬質である。91は軟質で，体部外面下端はヘラ切り時の粘土のはみ出しを認める。

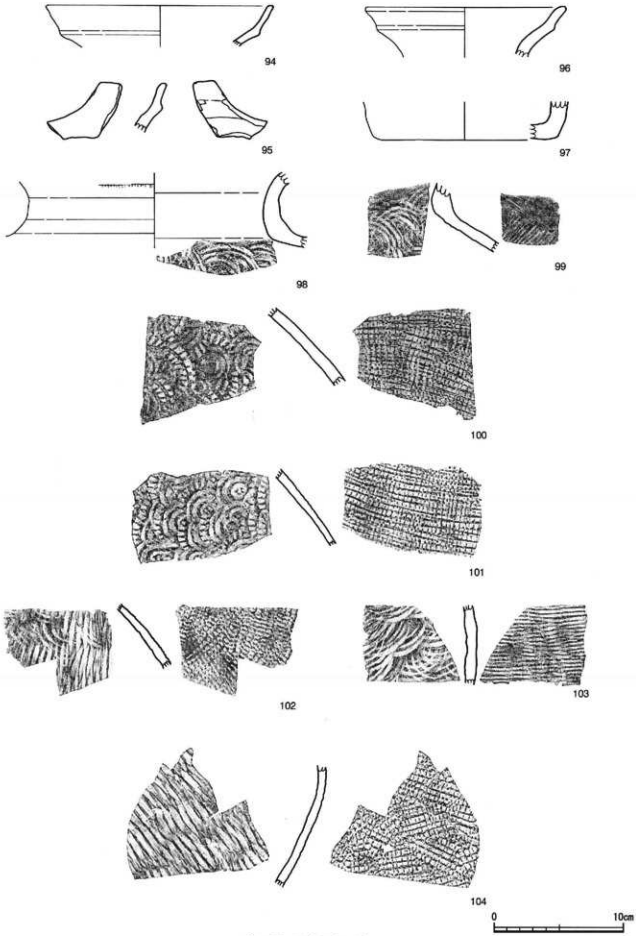
92の体部内面は不整方向にナデが施され脚部の可能性もあるが，蓋と判断した。外面は丁寧な回転ナデが施される。93は底部から体部にかけて丸味をもって立ちあがり，その後，外反する。胎土は白色粒を多く含み粗く，底部外面には右回りのヘラ切り痕が観察される。

5，須恵器壺・甕(第51・52図)

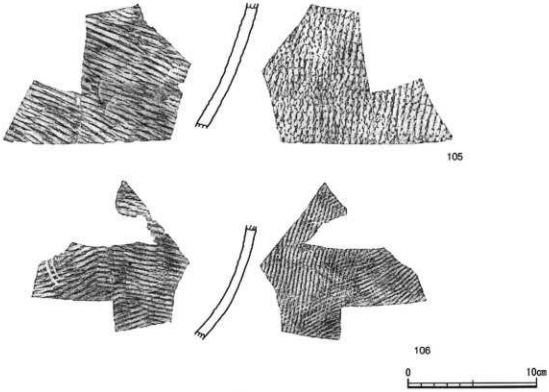
土師器要に比べると出土量は著しく減少し，小破片のため全体の形態の復元は困難である。

94～97は須恵器壺である。

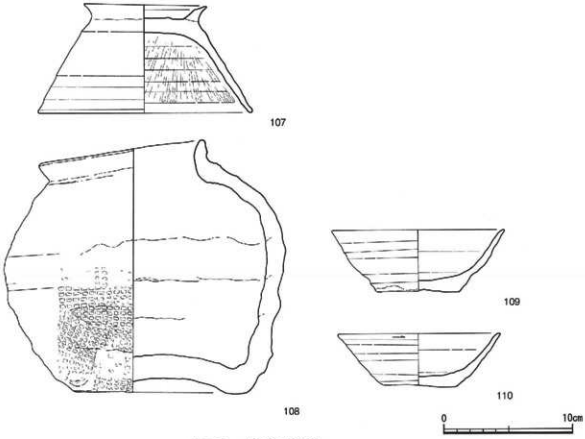
口縁部の94～96は二重口縁を呈し，94は器面が釉により光沢を持つ。96は酸化焔焼成により土師質で，口縁端部は斜め方向に面を持つ。95は口縁端部に幅の広い斜め方向の面を持



第51図　須恵器壺・甕



第52図　須恵器甕



第53図　火葬墓関連遺物

ち，口縁端部は強いナデにより大きく湾曲している。97は底部で，底部外面に黄緑色の釉がみられ，内面の胴部と底部の境は強くナデられる。

98～104は須恵器甕である。

98は口縁端部を欠損し，胴部から口縁部にかけて傾斜変換点が外面に２ヶ所みられる。外面は釉の付着によって光沢を保ち，内面の当具痕は右から左に認められる。100，101の外面は格子タタキ，内面の当具痕が特徴的で，同心円の四枠目に放射状の痕跡が残される。同様の当具は，踊場遺跡でも確認された。102，103は胴部中位で，外面調整は102が格子タタキ，103が平行タタキを施す。104～106は胴部下半で，104は外面のタタキを不整方向に施す。105は硬質で外面はにぶい赤褐色を呈している。

６．火葬墓関連遺物(第53図)

○　蔵骨器

口縁部が短く直立する短頸壺(薬壺型)の系譜をもつ。全体的にいびつな形態で成形・調整も粗く，器面には凹凸が目立つ。調整は胴部外面下位に格子タタキ，胴部最大幅から上位は回転ナデが施され，ナデによって一部格子タタキが消されている。格子タタキは上から下，右から左にかけて施され下端にいたる。回転ナデは右上がりであるが，口縁部や肩部の最大幅も右上がりになっており，回転ナデを施した後の胴部外面下端の押圧によって斜め方向になったものと思われる。内面は当具やタタキの痕跡は認められず凹凸が顕著で粘土紐がナデ消されずに残っている。底部は平底で若干上底である。焼成は金属音を発する程硬質で，明赤褐色を呈する。外面の1/3に釉薬が付着している。

○　蓋(土師器椀)

やや大型の椀である。外面と内面の一部は剥落がつよい。内面は放射状にミガキがみられる。高台は端部がナデられ，面を呈する。墨書は確認できなかった。

○　供献土器(土師器坏)

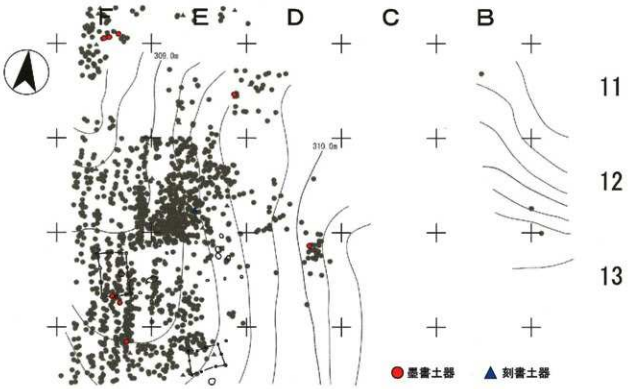
２点は形態や調整技法で類似している。109は体部外面に凹みのつよいナデがみられ，体部下端から上に１cmにかけては回転ナデのみられない部分が目立ち，外見は突出気味の底部を呈する。底部外面もナデが不十分で，ざらついた感じである。110も体部外面下端に回転ナデのみられない部分が目立ち，底部外面も粗い。色調は両者ともに浅黄橙色を呈する。なお，墨書は確認できなかった。

○　須恵器甕片

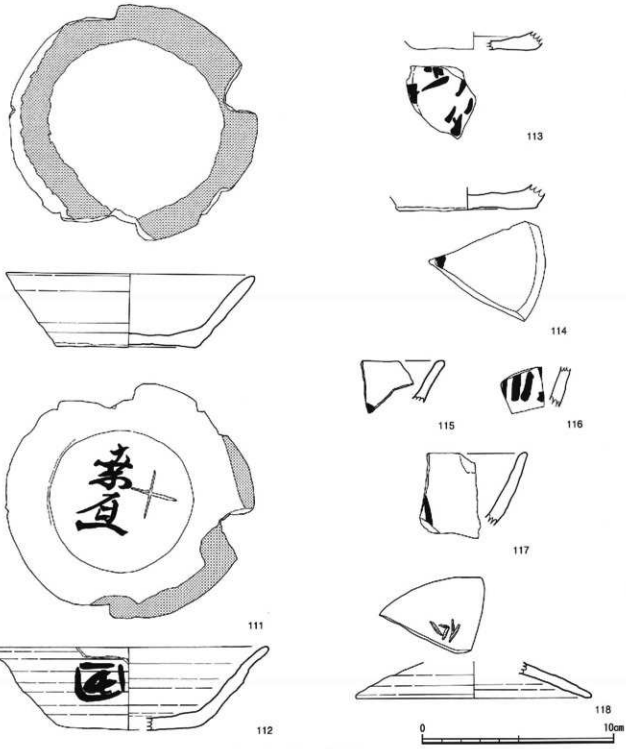
最大で１片2.5cm，最小で0.5cm程の須恵器片が16片出土している。大多数に外面に平行タタキ，内面にナデがみられ，３点が接合した。接合しなかった資料も含めてすべて同一個体である可能性が高い。調整技法からは本来壺であった可能性が推測される。なお，この遺物は包含層の須恵器片とは接合しなかった。ただ，類似しているものはいくつかみられ，G-17区で３点，E-14区とF-15区からそれぞれ１点ずつ出土している。

７．墨書・刻書土器(第55図)

墨書土器７点，刻書土器１点の８点が出土し，器種は全て



第54図　墨書・刻書土器出土状況図（S=1/400）



第55図　墨書・刻書土器

土師器坏である。

○「桑原」

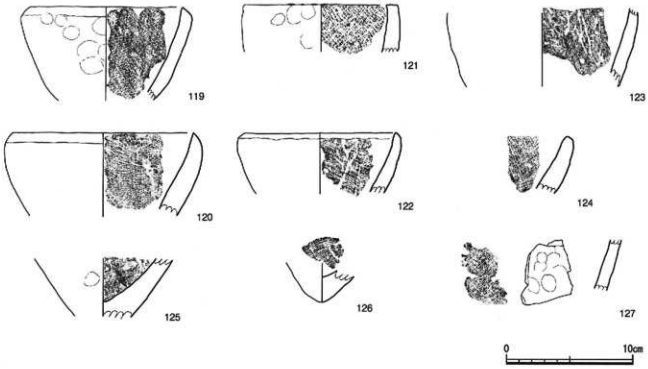
111の底部外面に「桑原」の墨書が確認できる。「原」は姶良町小瀬戸遺跡や伊集院町西原遺跡で知られるが，「小」を「一」で表現するのは本遺跡のみで，書き慣れた筆跡とも推測される。なお，墨書の右隣に「十」字状の線刻もみられる。

○「田」?

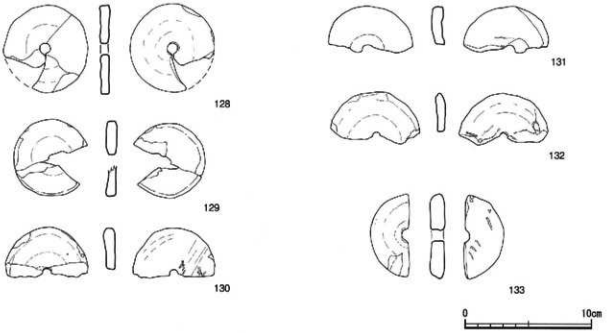
112の体部外面に逆位に書かれ，文字や器形では九養岡遺跡に類似品が知られる。「田」字墨書土器は県内では九養岡遺跡と串木野市格城跡で発見され，姶良町小倉畑遺跡から「田人」，武ＡＢＣ遺跡からは「八田」が報告されている。

○「仏」

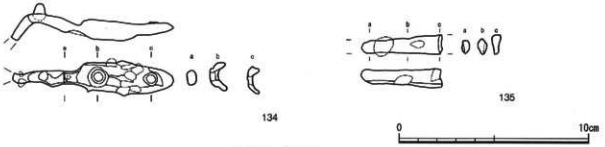
118の須恵器蓋の天井部に逆位で刻書されている。刻書による粘土の盛り上がりは確認できないが，刻み面は断面の色調と異なり器面と共通することから焼成前の刻書と判断される。なお，刻み面の「Ｖ」字状の断面はどの両も片面が滑らか



第56図　焼塩壷



第57図　紡錘車



第58図　鉄製品

で片面が荒れていることから，ある程度の乾燥が進んだ後に刻書をしたと推測される。

その他

113，114は底部外面に墨書がみられ，その他は胴部外面にみられるが，判読はできていない。

8．焼塩壺(第56図)

復元口径は12～15cmが想定され，外面は指押さえ，内面に布痕が確認できる。

119は外面が部分的に銀化し，釉の付着も認められる。120は器壁が厚く，口縁端から丸味をもって体部に至り，端部に面は認められない。121は口縁端部に明瞭な面を認め，口縁端部内面は若干内側に延びる。122は脆弱で摩滅が目立ち，口縁端部に面は形成しない。123も摩滅が著しく，布痕は僅かに残される。124は硬質で砂粒を多く含み，口縁端部は面をなす。125は底部付近で，端部は欠損する。126は底部先端で，内面に布痕を認める。

9．紡錘車(第57図)

土師器坏からの転用で片面は中央が窪み，片面は水平もしくはヘラ切り痕が観察される。以下では前者を表面，後者を裏面と呼称する。

128は周縁部を丁寧に整形し，全面に細縁状の調整痕を認めるが，ヘラ切りやナデの痕跡をかろうじて残す。129は赤色粒を多く含み，ヘラ切り痕は完全に消している。130は表面が大きく凹み，裏面は一部劣化している。132，133は周縁部の整形が不揃いで，特に132は体部の打ち欠き面を明瞭に残している。

10．鉄製品(第58図)

本遺跡から2点の鉄製品が出土した。134の形状は，「くの字」に屈曲しており，屈曲した部分から張り出した部分は棒状になって，棒状になっている部分から欠損している。また，後部にいくほど楕円形状になり最後部にいくほどすぼまっていく形状を成している。この資料はその形状から，何かの「引き手金具」として使用されたのではないかと考える。残存部分は最大長が84mm，最大幅が18mm，最大厚は5mmであり，穿孔径は，それぞれ4～5mmである。錆が至る所に付着しており，腐食がやや激しいが，使用時の形状を残していると思われる。棒状のものと接続する金具とみられ，釘による接続が考えられる2か所の穴があり，後部内側の形状は，内側に湾曲している。後部は，もう一枚の鉄を伸ばしてたたいて接合している接合法（鍛接）がみられ，所々黒ずんだ炭状のものは，接合する際に使用した木炭ではないかと考えられる。135の形状は上部は直線的で，上下両端とも細くなっているため刀子と判断した。先端部分は欠損し，詳細は不明である。鉄錆が付着し，やや腐食は激しいものの使用時の原型を留めていると思われる。この資料はその形状から，刀子の刃部の一部ではないかと思われる。

第12表　土師器坏・椀観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区／層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整					備考
									(底部ヘラ切り)	内面	外面	見込み ナデ	未調整	
44	1	2678(E-14/Ⅳa) 2699(E-14/Ⅳa) 一括(-/-)	12.6	4.3	7.0	砂粒多い	-	7.5YR7/6 (橙)	残存	ナデ	不明	○	×	-
	2	1002(E-12/Ⅳa) 1019(E-12/Ⅳa)	11.6	4.2	7.6	精緻	-	10YR8/6 (黄橙)	ナデではほぼ消滅	ナデ	ナデ	×	×	-
	3	105(E-6/Ⅳ) 54(E-7/Ⅳ)	13.2	4.5	8.0	赤金ウ(砂粒の抜けた孔あり)	-	7.5YRB/6 (浅黄橙)	ナデで消滅	不明	不明	不明	×	-
	4	350(E-13/Ⅳa) 484(E-12/Ⅳa) 797(E-12/Ⅳa) 2688(E-14/Ⅳa)	13.0	4.2	7.8	精緻	-	2.5YRB/4 (赤褐)	ナデではほぼ消滅	ナデ，静止ナデ寄り	ナデ	○	×	板状の圧痕あり
	5	2789(D-14/Ⅳa) 2789(D-14/Ⅳa)	13.2	4.2	5.6	精緻	-	7.5YRB/6 (浅黄橙)	左回り	不明	不明	○	×	-
	6	2399(E-17/Ⅳa) 2515(E-16/Ⅳa)	12.6	4.6	5.2	赤金ウ(砂粒の抜けた孔あり)	-	5YR7/6 (橙)	残存	ナデ	ナデ	○	○	-
	7	313(E-13/Ⅳa)	12.4	4.2	6.6	精緻	-	2.5Y7/3 (浅黄)	残存	ナデ	ナデ	×	-	-
	8	3183(E-14/Ⅳa) 3184(E-14/Ⅳa)	12.0	4.3	6.0	精緻(砂粒の抜けた孔あり)	-	5YR7/8 (橙)	明瞭に残る，右回り	ナデ	ナデ	不明	×	-
	9	24(E-8/Ⅳ上)	13.6	3.5	7.0	精緻	-	7.5YRB/6 (浅黄橙)	ナデではほぼ消滅	ナデ	ナデ	○	×	-
	10	2212(F-14/Ⅳa)	14.0	(3.6)	-	精緻	良好	7.5YR7/6 (橙)	-	ナデ	ナデ	-	-	-
	11	151(E-6/Ⅳ)	12.8	(4.0)	-	砂粒多い	-	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	ナデ，右回り	ナデ	不明	不明	-
	12	3446(F-15/Ⅳa) 3486(F-15/Ⅳa) 一括(-/-)	12.8	(3.6)	-	精緻	-	5YR7/6 (橙)	-	ナデ	ナデ	不明	×	-
	13	885(E-12/Ⅳa)	12.5	(4.3)	-	精緻	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	-	ミガキ	ナデ	-	-	-
	14	2167(F-13/Ⅳa)	12.0	(3.0)	-	精緻	良好	7.5YR7/6 (橙)	-	ナデ	ナデ	-	-	-

第13表　赤彩・黒色土器観察表

挿図番号	報告番号	取上番号（出土区／層）	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整					備考
									底部ヘラ切り	内面	外面	見込み ナデ	未調整	
44	15	3660(G-17/Ⅳa)	14.0	(3.6)	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-	ナデ	ナデ	-	-	-
	16	1011(E-12/Ⅳa) 一括(-/-)	13.8	(1.7)	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	ナデ	ナデ	-	-	-
	17	1402(F-16/Ⅳa)	(11.4)	(2.8)	8.0	精緻	-	10YR8/4(浅黄橙)	ナデで消滅	ナデ	ナデ	×	×	-
	18	389(F-12/Ⅳa) 741(E-13/Ⅳa上) 1263(E-13/Ⅳa)	(10.2)	(2.7)	5.4	精緻	-	7.5YR7/6(橙)	残存	ナデ	不明	×	-	-
	19	3390(F-17/Ⅳa) 3393(F-17/Ⅳa)	(10.8)	(2.7)	6.4	精緻	-	7.5YR7/6(橙)	ナデではぼ消滅	ナデ	ナデ	不明	×	-
	20	2798(D-14/Ⅳa)	(10.8)	(3.7)	5.8	精緻	-	10YR8/4(浅黄橙)	ナデで消滅	ナデ	ナデ	不明	×	-
	21	一括(-/-)	(10.4)	(3.2)	6.6	精緻	-	10YR7/6(明黄橙)	残存	ナデ	ナデ、束調整	不明	×	-
	22	2831(D-15/Ⅳa)	(13.2)	(3.2)	7.6	精緻	-	7.5YR7/6(橙)	ナデで消滅	ナデ	ナデ	○	×	-
	23	273(F-13/Ⅳa)	(11.4)	(2.7)	7.0	精緻	-	10YR8/4(浅黄橙)	ナデではぼ消滅	不明	ナデ	不明	×	-
	24	2118(F-14/Ⅳa)	(8.4)	(1.3)	6.4	精緻	-	10YR7/6(明黄橙)	ナデではぼ消滅	ナデ	ナデ	×	○	-
	25	3860(F-10/Ⅳa)	(8.6)	(1.7)	6.4	精緻	-	5YR7/8(橙)	ナデではぼ消滅	ナデ	ナデ	×	-	-
	26	900(E-12/Ⅳa) 984(E-12/Ⅳa)	(18.6)	(4.0)	-	精緻	-	10YR8/3(浅黄橙)	-	ナデ、接合痕有り	ナデ	不明	×	-
	27	1471(B-3/Ⅳa) 1472(B-3/Ⅳa)	(12.7)	(4.3)	(7.9)	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	不明	ナデ	-	-	高台剥離
	28	3622(F-16/Ⅳa) 3662(G-17/Ⅳa)	14.0	(5.6)	(7.0)	精緻	-	7.5YR8/6(浅黄橙)	ナデではぼ消滅	ナデ	ナデ	○	×	高台剥離
	29	3787(F-10/Ⅳ)	-	(1.8)	-	精緻	-	10YR8/4(浅黄橙)	-	-	-	不明	不明	-
45	30	357(F-12/Ⅳa) 2057(F-13/Ⅳa) 2082(F-14/Ⅳa) 2143(F-13/Ⅳa) 2206(F-14/Ⅳa) 2305(F-13/Ⅳa) 一括(-/-)	15.8	4.5	6.6	精緻	-	7.5YR7/6(橙)	ミガキで消滅	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	-
	31	1264(E-14/Ⅳa)	(10.4)	(1.4)	7.0	精緻	-	2.5YR6/6(橙)	ミガキで消滅	ミガキ	ミガキ	ミガキ	×	-
	32	2674(E-14/Ⅳa) 2675(E-14/Ⅳa) 2698(E-14/Ⅳa) 2709(E-14/Ⅳa) 2722(E-14/Ⅳa) 一括(-/-)	(9.0)	(1.7)	6.6	精緻	良好	7.5YR6/6(浅黄橙)	ミガキで消滅	ミガキ	ミガキ	-	-	-
	33	288(F-13/Ⅳa) 591(F-12/Ⅳa上) 690(E-12/Ⅳa) 717(E-13/Ⅳa) 1258(E-13/Ⅳa) 1775(F-12/Ⅳa) 2112(F-14/Ⅳa) 2748(F-14/Ⅳa)	(13.4)	(3.2)	7.4	精緻	不良	7.5YR8/8(黄橙)	ミガキで消滅	ミガキ	ミガキ	-	-	-
	34	3881(F-10/Ⅳa)	13.4	(2.2)	-	精緻	良好	2.5Y7/4(浅黄)	-	ミガキ	ナデ	-	-	内面色調N2/(黒)
	35	一括(-/-)	17.0	(2.0)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい橙)	-	ミガキ	ナデ	-	-	内面色調N3/(暗灰)
	36	2172(F-13/Ⅳa)	16.8	(3.0)	-	精緻	良好	2.5Y7/4(浅黄)	-	ミガキ	ナデ	-	-	内面色調N4/(灰)
	37	2267(F-13/Ⅳa)	-	(2.6)	(6.8)	精緻	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	-	ミガキ	ケズリ、中心部まで回転ナデ有り	-	-	内面色調N5/(灰)
	38	3868(F-10/Ⅳa)	-	(2.3)	(5.4)	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-	ミガキ	ナデ	-	-	-
	39	1700(F-12/Ⅳa)	-	(1.9)	7.0	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-	ミガキ	ナデ	-	-	高台高=2.0 内面N2/(黒)
	40	530(E-12/Ⅳa)	-	(1.7)	7.2	精緻	-	7.5YR7/6(橙)	不明	ミガキ	ナデ	不明	不明	高台高(2)
	41	2272(F-13/Ⅲ) 2273(F-13/Ⅲ)	-	(2.8)	6.2	精緻	不良	10YR8/3(浅黄橙)	-	ミガキ	ケズリ	-	-	高台高=1.8
	42	ピット内 (E-15/Ⅳa)	14.0	4.0	6.5	良好	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	高台底部回転ナデ	ミガキ	ナデ	-	-	ピット内への流れ込み?
	43	6(E-6/Ⅳ) 8(E-6/Ⅳ)	29.0	(5.5)	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-	ミガキ	ミガキ	-	-	-
	44	95(E-6/Ⅳ) 38(E-7/Ⅳ)	(20.0)	(7.4)	9.0	精緻	不良	7.5YR6/6(橙)	不明	ミガキ	ミガキ	-	-	内面色調2.5Y5/1(黄灰)

第14表　土師器癒観察表(1)

神印番号	報告番号	取上番号(出土区・層)	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
46	45	2779(D-14/Ⅳa) 3161(D-14/Ⅳa)	23.4	(6.1)	0.8~0.9	砂粒を含む	不良	7.5YR6/6 (橙)	ケズリ	ナデ	-
	46	3842(F-10/Ⅳa)	23.8	(5.1)	0.6~1.2	砂粒含む	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ハケ後ナデ	ハケ、ケズリ	-
	47	3741(F-11/Ⅲ) 3746(F-11/Ⅳa) 3756(F-11/Ⅳa) 3765(F-11/Ⅳa)	(20.0)	(5.8)	0.7~0.8	砂粒、石英含む	良好	7.5YR7/6 (橙)	ケズリ	横ハケ	-
	48	986(E-12/Ⅳa) 1839(F-12/Ⅳa) 1841(F-12/Ⅳa) 1864(F-12/Ⅳa) 3525(F-14/Ⅳa)	24.0	(8.0)	0.9~1.1	精緻	良好	5YR6/8 (橙)	横ハケ、縦ハケ	-	
	49	309(F-12/Ⅳa) 408(F-12/Ⅳa) 686(E-12/Ⅳa) 933(E-12/Ⅳa) 1739(F-12/Ⅳa)	26.0	(8.5)	0.8~1.5	雲母を含む	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ケズリ	縦ハケ	-
	50	1102(D-11/Ⅳa) 一括(-/-)	28.4	(11.5)	0.9~1.3	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	ケズリ	縦ハケ	-
	51	360(F-12/Ⅳa) 399(F-12/Ⅳa) 564(E-12/Ⅳa) 568(E-12/Ⅳa) 627(E-12/Ⅳa上) 647(E-12/Ⅳa上) 667(E-12/Ⅳa上) 675(E-12/Ⅳa) 699(E-12/Ⅳa) 712(E-12/Ⅳa上) 750(E-13/Ⅳa上) 759(F-13/Ⅳa) 817(E-12/Ⅳa) 910(E-12/Ⅳa) 917(E-12/Ⅳa) 1103(D-11/Ⅳa) 1111(D-12/Ⅳa) 1113(D-12/Ⅳa) 1145(D-12/Ⅳa) 1361(E-12/Ⅳa) 3432(F-15/Ⅳa) 3439(F-15/Ⅳa)	22.0	21.0	0.8~1.4	砂粒を含む	不良	10YR8/4 (浅黄橙)	ケズリ	縦ハケ	-
	52	967(E-12/Ⅳa) 1321(E-13/Ⅳa) 2996(E-14/Ⅳa)	13.0	(3.0)	0.6	砂粒、雲母含む 赤色粒を多く含む	良好	5YR6/4 (にぶい橙)	横ハケ	横ハケ	-
	53	38(E-7/Ⅳ)	18.0	(5.5)	0.6~1.0	赤色粒を含む	不良	10YR7/6 (明黄橙)	ケズリ	横ハケ	-
	54	641(E-12/Ⅳa上)	15.6	(5.8)	0.8~1.2	雲母を含む	良好	5YR6/6 (橙)	ケズリ	横ハケ、縦ハケ	-
	55	99(D-6/Ⅳ上)	15.6	(5.6)	0.7~1.3	砂粒、雲母含む	良好	5YR6/6 (橙)	ケズリ	縦ハケ	-
	56	1180(D-13/Ⅳa)	16.0	(3.2)	0.4~0.5	砂粒含む	良好、脆弱	10YR7/4 (にぶい黄橙)	横ハケ	摩滅	-
	57	2255(F-13/Ⅳa)	17.8	(3.7)	0.6~0.8	精緻	良好	10YR8/6 (黄橙)	ナデ	ナデ	-
	58	367(F-12/Ⅳa) 388(F-12/Ⅳa) 2063(F-14/Ⅳa)	22.4	(7.5)	0.8~1.3	砂粒含む	良好	10YR4/1 (褐灰)	ケズリ	縦ハケ	-
47	59	188(C-5/Ⅳ) 1816(F-12/Ⅳa) 1889(F-11/Ⅳa) 一括(-/-)	30.4	(11.2)	0.9~1.2	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	ケズリ	縦ハケ	-
	60	527(E-12/Ⅳa) 1163(D-13/Ⅳa) 1184(D-13/Ⅳa) 一括(-/-)	27.2	(15.2)	0.7~1.4	砂粒を含む	良好	7.5YR7/6 (橙)	ケズリ、縦ハケ	ナデ、縦ハケ	-
	61	364(F-12/Ⅳa) 412(F-12/Ⅳa) 804(E-12/Ⅳa) 865(E-12/Ⅳa) 882(E-12/Ⅳa) 1203(E-13/Ⅳa) 1322(E-13/Ⅳa) 1362(E-13/Ⅳa) 2720(E-14/Ⅳa) 2806(D-14/Ⅳa)	27.6	(11.5)	0.9~1.3	砂粒、雲母含む	良好	7.5YR6/6 (橙)	ケズリ、口縁部内面ナデ	横ハケ	-
	62	558(E-12/Ⅳa) 2791(D-14/Ⅳa)	21.0	(7.7)	1.1~1.5	砂粒含む	不良	7.5YR7/6 (橙)	ケズリ	ナデ	-
	63	95(E-12/Ⅳa) 1008(E-12/Ⅳa) 1020(E-12/Ⅳa)	25.4	(6.3)	0.9~1.4	砂粒、石英、角閃石含む	良好、脆弱	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	ケズリ	ナデ	-
	64	430(F-12/Ⅳa) 433(F-12/Ⅳa) 539(E-12/Ⅳa) 720(E-13/Ⅳa上) 927(E-12/Ⅳa) 1636(F-13/Ⅳa) 一括(-/-)	26.6	(6.3)	0.8~1.3	砂粒、石英、角閃石含む	良好	7.5YR7/6 (橙)	ケズリ	-	-

第15表　土師器観察表(2)

挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区／層)	口径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
48	65	2228(F-14/Ⅳa) 3505(F-14/Ⅳa) 一括(-/-)	29.2	(6.9)	0.8～1.3	砂粒、角閃石含む	良好	5YR6/6 (橙)	ケズリ	ケズリ	-
	66	2098(F-14/Ⅳa) 2204(F-14/Ⅳa) 2303(F-14/Ⅳa)	22.6	(5.0)	0.7～1.2	砂粒、石英含む	良好	5YR6/6 (橙)	ケズリ	ナデ	-
	67	312(E-13/Ⅳa) 318(E-13/Ⅳa) 319(E-13/Ⅳa) 326(E-13/Ⅳa) 338(E-13/Ⅳa) 743(E-13/Ⅳa上) 1318(E-13/Ⅳa) 1345(E-13/Ⅳa) 2683(E-14/Ⅳa) 2684(E-14/Ⅳa) 2695(E-14/Ⅳa) 2706(E-14/Ⅳa) 2711(E-14/Ⅳa) 一括(-/-)	25.6	(6.3)	0.9～1.4	砂粒を含む	良好	5YR5/8 (明赤褐色)	ケズリ後ミガキ	ナデ	-
	68	612(E-12/Ⅳa上) 959(E-12/Ⅳa) 1106(D-12/Ⅳa)	27.0	(5.9)	0.9～1.9	砂粒、角閃石含む	良好	5YR6/6 (橙)	ケズリ	ナデ	-
	69	179(E-8/Ⅳ)	27.0	(4.1)	0.9～1.6	赤色粒を含む	良好	7.5YR6/6 (橙)	ケズリ	ナデ	-
	70	777(E-12/Ⅳa) 781(E-12/Ⅳa) 1275(E-13/Ⅳa)	28.4	(4.2)	0.8～1.5	砂粒含む	不良	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ケズリ	ナデ	-
	71	1574(F-13/Ⅳa) 1589(F-13/Ⅳa) 2215(F-14/Ⅳa)	29.4	(4.8)	0.9～1.3	砂粒、石英含む	良好	5YR7/6 (橙)	ケズリ	ナデ	-
	72	1158(D-13/Ⅳa)	30.0	(4.2)	1.0～1.5	砂粒、石英、角閃石含む	良好	5YR6/6 (橙)	ケズリ、ハケ	ハケ後ナデ	-
	73	1004(E-12/Ⅳa) 2030(F-13/Ⅳa)	31.8	(4.0)	0.8～1.8	砂粒、石英、角閃石含む	良好	7.5YR6/6 (橙)	ケズリ	ナデ	-
49	74	2812(D-15/Ⅳa) 2829(D-15/Ⅳa)	24.0	(7.7)	0.8～1.4	砂粒、石英含む	良好	7.5YR6/6 (橙)	ケズリ	ハケ後ナデ	-
	75	336(E-13/Ⅳa) 347(E-13/Ⅳa) 400(F-12/Ⅳa) 742(E-13/Ⅳa上) 1270(E-13/Ⅳa) 1367(F-13/Ⅳa) 2696(E-14/Ⅳa) 2700(E-14/Ⅳa) 2702(E-14/Ⅳa) 2820(D-14/Ⅳa) 2804(D-14/Ⅳa) 2813(D-15/Ⅳa) 2815(D-15/Ⅳa) 2817(D-15/Ⅳa) 一括(-/-)	27.0	(6.6)	1.0～1.6	雲母を含む	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ケズリ後ミガキ	ナデ	-
	76	597(E-12/Ⅳa上) 668(E-12/Ⅳa上) 1763(F-12/Ⅳa) 一括(-/-)	25.4	(4.6)	1.0～1.5	砂粒、石英含む	不良・脆弱	5YR6/6 (橙)	ケズリ後ミガキ	ミガキ	-
	77	3579(F-10/Ⅳa)	21.0	(8.1)	0.8～1.3	砂粒、石英含む	良好	5YR5/6 (明赤褐色)	ケズリ	ナデ	-
	78	812(E-12/Ⅳa) 913(E-12/Ⅳa) 1300(E-13/Ⅳa) 3192(E-14/Ⅳa)	25.0	(4.5)	0.7～1.1	砂粒を含む	不良	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	ナデ	ハケ	-
	79	3775(F-10/Ⅳa) 3794(F-10/Ⅳa) 3798(F-10/Ⅳa) 3801(F-10/Ⅳa)	20.8	(3.2)	1.2～1.4	砂粒、石英含む	良好	7.5YR6/6 (橙)	ナデ	ナデ	-
	80	2210(F-14/Ⅳa) 2721(E-14/Ⅳa) 2735(E-14/Ⅳa)	25.8	(3.0)	0.7～1.4	砂粒、石英、角閃石含む	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデ	摩滅	-
	81	688(E-12/Ⅳa) 1778(F-12/Ⅳa)	29.4	(2.7)	0.9～1.2	砂粒、赤色粒を含む	良好	7.5YR7/6 (浅黄橙)	ナデ	横ハケ	-

第16表　須恵器坏・皿・蓋観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区／層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整					備考
									底部ヘラ切り	内面	外面	見込みナデ	未調整	
50	82	301(E-13/Ⅳa) 346(E-13/Ⅳa) 2892(E-14/Ⅳa)	11.8	4.1	7.2	精緻	良好	10Y5/1 (灰)	残存	左上がりのナデ	ナデ	-	-	-
	83	1907(E-10/Ⅳa) 1925(E-10/Ⅳa) 1935(E-10/Ⅳa) 1983(E-10/Ⅳa) 3779(F-11/Ⅳa) 一括(-/-)	11.8	4.1	6.0	精緻	-	N7/ (灰白)	底部外面のナデ不十分ヘラ切り痕残存	ナデ	ナデ	○	-	-
	84	439(F-12/Ⅳa)	(10.0)	(3.5)	6.6	精緻	良好	10Y5/1 (灰)	-	ナデ	ナデ	×	-	-
	85	2645(E-15/Ⅳa) 2685(E-14/Ⅳa) 2770(E-14/Ⅳa)	13.2	3.3	6.0	精緻	-	10YR7/3(にぶい黄橙)	ナデ無し	ナデ	ナデ	×	-	内面5YR7/4(にぶい橙)
	86	975(E-12/Ⅳa) 2068(F-13/Ⅳa) 2135(F-14/Ⅳa)	12.8	(4.0)	(8.0)	精緻	良好	5Y6/2 (灰オリーブ)	-	ナデ	ナデ	-	-	-
	87	3541(F-14/Ⅳa)	12.0	(3.5)	(7.4)	精緻	良好	2.5Y7/2 (灰黄)	-	ナデ	ナデ	-	-	-
	88	857(E-12/Ⅳa)	(10.6)	(2.6)	6.4	精緻	-	2.5Y7/3 (浅黄)	-	丁寧なナデ	底部外面から体部にかけて丁寧なナデ	-	-	-
	89	2092(F-14/Ⅳa) 2223(F-14/Ⅳa) 2676(E-14/Ⅳa) 一括(-/-)	11.6	4.2	4.8	精緻	不良	2.5Y7/2 (灰黄)	-	ナデ	ナデ	○	-	-
	90	1663(F-13/Ⅳa)	13.6	(4.0)	(8.4)	精緻	良好	5Y5/2 (灰オリーブ)	-	ナデ	ナデ	-	-	火襷あり
	91	2241(F-13/Ⅳa)	(9.6)	(2.0)	6.8	精緻	-	10YR6/2 (灰白)	-	ナデ	ナデ	○	-	-
	92	790(E-12/Ⅳa)	13.4	(1.6)	-	精緻	良好	7.5Y5/1 (灰)	-	ナデ	回転ナデ	-	-	-
	93	580(F-12/Ⅳa) 621(E-12/Ⅳa上) 2101(F-14/Ⅳa) 一括(-/-)	13.4	2.0	10.0	石英、砂粒	-	7.5YR7/1 (灰白)	残存	ナデ	ナデ	○	-	-

第17表　須恵器壺・甕観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区／層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
51	94	1660(F-13/Ⅳa)	17.4	(3.5)	(12.0)	精緻	不良	2.5Y5/2 (暗灰黄)	摩滅	ナデ	-
	95	一括(-/Ⅳ)	-	(4.0)	-	精緻	良好	5Y4/2 (灰オリーブ)	ナデ	ナデ	-
	96	一括(-/Ⅳ)	15.4	(4.0)	(10.0)	精緻	不良	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ	-
	97	3834(F-10/Ⅳ)	-	(3.0)	14.6	精緻	良好	2.5Y6/1 (黄灰)	摩滅	ナデ	-
	98	3442(F-15/a)	(21.0)	(6.0)	-	精緻	不良	5Y7/2 (灰白)	同心円タタキ	-	-
	99	1761(F-12/Ⅳa)	-	(5.6)	-	精緻	良好	5Y7/2 (灰白)	同心円タタキ	平行タタキ	-
	100	2517(E-16/Ⅲ)	-	(6.2)	-	精緻	良好	5Y5/1 (灰)	同心円タタキ	格子タタキ	-
	101	634(E-12/Ⅳa上) 1139(D-12/Ⅳa)	-	(6.1)	-	精緻	良好	5Y5/1 (灰)	同心円タタキ	格子タタキ	-
	102	1819(F-12/Ⅳa) 1865(F-12/Ⅳa)	-	(5.0)	-	精緻	良好	2.5Y6/2 (灰黄)	同心円平行タタキ	格子タタキ	-
	103	1654(F-13/Ⅳa)	-	(6.2)	-	精緻、砂粒	良好	5Y4/1 (灰)	同心円タタキ	平行タタキ	-
	104	1026(E-12/Ⅳa) 1027(E-12/Ⅳa) 1046(E-12/Ⅳa上) 1056(E-12/Ⅳa) 2805(D-14/Ⅳa)	-	(9.7)	-	精緻	良好	5Y5/1 (灰)	平行タタキ	格子タタキ	-
52	105	3906(F-10/Ⅳa) 3819(F-10/Ⅳa)	-	(6.6)	-	粉末	良好	2.5YR4/3 (にぶい赤橙)	平行タタキ	格子タタキ	-
	106	296(E-13/Ⅳa) 644(E-12/Ⅳa上) 2102(F-14/Ⅳa) 3165(E-14/Ⅳa)	-	(8.6)	-	粉末	良好	5GY4/1 (暗灰オリーブ灰)	同心円平行タタキ	平行タタキ	-

第18表　火葬墓関連遺物観察表

挿図番号	報告番号	出土区／層	遺構	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	備考
53	107	遺構内一括(G-18/Ⅳa)	火葬墓	土師器椀	15.6	8.7	9.6	良好	精緻	7.5YR6/6(淡黄橙)	ミガキ	ナデ	蔵骨器の蓋として使用
	108	遺構内一括(G-18/Ⅳa)	火葬墓	須恵器坑頸壺	13.1	19.4	12.0	良好	精緻	2.5YR5/6(明赤褐色)	-	-	蔵骨器として使用
	109	遺構内一括(G-18/Ⅳa)	火葬墓	土師器坏	13.4	4.8	6.4	良好	精緻、赤色粒	10YR8/4(淡黄橙)	見込みの調止ナデ	ナデ	供献土器
	110	遺構内一括(G-18/Ⅳa)	火葬墓	土師器坏	12.6	4.2	5.5	良好	精緻、赤色粒わずか	10YR8/3(淡黄橙)	見込みの調止ナデ不明	ナデ	供献土器

第19表　墨書・刻書土器観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区／層)	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整(内)	調整(外)	方向	文字	備考
55	111	1094(E-11/Ⅲ) 3781(F-10/Ⅳa) 3783(F-10/Ⅳa) 3788(F-10/Ⅳa) 一括(-/-)	土師器	13.0	4.0	7.5	精緻	良好	5YR7/8(橙)	ナデ	ナデ、底部外面にヘラ切り痕	-	桑原	灯明具として使用、底面に「十」字状の線刻
	112	2159(F-13/Ⅳa) 2311(F-13/Ⅳa)	土師器	14.2	4.4	7.5	精緻	良好	7.5YR8/8(黄橙)	ナデ、見込みの調止ナデ残り	ナデ	逆	田	-
	113	1165(D-13/Ⅳa)	土師器	-	(1.0)	5.8	-	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	-	-	-	-	-
	114	2093(F-14/Ⅳa)	土師器	-	(1.2)	7.0	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	ナデ、見込みの調止ナデ残し	-	-	-	-
	115	310(E-13/Ⅳa)	土師器	-	(2.0)	-	精緻	良好	-	-	-	-	-	-
	116	3191(E-14/Ⅳa)	黒色土器	-	(2.1)	-	精緻	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	-	-	-	-	-
	117	2638(E-15/Ⅳa)	土師器	-	(3.8)	-	精緻	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	-	-	-	-	-
	118	678(E-12/Ⅳa)	須恵器	12.2	(2.0)	-	精緻	良好	5Y7/1(灰白)	ナデ	ナデ	正	仏	-

第20表　焼塩壺観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区／層)	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	備考
56	119	1684(F-13/Ⅳa)	12.0	(7.5)	0.8～1.0	砂粒	良好	5YR6/8(橙)	内面に布痕有り
	120	2000(F-13/Ⅳa)	14.2	(6.6)	1.1～1.6	砂粒	良好	2.5YR6/8(橙)	内面に布痕有り
	121	一括(-/-)	11.2	(3.7)	0.8～1.2	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	内面に布痕有り
	122	1781(F-12/Ⅳa)	12.0	(4.6)	0.7～1.0	砂粒	良好	5YR6/8(橙)	脆弱で厚減、内面に布痕有り
	123	71(F-6/Ⅳ)	(15.0)	(5.5)	0.7～1.1	精緻	良好	5YR6/8(橙)	脆弱で厚減、内面に一部布痕を認める
	124	509(E-12/Ⅳa)	-	(4.5)	0.8～1.7	砂粒	良好	2.5YR6/8(橙)	内面に布痕有り
	125	565(E-12/Ⅳa)	-	(4.6)	1.0～2.0	砂粒の抜けが多い	良好	2.5YR6/8(橙)	側部欠損、内面に布痕有り
	126	1900(E-9/Ⅳa)	-	(3.7)	-	精緻	不良	7.5YT7/3(にぶい橙)	底部欠損、内面に布痕有り
	127	3856(F-10/Ⅲ) 3859(F-10/Ⅳa)	-	(3.8)	1.0～1.2	砂粒	不良	7.5YS/6(明褐)	内面に布痕有り

第21表　紡錘車観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区／層)	径(cm)	器厚(cm)	穿孔径(cm)	胎土	色調	側面調整	備考
57	128	1283(F-13/Ⅳa) 1547(F-13/Ⅳa)	7.0	0.5～0.8	0.6	精緻	7.5YR8/8(黄橙)	○	底部へラ切り痕あり
	129	800(E-12/Ⅳa) 816(E-12/Ⅳa)	6.0	0.8～0.9	(0.5)	精緻	7.5YR7/4(にぶい橙)	○	底部へラ切り痕なし
	130	2047(F-13/Ⅳa)	6.6	0.8～0.9	0.6	精緻	7.5YR7/4(にぶい橙)	○	底部へラ切り痕あり
	131	2100(F-14/Ⅳa)	7.2	0.8～1.0	1.0	精緻	7.5YR7/6(橙)	○	底部へラ切り痕あり
	132	454(E-12/Ⅳa)	7.2	0.6～0.7	0.6	精緻	7.5YR7/4(にぶい橙)	○	底部へラ切り痕あり
	133	1912(E-10/Ⅳa)	6.8	1.0～1.1	0.8	精緻	10YR8/3(淡黄橙)	○	底部へラ切り痕あり

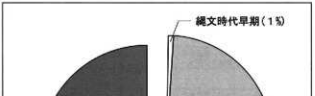
第22表　鉄製品観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区／層)	種類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
58	134	2870(D-15/Ⅳa)	不明	(64)	(18)	(5)	(8.87)	穿孔径5mm/4mm
	135	1354(E-13/Ⅳa)	刀子	(42)	(10)	(5)	(2.68)	-

第Ⅴ章　発掘調査のまとめ

本遺跡では，縄文時代と古代の遺構・遺物を発見した。出土遺物総数3,914点中縄文時代の遺物は1,184点，古代の遺物は1,877点，小破片のため時期判別ができなかった遺物が853点あった。明確に時期判別ができた遺物3,061点中，縄文時代と古代の出土遺物数の割合を示したのが第59図である。さらに，縄文時代の遺物中，その99.7%が晩期の遺物であり，本遺跡の特徴を示している。

以下，縄文時代と古代の二時期を中心に調査成果を述べ，まとめとする。



第59図　時期別出土遺物の割合

1．縄文時代

縄文時代の調査では，集石遺構1基，土坑9基を検出した。集石遺構は第Ⅳ層上面で検出し縄文時代早期と判断したが，周辺から楕円押型文や山形押型文土器（手向山式土器）が出土している。9基の土坑の内，逆茂木痕を伴う土坑を2基検出したが，時期認定を以下の通り試みた。①2号土坑の検出面はⅩⅠ層で，埋土は第Ⅳ層中心と判断されることから，縄文時代早期以降，②5号土坑は検出面は第Ⅲ層であるが，埋土上部に御池火山灰が堆積することから縄文時代中期以降と判断できる。

縄文時代早期以降，出土遺物の量や検出遺構の種類から，おおむね狩猟対象地か短期的な野営地のような土地利用が想定される。

縄文時代晩期の出土遺物は，上述したように本遺跡の遺物総数の約5分の2を占め，一定期間安定して生活が展開した様相がうかがえる。

出土土器は7割の黒川式土器で，単純に構成される。半粗半精製（No.60）は口縁部に煤の付着が確認でき，調理具として使用したと思われる。頁岩製の打製石斧2点は当該時期の土掘具と考えられ，同じく石鏃は未製品も含めて12点出土が確認できる。黒曜石製の石鏃は，西北九州産の良質な石材が使用されている。これらも含めて Ⅳ層出土の石器全体の分布状況は縄文時代晩期土器の分布と重なり，遺跡南側の山頂へと続く斜面を中心に広がっていることが確認できる。以上のことから本遺跡の縄文時代晩期の様相は，遠隔地と広範な交流を有しての一時期の生活拠点としての土地利用がなされたと考える。遺物の集中区が南側斜面を中心に広がりを見せることについて，あえて言及すると，本遺跡調査区範囲外の南東には瘤尾根が存在し，当該時期の生活拠点はこの地点を中心に利用した可能性が考えられよう。

2．古代

古代の調査では，掘立柱建物跡4棟，火葬墓1基，焼土4基，土坑，古道などを検出した。出土した遺物は土師器が最も多く，全体の8割を占め，外に焼塩壺，須恵器，黒色土器などが出土した。以下，遺構と遺物，さらに周辺遺跡との関連性から考察し，本遺跡の古代の様相を明らかにしていく。

①　検出遺構と遺物との関連について

本遺跡は標高320mの丘陵北側に広がる緩斜面に立地し，すぞ野の平坦地(調査区南側)から隣接，あるいは切り合った状況で4棟の掘立柱建物跡を検出している。その内，1号掘立柱建物跡内からは焼土遺構も共伴して検出し，さらにその周辺からも計3基の焼土を検出した。焼土遺構の周辺には不規則に並ぶピットを多数検出し，復元には至らなかったが，一部の規則的な配列ピットから複数の掘立柱建物が存在していた可能性もある。また，4棟の掘立柱建物跡検出エリアに隣接した10基の土坑を，調査区北側には古道を多数検出した。

遺物の多くは掘立柱建物跡検出エリアを中心に出土し，遺物の出土状況，および個々の遺物の詳細については各章で述べたとおりである。ここでは，出土遺物と遺構とを関連づけて出土点数が多かった区について述べていく。

土師器

出土した土師器の破片数の内訳は，甕が全体の7割を占める。以下，坏，椀，鉢，器種不明の土器となるが，土師器甕は，外の器種に比べて法量が大きく破片として出土する量が当然多くなること，さらに他の器種と比べて分類が容易であることなどを考慮すると特異な出土状況ではない。

土師器が特に集中して出土したエリアは，1号・2号掘立柱建物跡とその周辺部に位置するE・F-12～14区で，調査区南側の傾斜面から10数点，北側の古道の周辺では散在する形で出土している。

須恵器

須恵器は総数93点の出土で甕，坏，壺，高坏，皿が見られ，土師器と同様の1・2号掘立柱建物跡の周辺エリアから多く出土している。古道周辺や南側傾斜面にかかる手前の緩斜面にも散在する形で出土している。

焼塩壺

土師器甕，須恵器と同様な状況で出土しており，特に1号掘立柱建物跡周辺から多く出土している。

赤彩・黒色土器

計32点出土しているが，1号掘立柱内やその周辺，2号掘立柱周辺から集中して出土しており，遺構密度が粗であるE-6区からも出土している。

紡錘車

8点出土した。1号掘立柱建物跡が検出されたF-13区，およびその周辺のE-12区から多く出土している。

墨書・刻書土器

1号掘立柱建物跡が検出されたF-13区から2点，F-10区から2点，他は，D-13区に1点，E-11区に1点と散在している。

鉄製品

E-13区から1点，D-15区から1点出土している。

各区の遺物の出土状況は第60図のとおりである。この図から全出土遺物点数1877点中，E-12区が406点と圧倒的に多く，次にF-13区が241点，F-12区が208点，F-14区が183点，E-13区が168点となる。

出土した遺物の96パーセントが緩やかに傾斜する平坦部から出土し，先に述べた縄文時代晩期の遺物出土状況と比較した場合，土地を利用する際の決定基準に何らかの差異がうかがえる。さらに，現代の耕作等による削平，撹乱による遺物出土の空白地帯があるが，今回の調査区範囲外の西側へも遺構，遺物が広がりを見せることは確実で，この辺り一帯を古代の集落跡としてとらえていく必要がある。

なお，焼土遺構の性格を明らかにする上で鍛冶関連遺構を念頭に置いた調査が重要であるが，本調査区内からは鉄滓や羽口，鍛造剥片等の遺物は出土していない。

② 周辺遺跡との関連について

本遺跡から出土した須恵器の甕(No.100，No.101)は，外面が格子タタキで内面は特殊な当て具(同心円の四枠目に放射状の痕跡が残されるもの)を使用している。この種の甕は，本遺跡から南側の丘陵を越えた踊場遺跡でも確認されている。踊場遺跡はその出土遺物に本遺跡との共通点が多いことから，両遺跡間の比較によって時期的な位置付けを試みる。

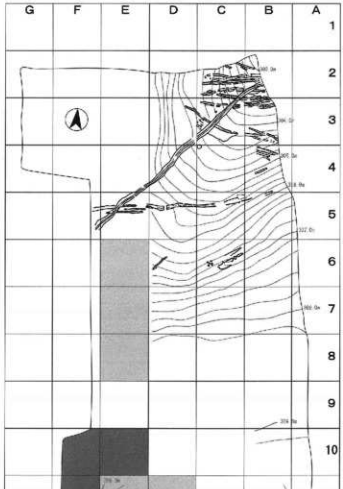
遺物の比較

ここでは，土師器甕，土師器坏について比較を試みる。

比較の視点は土師甕は器壁厚，坏は口径・底形・器高を完形品のみで比較する。なお，「高篠遺跡」「踊場遺跡」の発掘調査報告書に記載してある編年を参照にするため，高篠遺跡も扱うことにする。

第23表の器厚平均は，最小厚平均と最大厚平均との平均値であり，第24表の数値も平均値である。

本遺跡の土師器甕は，全体的に器壁が厚く，口縁部が



第60図　各エリアの遺物出土状況

短い器形が多い。甕の厚みは高篠遺跡とほぼ同じで踊場遺跡はこの中で最も厚い。

坏の特徴としては，充実高台の認められない平底で，器高は4cm前後が多く5cm前後の深手のものは確認できず，形態差の少ないものがほとんどである。対象の二遺跡と比較してみると，形状は，両遺跡の坏に類似しており，高篠遺跡より小型で，踊場遺跡よりはやや大きくなる。踊場遺跡で確認された底部が張り出す坏はごく少数であるが，高篠遺跡で確認された砂粒を多く含む坏が本遺跡からも出土している。

以上，本遺跡の土師器甕と坏は両遺跡に帰属しており，高篠遺跡の土師器甕，土師器杯の編年案に照らした場合，高篠遺跡の9世紀前半～後半と踊場遺跡の9世紀後半～10世紀初頭の間をつなぐ9世紀中～9世紀後半頃までの時期に入るものと考えられる。

第23表　土師器「甕」器厚の比較

項　目	最小厚(mm)	最大厚(mm)	器厚平均(mm)
高篠遺跡	6.3	12.3	10.3
踊場遺跡	9.4	14.5	12.0
財部城ヶ尾遺跡	8.0	13.0	10.4

第24表　土師器「坏」の比較

項　目	口径(mm)	器高(mm)	底部(mm)	口径－底部(mm)
踊場遺跡	12.3	4.3	6.5	5.8
高篠遺跡	13.1	4.5	6.4	6.7
財部城ヶ尾遺跡	12.7	4.2	6.7	6.0

古道

本遺跡の調査区北側からは多数の古道を検出したが，その多くは東西に向かうもので，掘立柱建物跡などの一群の遺構との直接的な関連性を見出すには至らない。しかし，これらの古道を北東－南西方向に切る古道が1条，外にも調査区南側の斜面から蔵骨器が埋納されていた火葬墓へつながると思われる古道を1条，さらに削平によって一部しか残存していないが数条の類似した古道を検出した。これらの古道はいずれも二つの山頂に挟まれた谷筋の方向を向き，その方向には踊場遺跡が立地する。踊場遺跡からも山腹に沿った東西に延びる古道を6条検出しており，本遺跡の古道とつながる可能性がある。最近まで同じルートで山腹を辿る生活道路が現存していた。

また，本遺跡からは，底部に「桑原」と書いた墨書土器や「仏」とヘラ書きした刻書土器が出土したが，数が希少であるためその性格を断定することはできないが，周辺遺跡からも墨書土器が出土していることから考えて，文字を読み書きできる人々が少なかった時代に，識字層（官人）がこの周辺に存在していたと想定したい。さらに，蔵骨器と供献土器が埋納された火葬墓を検出したが，本遺跡が位置している財部町では，「十文字黒田B遺跡」からも蔵骨器が出土し，8世紀台のものと考えられている。財部町は，古代「日向国諸県郡」に属しており，旧諸県郡内を見渡すと16か所もの場所から「蔵骨器」が出土している。このことは，この地方が早くから火葬という埋葬形態を伴う仏教文化の影響を受けていることを示唆しており，隣接する踊場遺跡の7号掘立柱建物跡の中から出土した宗教的，祭祀的な性格の強い墨書土器とも関連性を見出すことができる。

本遺跡と踊場遺跡をつなぐ古道の存在は，小高い丘陵地を中心にして仏教文化を取り入れながら構成された当時の集落の様相を考える上での重要な示唆となる。

（蔵骨器，火葬墓についての詳細は，本報告書「付編・鹿児島県内の蔵骨器について」を参照にされたい）

<参考文献>

「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書』(71)2004

「財部町郷土史」財部町郷土史編纂委員会　1997

第61図　本遺跡と踊場遺跡との地理的関係

付　　編

財部城ヶ尾遺跡出土の蔵骨器内焼骨について

峰 和治
(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科)

1．はじめに

東九州自動車道建設に伴う平成11年度の発掘調査で，鹿児島県曽於郡財部町南俣所在の城ヶ尾遺跡から有蓋蔵骨器1組が出土した。骨片に焼骨の遺存が確認されたため，鹿児島県立埋蔵文化財センターから筆者に処置が依頼された。以下に所見の概要を報告する。なお，この蔵骨器の身部は瓢壺形の短頸壺で，土師器椀が口縁に蓋をしたままの直立状態で検出された。すぐ脇には，2点の土師器坏が供献されていた。土師器の形態から，所属年代は9世紀後葉から10世紀とみられている。

2．焼骨の取り出し，重量，同定部位

出土した蔵骨器は現地で土師器椀の蓋部をはずし，焼骨を入れた身部だけを筆者の研究室に移送した。器内の焼骨は，任意の深さ（2～3cm）までを層状のブロックとして取り出していったため，最終的には5層に区分された。これはあくまで便宜的・人為的な層区分であり，蔵骨器の中で各破片がどのレベルに位置していたかを知る大まかな目安となるものである。各層の焼骨の配置は，上方からの写真撮影とメモによる記録にとどめた。

蔵骨器内には土砂が流入していたため，整理の手始めとして，取り出した内容物を層毎に2mmメッシュの篩にかけた。篩に残った残渣から骨片だけを丹念に拾い出し，重量を計測したところ610gあった。灰や砂とともに篩の目を通過した細片や骨粉も少なからずあるが，土砂と骨との完全な分別が困難なことから，610gを本例の焼骨重量とする。

焼骨の大半は細破片となっていて，部位の同定ができたものはごく少量に限られた。しかし，重複する部分はなく，1個体の人骨とみなして差し支えない。器内からは，骨と流入土砂以外のものは検出されなかった。

各層の概略は次の通りである。なお，口縁が傾斜しているので，器高が最も小さくなる位置を深さの基点とした。

1層：口縁から深さ5～8cmの範囲

最上層で，茶褐色のフカフカの流入土に黒色の炭化物？が混在。焼骨は土中に浮いた状態のごく少量の破片のみ。部位の特定ができたものはない。骨重量1g。

2層：口縁から8～10cmの範囲

上層の骨が露出し始める。細片の中には，少量の頭蓋冠片と体肢骨の厚い緻密質片が含まれる。41g。

3層：口縁から10～12cmの範囲

頭蓋冠片が比較的多い。細片だが側頭骨，頭頂骨，下顎骨などの骨種が区別できる。歯の破片7点が含まれる。体肢骨もほとんどが細片である。189g。

4層：口縁から12～14cmの範囲

全身の焼骨破片が万遍なく含まれる。3点の歯片がある。169g。

5層：口縁から14～17cm（器底）の範囲

最下層であり，全身の焼骨破片が万遍なく含まれる。11点の歯片が含まれる。5層の中では量的に最も多い。210g。

頭蓋では後頭骨，側頭骨，前頭骨，上顎骨および下顎骨が，各骨の特徴的な形態を示す部位によって確認された。そのほか，頭蓋冠の内板と外板が分離した破片が多数ある。歯はすべてエナメル質が剥離しており，歯根の象牙質を主体とした破片21点が識別された。頭蓋とみなした骨片の総量は90gで，全体の約1/7である。体幹・体肢骨の部位判定は，細片化によってほとんどできなかった。

3．焼骨の性状

一般に火葬骨は，受けた熱によって変色，収縮，変形，亀裂，細片化などの変化を生じる。城ヶ尾例にも焼骨特有の鱗状亀裂や顕著な反りと歪みを呈する破片が含まれていた。細片化が顕著で，最長の体肢骨破片でも41mmしかなかった。筆者が過去に経験した同量以上の火葬骨と比較すると，同定可能な部位が極めて少なかった。

骨表面の色調は暗灰色，白色，茶褐色，黒色と多様であり，火の周り具合の不均一さを示していた。頭蓋冠の破片には，白色のものと生焼けの茶褐色の破片とが混在し，同じ頭部でも部位によって火の受け方が異なることが推測された。歯のエナメル質も完全に剥離しており，全体的にはよく焼けていると言えるであろう。

4．性・年齢

性別判定の決め手となる部位は特に残っていないが，頭蓋冠や大腿骨体・脛骨体の緻密質の厚みは男性的な印象が強い。脳頭蓋の縫合部の破片が数点遺存し，内・外板とも癒合箇所は見られない。歯根片はすべて永久歯で，根管や根尖孔は狭い。従って，成人とは言えるが，それ以上の詳細な年齢区分までは判定できない。

5．城ヶ尾火葬骨の特徴と考察

城ヶ尾遺跡出土の蔵骨器内焼骨は成人男性のものと推定された。骨は比較的よく焼成されていたが，重量は610gと少なめであった。比較資料として，鹿児島・宮崎両県から出土している蔵骨器内から検出された焼骨のうち，基本情報が報告されている例を表1に示す。1個体分としては日置郡金峰町白樫野古代火葬墓（宮下，2000）の1650gが最重量である。ほかに1000gを超える焼骨が奄美大島笠利町の宇宿貝塚（峰・小片，1997），肝属郡吾平町の川北古石塔群（松下，1984），都城市横尾原遺跡（峰・他，1992）で報告されている。今回の城ヶ尾例はそれらの半分足らずの量しかない。同定された部位に特別な偏りはないが，体格の違いを考慮して

も，今回の遺存量は全身の焼骨がくまなく納められたものとは考えにくい。

容器の中からごく少量しか焼骨が見つからない事例は過去にも報告されている。納骨量が少ない場合，いくつかの可能性が考えられる。①残りは他所に分骨した，②火葬の現場に意図的に相当量を残した（主要な骨だけを拾った），③火葬場)所に非意図的に取り残した（拾骨を丹念に行わなかった），④改葬や供養を契機として集骨や散骨が行われた，⑤蔵骨器の大きさや形状による都合で入れる骨量が制限された，⑥後世の容器破損や流出によって四散した，などである。城ヶ尾例では，全身の1/2程度の骨量が含まれているとみられる。また，容器の上部にはある程度の空間的余裕があった。実際の火葬地がどこであったのかという点も，確定されていない。従って，上記のどの可能性も否定はできないし，いくつかの要因が組み合わさっている可能性もあろう。

今回，層状のブロックとして内容物の取り出しを行ったのは，骨の部位と器内における位置に何らかの関連が認められないか，検索することを念頭に置いていたからである。改葬した骨を甕に納める際に頭蓋を最上部に置く南西諸島の例や，輪状をのせた上で最後に骨壷に入れる仏教的な作法なども広く知られている。城ヶ尾例では，2～5層に頭蓋と体肢骨の破片が混在しており，上層に頭蓋や椎骨が集中するというようなことはなかった。このような所見から，納骨する前の段階で全身各部の骨（量的には全身の約半分）が一括集積されていた，との見方ができる。

これまで，蔵骨器（骨蔵器）や埋納遺構に関する研究は少なからず行われてきたが，その内容物である焼骨については ほとんど関心が払われてこなかった。火葬骨は元の形態をほとんど保っていない場合が多く，形質人類学的には興味を引きにくい存在であったと言える。しかし近年，火葬に関する有益な情報を引き出せる資料として，その価値が見直されつつある。性・年齢・体格といった遺骨の主の個人データだけでなく，火葬の方法や納める骨の量，納骨に当たっての作法や順序など，当時の葬送儀礼の一端を知る材料ともなりうる。また焼骨以外に，被葬者の身につけていた装身具が焼け残って混在している場合もある（都城市横尾原遺跡1号蔵骨器内の弁など）。蔵骨器が発見された場合，通常は内容物を一括して取り出してしまうことが多いが，上記のような視点に立って，丹念な記録を取りながら器内から焼骨を取り出すことで，新たな知見がもたらされる可能性も低くはないと考える。

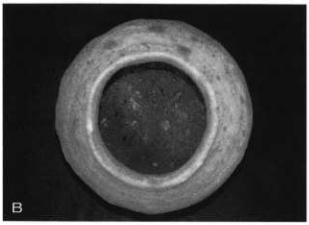
[文献]
松下孝季：鹿児島県大隅半島出土の火葬骨．鹿児島考古 18:163-169（1984）
峰和治・小片丘彦：笠利町宇宿貝塚出土の蔵骨器内焼骨について．笠利町文化財報告書23:15-30(1997)
峰和治・小片丘彦・竹中正巳：都城市横尾原遺跡出土の火葬人骨．「西原第2遺跡・他」，都城市文化財調査報告書 16:149-152 (1992)
峰和治・竹中正巳：宮崎市迫内遺跡出土の骨蔵器内焼骨について．宮崎県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 59:229-236 (2002)
宮下貴浩：白樫野古代火葬墓と製鉄遺物．鹿児島考古 34:83-100 (2000)
[註：焼骨の所見は竹中正巳による]
小片丘彦：川内市御陵下町越ノ巣出土蔵骨器内の火葬骨．川内市歴史資料館年報[昭和62年度]:5-6 (1988)
小片丘彦・峰和治・竹中正巳：弓場城跡出土の蔵骨器内火葬骨について．「谷山弓場城跡（上巻）」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 11:160 (1992)

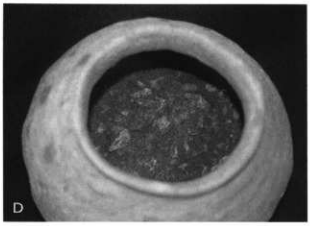
表1　鹿児島県および宮崎県出土の主な蔵骨器内焼骨

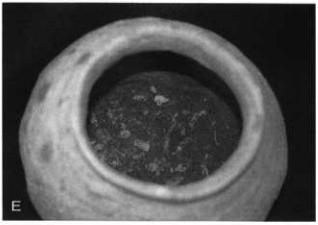
遺跡名称	所在地	容器	時代／年代	性・年齢	重量(g)	報告者（年）
財部城ヶ尾遺跡	曽於郡財部町	短頸壺	9世紀後葉～10世紀	男・成人	610	本報告
黒田田遺跡	曽於郡財部町	土師器甕	奈良	?・?	570	松下(1984)
小平遺跡	曽於郡末吉町	須恵器壺	平安	?・?	110	松下(1984)
川北古石塔群	肝属郡吾平町	成川式壺	鎌倉	男・熟年	1150	松下(1984)
越ノ原火葬墓	川内市	須恵器壺	奈良	男・成人	870	小片(1988)
美野第1例	姶良郡蒲生町	須恵器壺	平安?	?・成人	290	未報告資料
美野第2例	姶良郡蒲生町	須恵器壺	平安?	?・成人	780	未報告資料
谷山弓場城跡	鹿児島市	須恵器壺	平安～鎌倉	?・?	25	小片他(1992)
白樫野火葬墓	日置郡金峰町	土師器短頸壺	8世紀後半～9世紀初頭	?・壮年	1650	宮下(2000)
宇宿貝塚	大島郡笠利町	陶質土器	10世紀	男・壮～熟年	1380	峰他(1997)
横尾原遺跡1号	都城市	須恵器壺	奈良	男・熟年	1110	峰他(1992)
横尾原遺跡2号	都城市	須恵器壺	奈良	?・成人	630	峰他(1992)
迫内遺跡	宮崎市	古瀬戸瓶子	13世紀後半	男・熟年	493	峰他(2002)

註：土壌だけで容器を伴わない焼骨の事例は除いた。

図版１　蔵骨器内焼骨

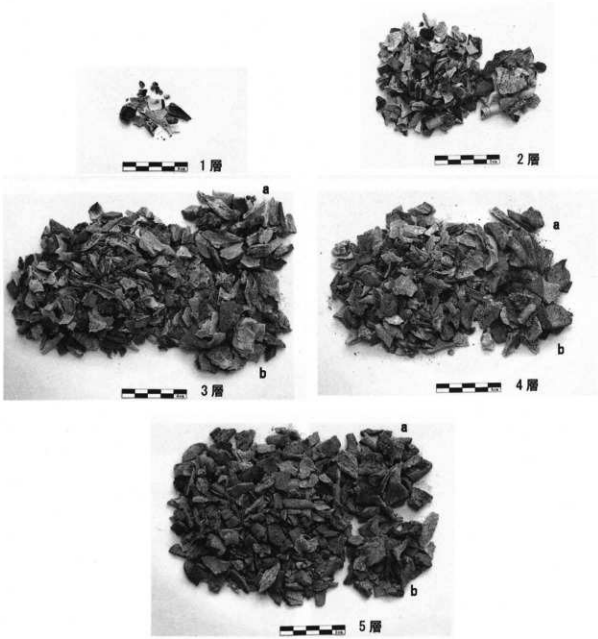






A：出土状況．蓋部をはずして身部だけを側面から見る．
B：内容物の取り出し前．口縁内に１層の上面が見える．
C：２層の上面．　D：３層の上面．　E：５層の上面．
F：取り出し後．

図版２　蔵骨器内焼骨



各層の焼骨一括写真．３～５層では写真の右寄りに体肢骨(a)と頭蓋(b)の主要な破片がまとめられている．

図版３　蔵骨器内焼骨

A：頭蓋破片　B：歯の破片　C：体肢骨破片

鹿児島県内の蔵骨器について

はじめに

鹿児島県の古代(8世紀～10世紀)の蔵骨器（骨蔵器）は，約60ヶ所で収集発見が報告されている。しかし，その多くは農作業中や土砂採取時の不時の発見に因るもので，埋納形態や詳細な出土状況の復元できるものは10例にも満たない。また，発掘調査による出土は，わずか4例(鹿児島市谷山弓場城跡，財部町財部城ヶ尾遺跡，川内市都原遺跡，東市来町向榕城跡)である。したがって，本遺跡出土蔵骨器は貴重な資料と言える。そこで，本遺跡蔵骨器の歴史的な位置付けを試みたい。

1．本県蔵骨器研究の経緯

本県の蔵骨器に関する研究は藤森栄一によるものを嚆矢として，新東晃一，池畑耕一，中村耕治，上田耕等のものがある。

藤森は「南薩阿多発見の須恵質蔵骨器」として，阿多(薩山上橋ノ丘)遺跡の蔵骨器を取り上げ，県内の資料が広く知られるきっかけとなった。ただしこの後，戦中戦後の数年間は，県内の蔵骨器についての研究はみられない状態が続く。

1953年，吉田町宮之浦牧で，苰穴を掘る際に土坑内に納められた須恵器製蔵骨器が発見された。調査は重藤重二・東才二が行い，さらに河口貞徳が再調査を行い，遺構内での埋納状況が確認できた最も古い事例である。その際蔵骨器に伴い，墨書された土師器坏が発見されている。その後，河口貞徳は不時発見による吉松町牧若寺（1972年），国分市第一工業人学遺跡，鹿児島市聾学校遺跡等の調査を行っている。

1956年，石部正志氏は『古代学研究』誌上において「大隅半島の骨蔵器」で，篠ノ迫遺跡と屋敷寺遺跡出土の蔵骨器を大隅半島初見例として取り上げている。これは同志社大学の大隅町八合原遺跡調査時に南之郷中学校保管資料を図化したもので，これ以後蔵骨器が注目されるきっかけとなった。1957年刊行の『末吉郷土史』中では上述の2例に加え，荒神免遺跡の蔵骨器が紹介されている。

1960年の安井良三「日本における古代火葬墓の分類 －歴史考古学的研究序論－」，寺師見国・三島格の「薩摩大口伊佐郡における蔵骨器」及び「籠及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」が相次いで発表された。前者は蔵骨器の型式学的な変遷資料として，後者は事例紹介として資料を取り扱っている。

1970年上村俊雄は，高山町後田遺跡発見の蔵骨器の資料紹介を行い，1972年に田之浦蔵骨器について報告している。また，1985年に阿多発見の須恵器製二重口縁壺の資料紹介を行っている。

1973年白木原和美は，南島に分布する類須恵器について考察し，喜界町小野津八幡神社の資料の特異性を指摘した。その後，池畑は，古代の蔵骨器として取り上げている。

1976年，不時発見の川内市高城町黒彩原の蔵骨器と大隅町鳥居段の蔵骨器が報告された。その後，1983年と1984年に「大隅地区埋蔵文化財分布調査報告書概報」，1992年谷山弓場城跡，1988年越ノ泉火葬墓等の報告書・年報中で調査報告，資料紹介が行われている。

1976年新東は「隼人における共同体社会の解体期について」で，骨蔵器の分布が大口盆地周辺に多く，多くが平安時代初頭であることを指摘した。

1978年亀井明徳は西之表市西俣遺跡発見の猿投産とみられる灰釉陶器を利用した骨蔵器について資料紹介を行っている。これは極めて特異な例で，類例をみない。

1988年の「鹿児島県内蔵骨器出土地名表」や1990年の黎明館企画展図録『仏教文化の伝来』で，一覧や写真解説が基礎資料となる。

以上の経緯を総合すると，第Ⅰ期が1980年代前半期で，資料紹介を中心とした「蔵骨器研究の幼年期」であり，第Ⅱ期が1980年代後半から現在に至る，資料集成・新出資料の紹介等多様な研究の「蔵骨器研究の成長期」と言えよう。近年，資料は僅かであるが増加していることから「蔵骨器研究の成熟期」を目指し研究の深化が期待されるところである。

2．鹿児島県内における蔵骨器の紹介

県内で蔵骨器の現物，もしくは実測図の確認できるものは50点，実測図の公表されているのは30点で他は資料化されていないため，今回新たに10点の実測を行った。また，公表されているが調整技法等表現の附加が必要と判断した7点についても，再実測及び実測図の一部修正を行なった。

＜今回新たに資料化した蔵骨器＞

①小野砂　吹上町小野砂

昭和30年(1955)8月元井熊太郎発見。詳細な出土状況や共伴遺物の記録は無し。

蔵骨器は二重口縁壺で，口縁部の屈曲部付近と底部に打ち欠きが確認できる。器高は23.8cm．底径10.4cmを測る。胴部は最大幅部から丸味を成し口縁部に至る。外面には左斜め上のタタキが頸部近くまで認められ，内面は指押さえやナデが施され，当具痕は認められない。

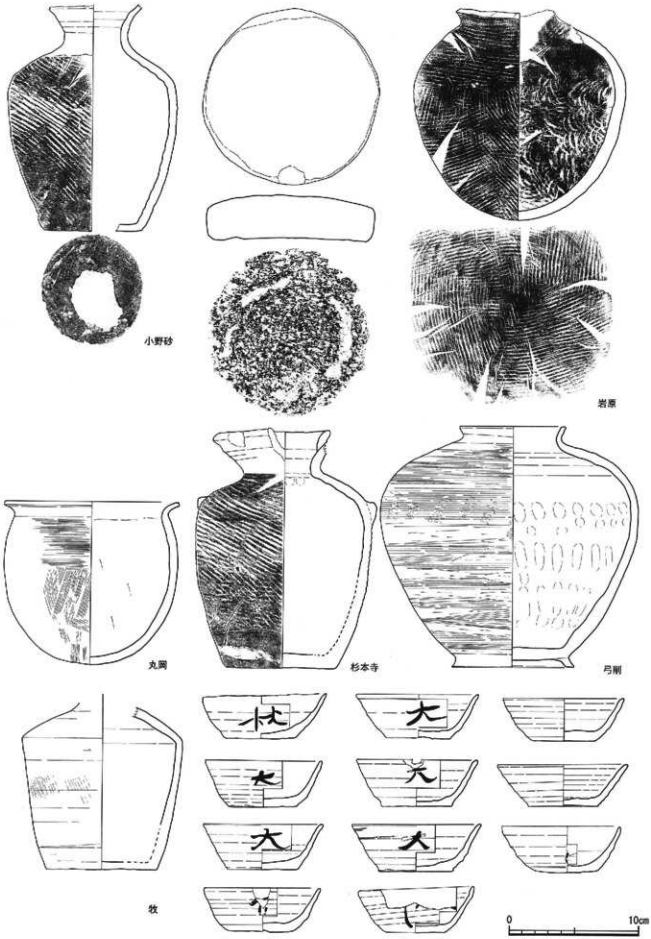
②杉本寺　加世田市川畑

杉本寺は，一乗院の末寺で現在の加世田市役所敷地にあった。蔵骨器はその西南隅から出土した(池畑　1990)。

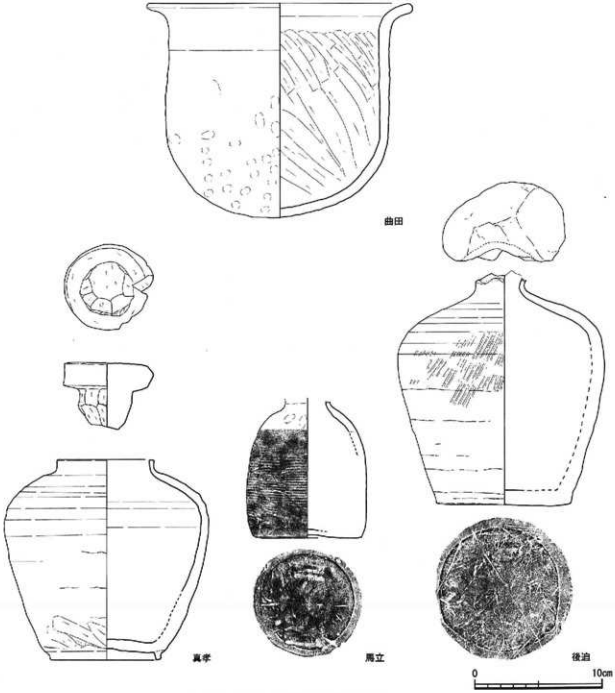
蔵骨器は二重口縁壺で肩部に一対の耳を持つ。口縁部はややいびつで，また一部を打ち欠き，器高25.7cm．底径11.4cmを測る。胴部は若干丸味を持ちながら立ち上がり，頸部近くで最大径となる。タタキ調整は胴部下半では水平タタキの後に左上がりのタタキが，上半では左上がりのタタキが頸部付近までみられる。内面は指押さえとナデ調整が認められる。

蓋は轆石製の轆と，径約33cm程度の円盤状の轆石製蓋が二点に使用されていた。

③牧　吉田町宮之浦



第１図　新たに資料化した蔵骨器(１)



第2図　新たに資料化した蔵骨器(2)

昭和28年(1953)に李穴掘り中に発見された。遺構は長径100cm，短径80cm，深さ60cmの楕円形の土壙で内部には木炭片の混ざった黒色の埋土がみられた。床面中央に蔵骨器がみられ，周囲には合口の土師器坏が6か所にみられた。蔵骨器は頸部から打ち欠き，現存長17.5cm，最大径16.5cm，底径11.5cmでやや小型である。胴部最大幅部は屈曲が強く，稜線を呈している。胴部外面には左上がりのタタキを施した後に回転のナデを施し，わずかにタタキ痕が消し切れず残る。底部外面には当具痕がみられる。土師器坏は11点を図化した。明赤褐色と浅黄褐色を呈す２種があり，前者は体部下端からナデが，後者は体部下端にナデきれない部分を残す。

④丸岡遺跡　菱刈町丸岡

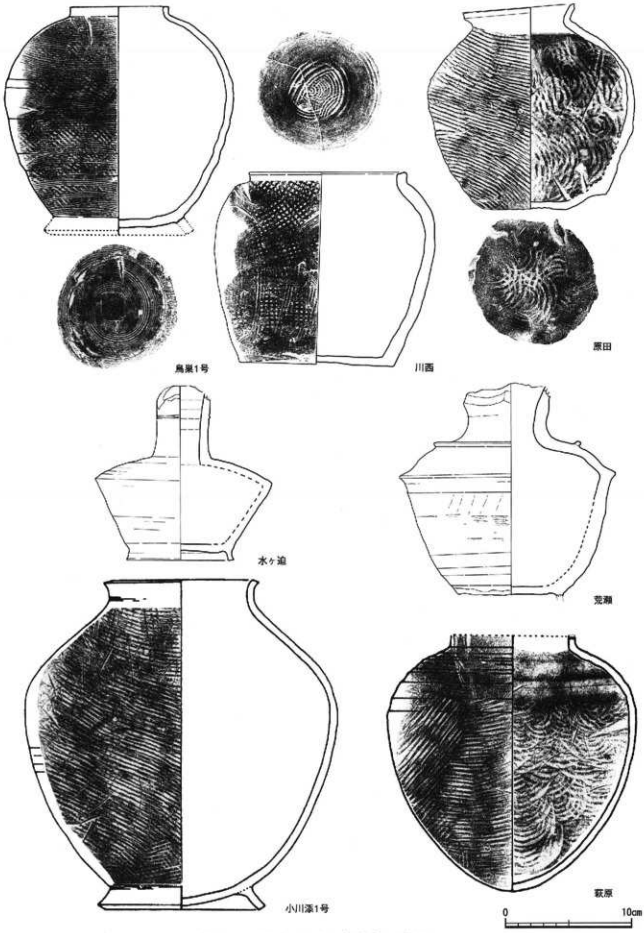
出土状況を伝える資料は無く，寺師見国の所蔵資料で現在黎明館に寄託されている。

小型の土師器甕で口径18cm，器高17cmを測る。橙色を呈し胴部外面の上位に回転の横ハケ，下位に不整方向のハケがみられる。胴部は若干膨らみを持つ。

⑤岩原　加治木町岩原

加治木町立郷土館に所蔵されるが，出土状況は不明である。

蔵骨器は須恵器甕で，口縁部は打ち欠き，外面に平行タタキ，内面は上位で回転ナデ，下位で同心円の当具痕がみられ



第３図　再実測・図面を一部改変した蔵骨器

る。内外面共に上位と下位で調整方法の違いが看取される。

⑥弓削　加治木町弓削

加治木町立郷土館に所蔵されるが，出土状況は不明である。

蔵骨器は高台付の須恵器短頸壺である。胴部最大幅付近に左上がりのタタキ，それより上位ではカキ目，下位ではカキ目の後に部分的にケズリが施されている。内面は胴部最大部分付近で指押さえが，下位では指押さえ，もしくは指ナデがみられ，上位は回転ナデが施され，内外面共に上位と下位では調整方法の違いが指摘できる。蓋は現存しない。

⑦曲田　加治木町西別府

加治木町西別府曲田の岩崎家の畑地から出土した。中には焼骨，木炭があったと伝えられている。加治木町立郷土館に所蔵されるが，出土状況は不明である。

蔵骨器は土師器である。直線的な胴部から短く口縁部が外反し，端部は丸く胴部外面上位には横ナデ，下位には指押さえがみられる。

⑧真孝　牟人町真孝

高台付の須恵器短頸壺と軽石製の棺が伝えられるが，軽石製の棺は蔵骨器よりも小さくセット関係とは考えにくい。

蔵骨器は内外面共にナデ調整で，最大幅部から上位で回転ナデ，下位で不整方向のナデである。また，胴部外面下端付近ではケズリが確認できる。

⑨馬立　溝辺町崎森

花瓶正志により発見されたが，出土状況は不明である。また，蓋も認められない。

蔵骨器は胴部下位が尚状に立ち上がり，頸部に向かいすぼまる。胴部外面は下位に水平のタタキ，上位に指押さえと回転ナデがみられる。

⑩後迫　蓬北町後迫

蓬北町歴史民俗資料館に所蔵されている。蔵骨器の蓋に自然石を用いている点が他にはみられない特徴である。

蔵骨器は二重口縁壺で口縁部を打ち欠いている。頸部は強くすぼまり，胴部外面には右上がりのタタキが最大幅付近に，そこから上位は回転ナデが施されている。

＜再実測，図面を一部改変した蔵骨器＞

①島巣1号　大山市羽口島巣

胴部外面の調整高台付の須恵器短頸壺で，高台は剥離している。胴部外面は左上がりのタタキの後にカキ目を施し，底部は下部に膨らんでいる。

②荒瀬(船津田)　菱刈町本城

寺師見国，三島格両により1960年に紹介されている。肩部に内雷を持つ長頸壺は熊本県の阿高や古閑遺跡に蔵骨器として類例があるが，県内では唯一である。なお，1990年の『仏教文化の伝来』では須恵器坏の転用蓋とセットとされるが本来は別個体である。1960年の報告時には寵単体で指摘されていたが，1978年の上野精志による集成時に報告番号283の荒瀬蔵骨器と宮崎県高鍋出土蔵骨器の2者を同一番号として誤って報告したことから，本蔵骨器と伝宮崎県高鍋出土の須恵器坏がセットとして紹介されたようである。

蔵骨器は頸部中位で打ち欠き，高台は剥離している。内部には焼骨，カラカガイと銅製品2点を確認している。現在黎明館に寄託されている。

③川西　大口市曽木

尚状に近い胴部から短く口縁部が立立する。胴部外面は格子タタキ，胴部下半は縦位のハケがみられる。底部内面の中心部分に当具痕がみられ，周囲はナデ調整を施す。現在黎明館に寄託されている。

④荻原　大口市曽木

口縁部を打ち欠いた須恵器甕である。胴部外面上位は回転ナデ，下位に平行タタキを施す。内面は胴部上位に回転ナデ，下位に当具痕，上位と下位で調整方法は明瞭に異なる。

⑤原用　大口市原用

須恵器の短頸壺で，全体的にいびつな形態を呈する。胴部外面には左上がりのタタキ，内面には当具痕，底部外面にも当具痕を認め，口縁部は短く外方に開き端部に面を持つ。現在黎明館に寄託されている。

⑥小川添1号　菱刈町南浦

従来の図面に胴部外面の調整を追加した。胴部全体に左上がりのタタキ，内面にはナデや指押さえがみられ，高台はゆがみを生じ，底部は下部に膨む。

⑦水ヶ迫　志布志町水ヶ迫

昭和8年(1933)，道路工事中に横穴から発見された。

蔵骨器は須恵器長頸壺で，頸部中位で打ち欠いている。頸部には一条の沈線がみられ，胴部と蓋部の付根付近と胴部外面下位でケズリを認める。

3，分析の視点及び蔵骨器の分類と時期的な位置付け

第1に県内の蔵骨器の分類・編年を通じて本資料の時期的な位置付けを試み，形態や地域的な特徴を検討する。第2に本資料に伴い土師器坏2点，また資料の下位から須恵器小片が数点出土しているが，こうした副葬品を県内の事例の中で評価する。第3に本遺跡や，その周辺遺跡からの位置付けを検討したい。

上記した県内蔵骨器で，形状を伺い知れるのは48点である。今回それを1～6類に分類した。なお，類例の認められない5点についてはその他として一括しているが，これらは後に個別に取り扱うことにする。まず各型式の分類基準を指摘0する。

①分類

1類　須恵器の高台付有蓋短頸壺で，「壺蓋」と呼称される。蔵骨器の専用格として使用され，全国的に同型が認められる。これらを，1A類と1B類に細分する。1A類は器高を最大径で除した指数が0.8以下のもので，1B類は器高を最大径で除した指数が0.8以上のものである。小山富士夫は，器高より胴部最大径の大きいものを奈良時代前半～後半に，器高と胴部最大幅のほぼ同じものは奈良時代後半，器高より胴部最大径の小さいものを奈良時代末～平安時代に位置付けている(小田　1977)。今回は，小田氏の指摘に実際

のデータを考慮し0.8を分類基準とした。また，この属性は器高と胴部外面の調整方法とも関わることが認められる。器高は20cmを基準とし，以下のものを１Ａ類，以上のものを１Ｂ類とする。調整技法は１Ａ類が外面に回転ナデが顕著なもの，１Ｂ類はタタキやカキ目調整が顕著なものとする。

２類　１類と同じ短頸壺ではあるが，底部の高台が消滅し平底である点が大きく異なる。また，一部を除いて専用の蓋は認められず，また，１類が須恵質のみであるのに対し２類は須恵質と土師質の両者が存在することである。蔵骨器の専用棺ということでは１類と共通する。なお，胴部最大径と底部径の幅差が小さく筒状に近いもの，胴部最大径が低くナデ肩を呈するものは２Ｂ類に細分した。ただし，これらは積極的に分類基準を提示できるものではなく，２Ａ類に統括し難い一群である。即ち２Ｂ類の細分・位置付けは資料の増加次第となる。

３類　二重口縁壺である。この種の壺は集落遺跡等で一般的に発見されることから，日常品の転用を指摘できる。蔵骨器に使用される容器の中では最も多く，大多数が須恵質であるが，色調の赤く発色する例も若干存在する。なお，これらの中で頸部径が大きく，二重口縁の屈曲の鈍いものを特に３Ｂ類として細分する。

４類　外方に開く短い口縁部の須恵器甕である。胴部外面にタタキ，内面は底部まで同心円の当具痕がみられる。口縁部の打ち欠きから転用棺と考えられるが，集落遺跡ではほとんど認められない。尖底状の底部で胴部の張る甕を４Ａ類，丸味のある胴部で底部も丸底となる甕を４Ｂ類に細分する。

５類　土師器甕である。一般的な遺跡でみられ，転用棺が想定される。口縁部が長く，器壁が薄く，外面にハケ調整がみられるタイプを５Ａ類，口縁部が短く，器壁が厚く，胴部外面にナデ調整主体のタイプを５Ｂ類に細分する。両者は時期差が想定される(松田　2004)。

６類　全て須恵器で，胴部下端から中位で直立もしくは若干外開きになり，胴部中位付近から口縁部で大きくすぼまる。口縁部は全て打ち欠くために形態は不明で，法量は底部から頸部まで11～17cmの小型品が多い。

その他…上記の分類に当てはまらない一群で，５個体確認できる。これらについては後に個別に検討する。

②編年

次に，各形式毎の時期的な位置付けを試みる。蔵骨器の形態と共に①蔵骨器に使用されている蓋，②共伴して埋納される土師器食膳具，③集落遺跡等その他の遺跡における類例の出土状況を参考に検討を進める。なお，食膳具・煮炊具は高篠遺跡で試みた編年を使用する(松田　2004)。また，検討に際して考慮すべき点として，蔵骨器共伴資料はあくまで埋納期の同時性を示すものであって製作時期の同時性とは必ずしも附合しないことである。また，蔵骨器と蓋がセットで伝えられている場合，発掘後の経過によってセット関係の変化している可能性も考慮する必要がある。これらの点は検討に際して明確にしたい。

１類

１Ａ類には川内市越ノ巣，金峰町新山上橋ノ丘，大隅町鳥居段１号，高山町後田があり，現存するのは越ノ巣と鳥居段１号である。

越ノ巣蔵骨器の内外面は，丁寧な回転ナデがみられる。蓋は摘みを有し，火襷がみられる。法量，形態からは身部とセットで製作したと考えられる。また蔵骨器は外容器を伴い，外容器を覆うことに関して黒崎直氏は，８世紀の特徴と指摘している(黒崎　1980)。

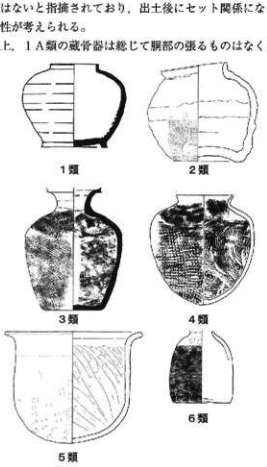
鳥居段１号は外面に一部タタキを残すが，総じて丁寧な回転ナデで，胴部下半にはケズリが確認される。蓋には経石製品が使用されている。

新山上橋ノ丘は蔵骨器の表面にハケ，タタキがないと指摘されている(藤森　1931)。また，蓋は図面からの判断であるが６世紀末～７世紀の形態を呈している。報告文にも専用の蓋ではないと指摘されており，出土後にセット関係になった可能性が考えられる。

以上，１Ａ類の蔵骨器は総じて胴部の張るものはなく８世

第１表　１類法量表

名称	所在地	調整方法（外面）	器高	口径	底径	最大径	器高／最大径
新山上橋ノ丘	金峰町阿多	回転ナデ	14.6	10.0	11.4	16.2	0.90
越ノ巣	川内市御釜下町	回転ナデ	16.6	9.6	13.0	20.2	0.82
後田	高山町後田	回転ナデ	15.9	9.4	11.2	18.5	0.86
鳥居段１号	大隅町鳥居段	回転ナデ・タタキ	(16.0)	8.2	10.8	19.3	(0.83)
栄野	菱刈町田中	回転ナデ	(19.5)	8.4	11.2	23.7	(0.82)
真牟	隼人町	回転ナデ	21.0	10.0	11.5	21.2	0.99
新城遺跡	隼人町	カキ目・タタキ	20.4	12.4	12.0	23.5	0.87
弓掛	加治木町弓掛	カキ目・タタキ	25.4	10.8	12.6	26.8	0.95
鳥巣１号	大口市第口鳥巣	カキ目・タタキ	(24.2)	10.5	12.8	24.6	(0.98)
小川原１号	菱刈町南浦	タタキ	26.0	12.1	13.2	24.6	1.05



第４図　蔵骨器の分類(S=1/8)

紀後半の年代が指摘できる。

１Ｂ類は大口市鳥巣１号，菱刈町小川添１号，加治木町弓削，隼人町真孝，同町新城遺跡がある。共伴遺物の認められるのは新城遺跡のみで，黒色土器皿を伴い，蓋として使用された可能性が高い。蔵骨器は外面の胴部最大径付近にタタキ，タタキ調整の後に胴部下から口縁部にカキ目状の回転ナデを施している。胴部下半には部分的にケズリが，内面は最大径から上位で丁寧な回転ナデ，下位で縦位の指ナデが顕著で，上下で成形方法が異なる。

弓削の蔵骨器は形態，法量で若干異なるが調整方法は新城遺跡と共通し，上位と下位で成形方法が異なる。両者共に胴部最大幅部が張る。

真孝は胴部の張りが弱く，縦長気味の形態である。胴部外面は最大幅より上位で丁寧な回転ナデ，下位では不整のナデとケズリが認められ，上位と下位で成形方法が異なる。

鳥巣１号と小川添１号は法量と，右上がりのタタキが胴部外面全体に看取される点で共通している。上３者で認めた胴部上位と下位の成形方法の違いは認められない。

以上，１Ｂ類は時期を明らかにする共伴遺物が少ないが，新城遺跡の黒色土器から９世紀前半が想定される。また，成形方法として胴部上位と下位で異なる成形方法を用いるものが多く確認できた。

２類

２Ａ類は金峰町白樫野，大口市斧トキ２号，同原田，菱刈町小川添２号，財部町財部城ヶ尾遺跡である。また，菱刈町大迫では土師器甕の蔵骨器に伴い，２類の土師器壺が４点出土している。２類には比較的共伴遺物が多くみられる。

白樫野は土師器坏４点が共伴し，４点の体部外面に「山」が墨書されている。時期は２期に位置付けられる。蔵骨器は土師質を呈し，外面の調整方法に回転横ハケを用い，土師器甕の製作方法が指摘でき，土師器製作集団により製作されたものであろう。

大迫は共伴する５点の土師器坏から，２期が想定される。

本遺跡は蓋に土師器椀，共伴遺物として土師器坏２点がある。土師器坏は底部が若干厚めで２期の後半に位置付けられ，蓋は２期が想定される。

小川添２号は土師器壺を中央に置き，２点の大型椀で上下から覆う，特異な組合せである。大型の土師器椀は高台が体部高に比べて相対的に長く，時期的には３期が想定される。

以上，２Ａ類は９世紀前半～10世紀に位置付けられる。

２Ｂ類は大口市山城原，同川西，知覚町猿山岡の３点で，山城原は石塔群の整備作業中に五輪塔の掘りこみの中から発見された(河野　1984)。２Ａ類に比べて胴部最大径が大きく，川西は胴部最大径から口縁部にかけての屈曲が弱く，２Ａ類に比べてやや筒状を呈する。猿山岡は張りの無い胴部最大径を下半に持ち，上半は口縁部に向かって大きくすぼまる。同様の形態は後述する６類に類似する。

以上，２Ｂ類は共伴遺物が無く，時期的な位置付け明確に提示できないが，上記の特質から10世紀以降を想定できる。

３類

10遺跡以上で確認され，県内で最も多く，集落遺跡等で多く出土することから，日常容器の転用惰と考えられる。大多数が口縁部を打ち欠き，非実用的な容器とする意図が看取される。また，口縁部の打ち欠きの違いは大根占町笑喜の例でも底部が打ち欠かれ，全てに打ち欠き行為が指摘できる。

吉田町牧では蔵骨器に伴って13個体の土師器坏が出土し，１個が蓋で，残りが２対セットで合わせ口の状態で埋納されていた。坏は，体部下端にナデされない一部を残すものと下端から回転ナデを施すものがある。２期～３期を想定する。

蔵骨器の形態からは輦北町後迫が古相を示し，胴部最大径付近に右上がりのタタキが施され，口縁部に向かい丁寧な回転ナデ，下位は不整方向のナデがみられる。このような上位と下位での明確な成形方法の違いは３類の中で他になく，１Ｂ類の特徴であることから，９世紀前半を想定したい。なお，頸部は３類の他に比べて細くすぼまっており，また，タタキの方向も他例が左上がりであるのに対して，右上がりで特異である。

加世田市杉本寺，隼人町弓削ヶ岡１号の両者は３類の他に比べ口縁部の幅が広く，胴部最大径が高位にあり，胴部最大径付近には二対の耳があり，二重口縁部の屈曲は鈍い。この２例より頸部幅が広く，二重口縁部の屈曲の鈍くなった資料が熊本県下り山１号窯跡出土須恵器である。下り山１号窯は11～12世紀に位置付けられており，当例は県内の多くの二重口縁壺と下り山１号窯の中間に位置付けることができよう。よって，時期的には10世紀代が想定される。

その他の例は，左上がりのタタキを胴部全体に認められ，タタキが頸部まで及ぶものと胴部最大幅部から上位をナデ消しているものが存在する。さらに，胴部最大径部分で明瞭に屈曲し稜線状を呈するものと，緩やかな曲線で頸部に至るものがある。一方，福山町秘所１号のように胴部最大幅部に凸帯を回すものがある。これらは形態変化を組列することは可能であるが，各属性に明確な連動性がみられず，個体総数からは非常に複雑な分類となるために今回は細分を行っていないが，９世紀の中での位置づけが可能である。

以上，３類は大多数が９世紀段階に使用され，10世紀以降に激減することが指摘できる。

４類

４Ａ類は須恵器の甕で知覚町小坂ノ上，大口市荻原，加治木町岩原がある。

肩部に最大幅を持ち，底部は尖底

第５図　３類型式組列(S=1/8)

気味の丸底を呈する。口縁部は後2者が打ち欠きのために明らかではないが，小板ノ上からは直線的で短い口縁部が指摘できる。調整方法は全て胴部外面にはタタキ，内面は胴部最大径から下位で同心円の当具痕を認める。一方，内面の胴部最大径から上位では回転ナデを施す。小板ノ上，萩原では外面の胴部から上位で丁寧な回転ナデ，岩原では外面下位と同様に外面上位もタタキを施す。ただ，胴部上位のタタキは下位とは明瞭にタタキの方位や法回が異なり，3例に上位と下位で明確に成形方法の違いが認められる。共伴遺物が無く，時期的な位置付けは困難であるが，同様の事例は1B類でもみられることから，9世紀前半を想定したい。なお，内面で同心円の当具を底部まで用いることは，県内の大多数の須恵器甕では内面上位に同心円の当具，下位に平行タタキであることとは大きな違いである。こうした他の日常容器と製作方法が異なる要因として，まず小型であることが指摘でき，次に専用棺として製作したことが考えられるが，口縁部を打ち欠くことからは専用棺として限定することは矛盾が生じる。なお，内面に同心円当具のみを残す数少ない類例として鹿摩国分寺の北熊地地区出土須恵器がある。

4B類は鹿児島市谷山弓場城跡の1例である。発掘調査で出土し，蔵骨器甕の高台付皿の他，土師器坏2点，刀子が共伴する。土師器坏は3期に位置付けられる。蔵骨器の形態は4A類でみられたような肩部の張りはなく，底部も丸底を呈している。

以上，4類は9世紀～10世紀前半に位置づけられる。

5類

5類は土師器甕で蔵骨器以外でも骨灰的に出土することから転用棺として評価できる。

5A類は川内市屋形原，菱刈町大迫，同丸岡である。

大迫は胴部外面上位に回転の横ハケを認める。共伴遺物には蓋に使用された可能性のある土師器坏，土師器小型壺4点，土師器坏4点，人形土製品がある。土師器小型壺は2B類で，土師器坏の時期は2期に該当する。なお，土師器坏には「盈」の墨書が体部外面に正位で書かれていた。

丸岡も大迫と同様に胴部外面上位に回転の横ハケを施す。一方，屋形原は胴部外面上位に縦ハケが施され，前2者とは異なる。こうした調整方法の違いは，そのまま日常容器である土師器甕の地域性と共通している。

5B類は鹿児島市甕摩校，加治木町曲田がある。

甕摩校は，土師器椀と土師器坏を共伴する。土師器椀は足高の高台を持ち，土師器坏は充実高台である。時期的には3期～4期を想定する。蔵骨器は器壁が厚く，口縁部が短い。曲田は蔵骨器のみで，胴部外面上位に回転のナデを施し，下位には指押さえが顕著である。

以上のことから5類は，9世紀～10世紀中頃に転用棺として使用されたことが指摘できる。

6類

牟人町弓削ヶ丘2号，鳥居段2号でみられる。蔵骨器に伴う遺物は確認できず，共伴関係からの時期決定は不可能である。蔵骨器以外の一般遺跡からは，川内市鍛冶屋馬場遺跡に類例が3点存在し，5類に位置付けられることから，6類は10世紀中頃～後半を想定する。また，集落遺跡からの出土であることや口縁部を打ち欠いていることからは当型式が転用棺であるといえる。

(その他)

資料が少数のため類型化しなかったものについて，個別に時期的な位置づけをおこないたい。

水ヶ迫は昭和8年検穴から発見され，人骨や棺蓋の記載はないが蔵骨器と判断している。器種は須恵器の長頸壺で，口縁部を打ち欠いている。長頸壺を用いた蔵骨器としては福岡県宮ノ本8号墓があり，8世紀代が想定される。

府都町十文字黒田では，土師器壺と土師器蓋がセットで認められ，蓋は1期に位置付けられる。壺は口縁部が直線的で短く，蔵骨器の専用棺である短頸壺と類似するが，底部が丸底で土師器甕の特徴を持つ。調整は胴部外面の上位に横ハケ，下位に不整方向のハケ，内面にケズリがあり，これらは土師器甕の製作方法であり，土師器製作集団が蔵骨器の専用棺として製作したものと考えられる。なお，同様の器形が遺跡や他の蔵骨器に無いことことから，オーダーメイド製作が想定される。時期的には8世紀後半～9世紀前半が指摘できる。

菱刈町荒瀬(船津用)は屑部に凸帯をもつ長頸壺で，日常容器の口縁部を打ち欠いている。熊本県阿高，同古閑遺跡等に類例が認められ，9世紀前半が想定される。

菱刈町岡野は底部に焼成前に穿孔し，胴部外面上位は回転横ハケ，内面はケズリを施す土師器甕の製作技法と類似する。回転横ハケを顕著に残す土師器甕との類似性から，9世紀を想定する。

大口市斧トキ1号は軽石製の容器に直接人骨を納めていた。外容器ではなく，骨灰として合1の容器を使用するのは時期的に後出することが指摘されており，判断材料は乏しいが，9世紀以降を想定できる。

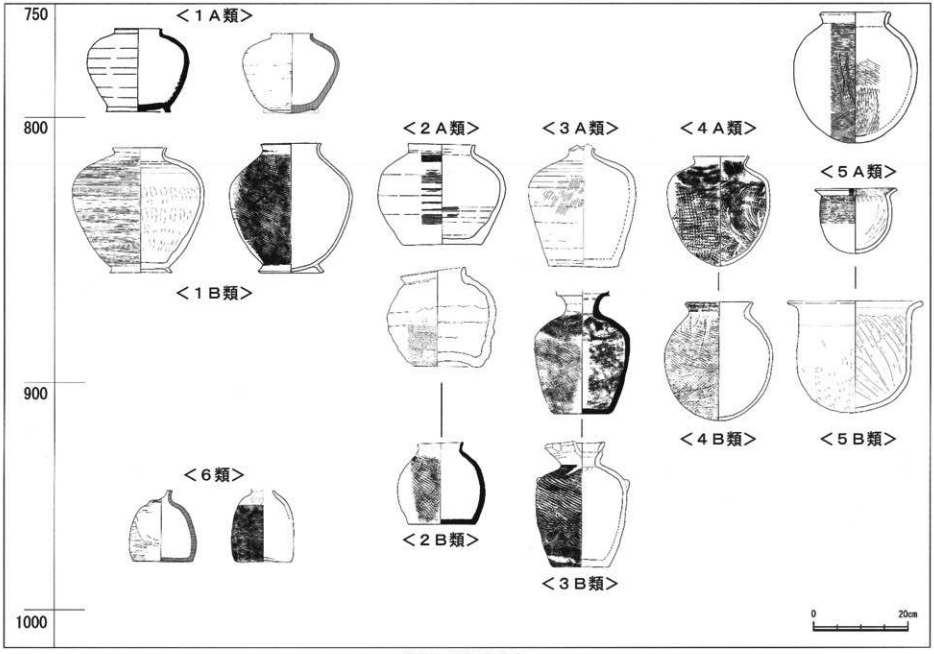
末吉町篠ヶ迫は石部が紹介し，宮原某氏が発見した須恵器甕で，尖底に近い丸底である。表面は格子状のタタキを施した，全体にややいびつな形態である。

以上，各型式ごとの時期的な位置付けを試みた。上記の検討をもとに作成した編年図が第6図である。

4．本遺跡蔵骨器の歴史的位置付け

本遺跡蔵骨器は上述したように時期的には9世紀中頃から後半に位置付けられ，2A類の専用棺である。こうした特徴は県内の蔵骨器の中で時期的，地域的にどのように評価できるであろうか。以下では，蔵骨器使用土器の変遷を特に専用棺と転用棺という視点と分布地域を中心にしながら検討していく。

県内の蔵骨器は8世紀中頃～後半より確認できる。型式は専用棺が主体(1A類)であるが，既に水ヶ迫横穴では転用棺がみられる。地域的には金峰町，川内市，大隅町，高山町と数は少ないが広域に存在する。即断は避けるが，万之瀬川，川内川，肝属川，島津駅～大隅国府等それぞれの交通ルート


750
800
900
1000
＜1Ａ類＞
＜1Ｂ類＞
＜2Ａ類＞
＜2Ｂ類＞
＜3Ａ類＞
＜3Ｂ類＞
＜4Ａ類＞
＜4Ｂ類＞
＜5Ａ類＞
＜5Ｂ類＞
＜6類＞
0
20cm

第6図　蔵骨器編年図

と関わる可能性がある。

続く9世紀は，蔵骨器の増加と共に転用棺を主体として展開し，出土地域は大きく広がる。専用棺は前半段階では1類が多いが，全体的には2類が主体となる。2類は高台を消滅させている点が1類との最も大きな変化であるが，口縁部が短く，平底を呈する点では1類以来の伝統を踏襲している。高台の消滅は転用棺に使用されている須恵器二重口縁蓋(3類)や土師器，須恵器の食膳具など日常容器でも普及し，高台は黒色土器の椀・皿類の一部に限定している。つまり，2類では器種全体から高台を省略・消滅させていったことが指摘できる。同様な指摘は蓋でも可能で，8世紀段階の蔵骨器の蓋は蔵骨器の専用の蓋であった。県内では上橋ノ丘で転用蓋の事例が知られるが，主流は専用蓋と言える。ところが，続く9世紀以降は軽石製蓋を除いて専用の蓋は消滅する。この専用蓋が消滅する原因として，食膳具を皮切りに器種全体に及んだと想定される。即ち，蔵骨器の変化は土器様相の変化と密接に関わり，その中で柔軟に変化したのであろう。

一方，転用棺は3類を中心に展開し，転用棺の9割近くで口縁部が打欠かれる。この行為は，器としての機能を消滅させる精神的な意図と蓋との接着度を高める機能的な意図が推測される。当然，両意図を兼ねたことも想定されるが，加世田市杉本寺のように口縁部の一部を打ち欠く事例からは，機能性より精神的な意図が強く想起される。なお，このことは4類の事例からも補強できる。

以上9世紀段階は，専用棺は2類，転用棺は3類を中心として展開しているが，次に両者の分布地域を確認する。

2類は大口市4基，菱刈町2基，財部町1基，金峰町1基，知覧町1基を確認できる。これを古代郡郷で表すと菱刈郡を中心に諸県郡，阿多郡，薩摩郡となる。前段階とした1類は川内市と高山町があり，分布範囲は若干広がるが中心地域は2類と重なり，国府周辺を附加した地域となる。このことは，専用棺は菱刈郡を中心に，諸県郡，桑原郡，阿多郡に分布したと解釈可能でもある。

3類は川内市，知覧町，吹上町，金峰町，吉田町，福山町，末吉町，輝北町，根占町，大根占町に各1基ずつ広域に分布し地域的な偏差は認められない。一方，専用棺の分布の多かった菱刈郡内は希薄となり，転用棺と専用棺の分布域に違いが生じている。

この分布の違いの背景として，国分市，隼人町の国府周辺では大隅国府との関わりが想定でき，被葬者は，中央との関わりの深い郡司及びその一族となる。特に，隼人町には平安時代初期から中世に至る各時期の蔵骨器があり，背景に大隅正八幡宮が浮かび上がる。

菱刈・諸県郡は従来交通路の要所「大木駅」の候補地とされてきた。また，両地域は土師器鍋の外面上位に回転横ハケを施す特徴を共有し，縦ハケを主とする他とは対峙する特異な地域でもある。この横ハケ主体の土師器鍋は宮崎県に広く分布することから，日向との関わりの強い地域として評価でき，両地域は他国と隣接する交通の要所としての性格が浮かび上がる。

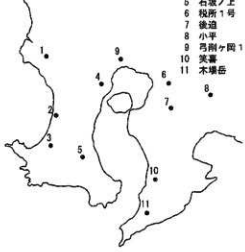
本遺跡と近い位置に高篠遺跡があり，"牧や古代官道"の公的な施設の遺跡と判断したが，こうした施設やそれらに関わる交通の要所に配備された官人層の墓として，蔵骨器に納められた被葬者像が浮かび上がる。

高島英之は牧の土地開発に関わる地域では，様々な生産活動，流通の起業を指摘している。須恵器生産もその生産活動の一つで，菱刈郡内では岡野窯跡が知られている。諸県郡では出土須恵器の製作技法から，近隣地に須恵器窯の存在を予測した。両地域に須恵器窯が存在したら，専用棺のオーダーメイド発注は容易であったはずである。つまり，本遺跡蔵骨器の被葬者は専用棺の発注が可能であり，須恵器生産工人集団との関係を維持できる要件を備えた人物と思われる。

5，本遺跡蔵骨器の形態について

今回実見した蔵骨器の多くは丁寧な作りであり，本例と大口市原山の蔵骨器は例外的であることが判明した。本遺

第7図　2類の分布



第8図　3類の分布

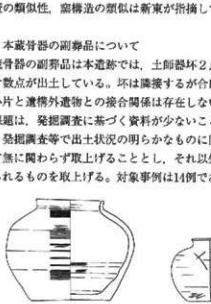
跡出土蔵骨器は器壁が厚く，内外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し，総じていびつな仕上がりで，一見して蔵骨器に使用するために故意に非実用品として製作された印象を受ける。原田は胴部の器壁が安定せず器面の凹凸が目立ち，底部も凹凸が顕著な粗雑な作りで，また，土器の色調が赤色に発色していると点も共通する。口縁部の形態や調整方法は大きく異なるが，両者共に専用棺として製作された可能性は高い。２類に属し，ほぼ同時期が推測される。

同様な意図で製作した類例として，カムイヤキ（類須恵器）に注目したい。白木原の抽出したカムイヤキの特徴のうち，本遺跡との共通点として①やや粗い胎土を用いる②叩き締めの後に轆轤で形を整える③赤焼きである④内壁は日常容器の配慮が成されない。また，形態は２類に非常に近く（筆者の指摘），⑤底部はやや上底気味である。特に，⑥現在の集落から離れた少し高い所で発見されることが多く，③葬送に関わるものも多い等の指摘ができる。このように，本蔵骨器とカムイヤキは類似点が多い一方，①カムイヤキの特徴である胴部外面の波状文は施されず②カムイヤキ口縁部は外反気味で長く③口縁部外面を強くナデて面を形成する等の相違もある。ただ２類は上野の集成に因ると南九州に多く分布し，本県では12例と他地域に比べて多い。このことから，カムイヤキの成立以前に南九州に形態的な祖形が存在したことは注目できる。本遺跡と原田の蔵骨器が９世紀～10世紀であるのに対し，カムイヤキは11世紀～12世紀以降と明らかな段差はあるが，両者の型式学的な検討を行なう価値はある。ちなみに，両者と関わる資料として熊本県下り山１号窯出土須恵器がある。蔵骨器では２類と３類があり，カムイヤキとでは壺の類似性，窯構造の類似は新東が指摘している。

６，本蔵骨器の副葬品について

蔵骨器の副葬品は本遺跡では，土師器坏２点と須恵器甕の小片数点が出土している。坏は陶接するが合口でなく，須恵器小片と遺構外遺物との接合関係は存在しない。

蓋題は，発掘調査に基づく資料が少ないことである。そこで，発掘調査等で出土状況の明らかなものに関しては副葬品の有無に関わらず取上げることとし，それ以外は副葬品の認められるものを取上げる。対象事例は14例である。



第９図　２類とカムイヤキ（類須恵器）(S=1/8)

副葬品の時期毎推移については，８世紀とする越ノ巣では副葬品を伴わず，副葬品を伴う他は９世紀に属すことから，時期毎の推移については検証できないため，地域毎の概観を試みる。

菱刈郡内では人形土製品と馬形土製品が，知覧町小坂ノ上，金峰町白樫野では鉄滓と鞴の羽口等の鉄冶関連遺物が知られる。前者の土製品に関して新東は中九州～南九州の一地域に限られる特質とし，火葬墓の副葬品と荒神祭祀の両者の目的を想定した。後者に関して上田はガラス化した鉄滓が不朽であることから常世の願望意図を，宮下貴浩氏は鍛冶技術に関わる人物を想定している。一方，川内市の越ノ巣，屋形原，都原の３例全てで副葬品を持たず，この地域固有の特質であるか注目したい。

土師器坏の副葬は鹿児島市谷山弓場城跡，鹿児島市驛学校，吉田町牧，金峰町白樫野，菱刈町大迫，財部城ヶ尾遺跡の６ヶ所で確認され，広域の分布が指摘できる。土師器坏で注目すべきは①多くに墨書土器が使用され，②合口或いは対の状態で出土している例が多いことである。①に関しては６遺跡中４遺跡で確認でき，谷山弓場城跡では蔵骨器蓋を含めた３点全てに「大吉」，牧遺跡では蓋を含めた13点中１点に「秋」，７点に「大」，白樫野では４点全てに「山」，大迫では蓋を含めた５点中３点に「盈」が墨書されている。新東は大迫の「盈」字墨書土器に関して「皿に物を多く容れみつる義」と解し，３体の文字の書体がそれぞれ異なることから別人によって書記されたと指摘した。白樫野の「山」字墨書土器を検討した宮下は集団の標識的文字としての意味合いが強く，葬送儀礼のなかで埋葬の目的で準備され使用されたと解釈した。本遺跡の土師器坏２点と蔵骨器蓋である土師器椀１点では墨書は確認できなかったが，かつて墨書のあった可能性は十分にある。②に関して，白樫野では墓壙の４隅に土師器坏を配置させており，宮下は結界的な意図を指摘している。驛学校と本遺跡では土師器食膳具が対になっており合口の可能性もある。大迫では土師器坏が７個と土師器蓋が４個あり，坏を蓋に１点，壺との合口に４点，坏の合口の対で２点とすると全てが対の配置であった可能性も想定できる。谷山弓場城跡と牧では合口が確認されている。

このように県内出土の蔵骨器に伴う土師器食膳具は６遺跡全てで土師器坏が対になっており，その内２遺跡では合口の出土状況が確認され，多くで合口として使用した可能性を指摘できる。

ところで，鹿児島市横井竹ノ山遺跡では土師器椀２個が合口で埋納されていた。土師器椀のみという点が蔵骨器とは異なるが，合口であること，胴部外面に墨書がみられることは蔵骨器に伴う土師器食膳具と共通している。永山修一氏は，この土師器坏の一方に五芒星の墨書があることから除陽道との関わりがあるとし，埋納の目的として除災招福あるいは道，界に関わる可能性を指定している(永山　2004)。

以上，土師器坏が県内の広い地域で副葬されていることが明らかとなり，その埋納方法は墨書した土師器食膳具を合口とすることが多いことも指摘できた。

今回の集成作業で小片の須恵器甕の類例は，確認できなかった。したがって，特異な事例かどうかは今後の調査に期待するが，知覧町小坂ノ上で蔵骨器内から櫛，小石が8個出土していることが報じられている。

7．本遺跡蔵骨器とその周辺地域

本遺跡での検討と近隣地域の遺跡を対象として検討を行なう。周辺遺跡から本遺跡蔵骨器の位置付けを試みる。

本遺跡では古代の造構として掘立柱建物跡が検出され，近世ごろの開発によって，既に削平された部分があるものの，おおよその集落域が指摘できる。ここでは，集落と墓との関わりが問題となろう。集落域出土の土師器食膳具は平底中心で，体部外面の回転ナデは丁寧で器壁も薄い。また，土師器甕の多くは，ナデもしくは疎らな縦ハケを施す器壁の厚いものが主体である。これらの特徴は，高篠編年2期の新しい段階に帰属することとなり，集落域は9世紀中頃～後半と想定できる。

したがって，本遺跡の蔵骨器と集落はほぼ同時期に展開したと考えられる。

火葬墓が仏教文化に起因したであろうことは，多くが指摘してきた。積極的な根拠は示せないが遺跡からは，「仏」とヘラで刻書された須恵器が出土している。次ぎ，底部外面の「桑原」墨書土器の存在である。この墨書土器の内面は底部周囲部に明瞭に炭化物が付着し，灯明行為が確認される。このような例は，小倉畑遺跡で既に指摘されており，灯明に用いた食膳具が数個体と，仏器様の土師器甕は香炉と報告される。このように，本遺跡の「仏」刻書及び「桑原」墨書土器が仏教と関り，ひいては蔵骨器へ繋がる推測も可能であろう。

本遺跡と山頂を境に対峙する踊場遺跡からは，掘立柱建物の柱配置や出土遺物から仏教的施設と判断したテラス状遺構が発見されている。時期的には踊場遺跡テラス状遺構の方が若干後出すると思われるが，仏教文化を仲立ちにした密接な関わりを推測する余地は残されていよう。

＜付記＞

1　従来，県内の古代蔵骨器として指摘されてきた隼人町佳例川は，その形態が石塔形であることから，時期的に11世紀以降である可能性が高く，今回の集成では取上げなかった。

2　横川町木浦権現はこれまで蔵骨器としての記述は認められなかったが，軽石製の栓を伴い蔵骨器の可能性を有することから今回の集成において取上げた。

3　資料不足等により集成に取上げなかったものとして以下がある。

①給良郡吉松町永川(永川か?)　須恵器出土(渋谷忠章・上野精志1984「九州」『新版仏教考古学講座　第7巻　墳墓』にて記載)

②大隅町中の内北部落おろのうしろ　須恵器瓶子形(上野精志1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸ』にて記載)

③喜入町(河口貞徳氏教示　『末吉町郷土誌』1957に記載)
『喜入町郷土史』（1968年）に一貫鬼ヶ久保遺跡から完形『青瓷』が出土しているの記述がある。おそらく，これを指していると思われるが，資料は行方不明であるという。

④輕北町郷土史(1966)に写真掲載されている谷田脇田跡，関田千代志岡氏の所蔵とされる須恵器甕，瓶が形態から蔵骨器の可能性が高い。

⑤加世田市加治屋遺跡，菱刈町山下遺跡…池畑耕一，中村耕治1984「大隅半島より出土の蔵骨器３例」『鹿児島考古第18号』で蔵骨器として紹介されている。

⑥栗野町川崎Ｂ遺跡では土坑内から土師器甕が２点出土している。また，同じ土坑内からは土師器の皿，坏，土製の人形，棒状品が出土しており，火葬墓である可能性が高い。（鹿児島県教育委員会1982『山崎Ｂ遺跡』）

(引用・参考文献)

網田龍生1997「肥後における古代後半期の墳墓」『先史学・考古学論究』Ⅱ　龍田考古会

池畑耕一，中村耕治1984「大隅半島より出土の蔵骨器３例」『鹿児島考古』第18号　鹿児島県考古学会

池畑耕一1980「加治屋遺跡」『日本考古学年報』31（1978年度版）日本考古学協会

石部正志1956「大隅半島の骨蔵器」『古代学研究』第15・16号　古代学協会

伊仙町教育委員会1985「カムイヤキ古窯跡群Ⅰ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

岩澤和徳，松田朝由 2004「高篠遺跡の特質と歴史的な位置付け」『高篠遺跡』

上田耕2001「石坂上発見の須恵器壷」『ミュージアム知覧紀要』第7号　ミュージアム知覧

上野精志1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸ』

小田富士雄1977「豊前地方における須恵器」『天観寺山窯跡群』

鹿児島県教育委員会1973「鹿児島県遺跡地図」

鹿児島県教育委員会1977　「鹿児島県市町村別遺跡地名表」

鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査報告書概報」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（25）』鹿児島県教育委員会

鹿児島県教育委員会1984『大隅地区埋蔵文化財分布調査報告書概報－昭和58年度－』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（29）

鹿児島県埋蔵文化財センター2002「小倉畑遺跡」鹿児島県埋蔵文化財センター報告書（34）

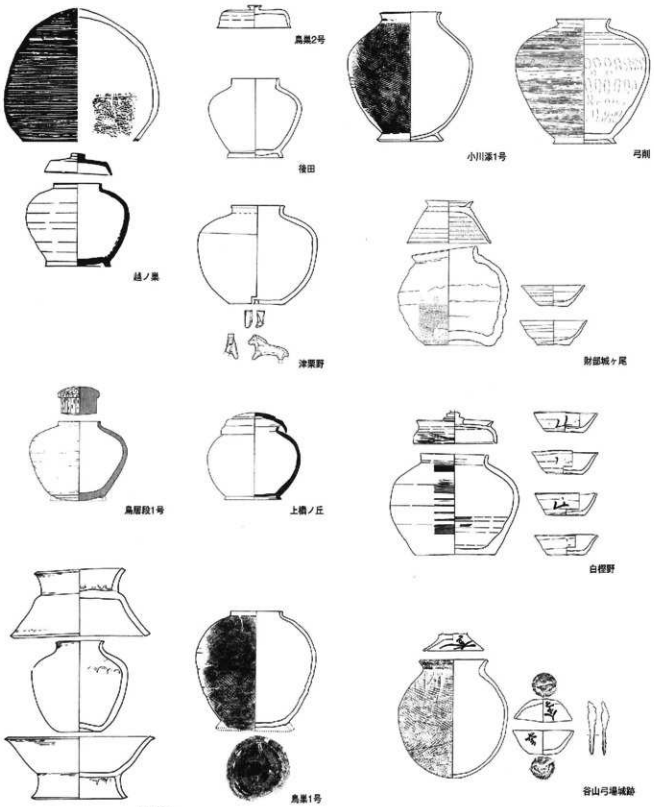
鹿児島県立埋蔵文化財センター2003「垣之だより」

鹿児島市教育委員会1992「谷山弓場城跡」鹿児島市教育委員会発掘調査報告書（11）

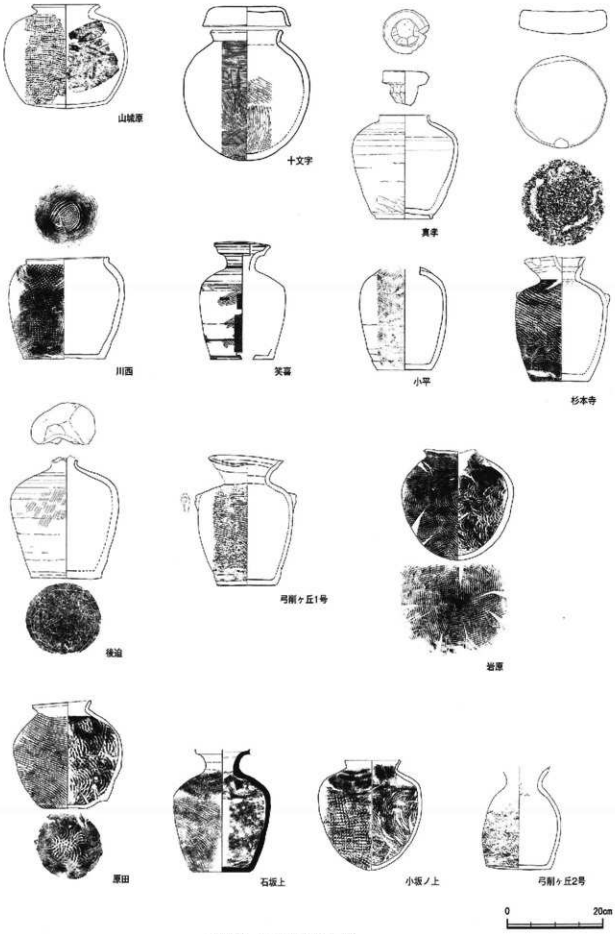
上村俊雄1970「飯盛山古墳とその周辺」『九州考古学』39・40　九州考古学会

上村俊雄・坪根伸也1985「鹿児島県中岳山麓須恵器古窯群に関する一考察」『古文化談叢』第16号　古文化研究会

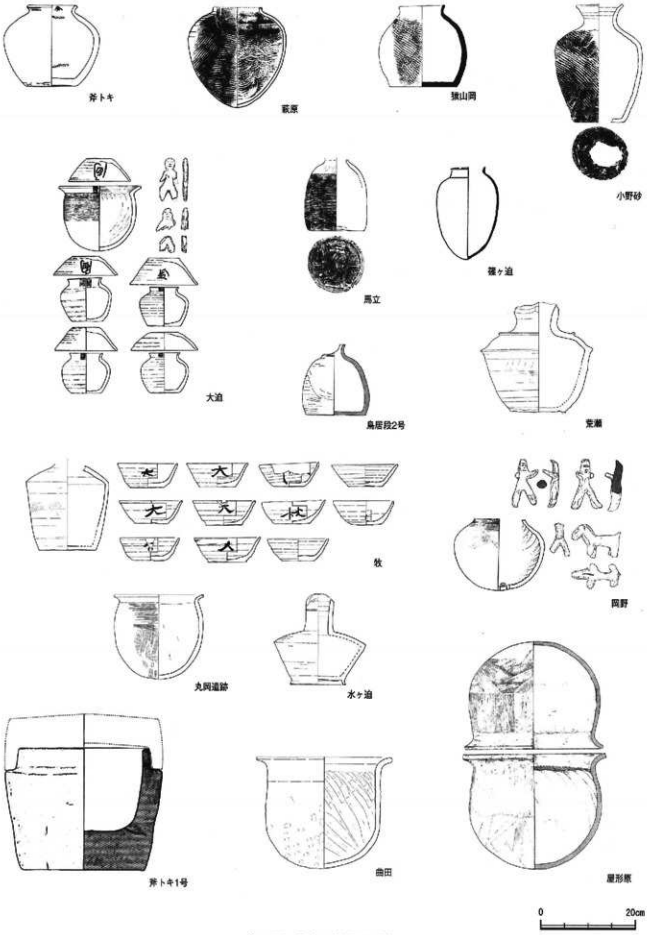
河口貞徳1991「大昔の吉田　吉田町の遺跡」『吉田町郷土史』吉田町郷土誌編纂委員会
河野治雄1985「指宿市の歴史　先史時代」　『指宿市誌』
河野治雄1984「大口市西太良の山之城原石塔群調査概要」付記「大口市山城原と吾平町川北山土の蔵骨器」『南九州の石塔、5号　南九州石塔研究会
鶴田静崩1966『輝北町郷土史』
黒崎直1980「近畿における八・九世紀の墳墓」『研究論集』Ⅵ　奈良国立文化財研究所学報　第38冊
小片丘彦1988「川内市御陵下町越ノ巣遺跡出土蔵骨器内の火葬骨」『川内市歴史資料館年報　昭和62年度』
小片丘彦・他1992「弓場城跡出土の蔵骨器内の火葬骨について」『谷山弓場城跡』
新東晃一，牛ノ浜修，長野眞一1976「川内市高城町屋形原発見の蔵骨器」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』鹿児島県教育委員会
高木秀吉1957『末吉郷土史』
高木秀吉1958『山川町誌』
寺師見国，三島格1960「薩摩大口伊佐郡における蔵骨器」『九州考古学，9　九州考古学会
寺師見国，三島格1960「鎧及びタカラガイ厠葬の蔵骨器について」『人類学研究』7-1・7-2　『貝をめぐる考古学』1977に再録）
東森重二，東才二1953「吉山村先史時代遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要』第3号
渋谷忠章，上野稔志1975「九州」『新版仏教考古学講座』7
白木原和美「類須恵器集成」1973『南日本文化』6
（『南西諸島の先史時代　白木原和美南島関係論文選』瀬田考古会1999に再録）
新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」『隼人文化』2号　隼人文化研究会
新東晃一1977「国分平野の遺跡」　『隼人文化』3号　隼人文化研究会
新東晃一1981「古墳時代以降の遺跡」『大口市郷土誌』
川内市歴史資料館1988「鹿児島県内蔵骨器出土地名表」『川内市歴史資料館年報　昭和62年度』
高島英之1996「牧と古代の土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
中島哲郎，長谷川順一1987「越ノ巣火葬墓の意義　付・鹿児島県内蔵骨器出土地名表」『川内市歴史資料館年報　昭和62年度』
中園聡，中村直子1987「鹿児島県弓削丘出土の須恵器壺について」『鹿児島大学考古学会会報』第5号　鹿児島大学法文学部考古学研究室
永山修一2000「古代の山川」『山川町史』（増補版）
永山修一2004「鹿児島市横井竹ノ山遺跡出土の墨書土器について」『横井竹ノ山遺跡』
中山光夫・上田朝1995「小坂ノ上遺跡出土の古代の蔵骨器と巡納鉄滓について」『ミュージアム知覧紀要』第1号　ミュージアム知覧
平田信芳，新東晃一1976「宮於郡大隅町鳥居段発見の蔵骨器」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』鹿児島県教育委員会
隼人町立歴史民俗資料館1992『年報』第2号　平成3年度版
隼人町立歴史民俗資料館1994『年報』第4号　平成5年度版
菱刈町教育委員会1985『山下遺跡』伊佐郡菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
吹上町教育委員会1966『吹上町郷土史』上巻　吹上町教育委員会
藤森栄一1941「奈良時代の火葬骨壺－蔵骨器の形態学的研究」『古代文化』12-3　古代学協会
松下孝幸1984「鹿児島県大隅半島出土の火葬骨」『鹿児島考古』第18号　鹿児島県考古学会
松田朝由 2004「土器の製作技術と土器様相」『高篠遺跡』
宮下貴浩1999「金峰町山際野遺跡の古代火葬墓の紹介」『第11回人類史研究会発表要旨』　人類史研究会
宮下貴浩2001「山際野古代火葬墓と製鉄遺物」『鹿児島考古』第34号 鹿児島県考古学会
本村秀雄1990「古代」『大隅町誌』（改訂版）大隅町誌編纂委員会
黎明館編1990『仏教文化の伝来』　鹿児島県歴史資料センター黎明館
横川町郷土誌編纂委員会編1991『横川町郷土誌』
吉松町教育委員会1995『吉松郷土誌』



第11図　県内の蔵骨器（1）



第12図　県内の蔵骨器（2）



第13図　県内の蔵骨器（3）

第2表　鹿児島県の須恵器製蔵骨器集成

番号	遺跡名	所在地	備考	文献
1	木場名	根占町木場名	須恵器蔵(Ⅲ-1)・軽石枕	参明館編1990「弘教文化の伝来」
2	笠客	大根占町宿利原笠客	須恵器蔵（Ⅱ-1・袋利用中保管）	鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」
3	鹿敷寺1号（舘ヶ迫）	末吉町南之郷字鹿敷寺	須恵器蔵(Ⅳ-1)・焼骨	石田正夫1956「大隅半島の骨蔵器」「古代学研究15・16」
4	宮神免	末吉町南之郷宮神免	須恵器蔵(不明)・人骨・人形	高木芳貴1957「末吉郷土史」
5	小平	末吉町南之郷	蔵(Ⅱ-1)・人骨	石田正夫1956「大隅半島の骨蔵器」「古代学研究15・16」
6	黒田B	財部町下財部字黒田	土師器蔵(Ⅲ-4)・砂（ヘラ起こし）・人形	池畑耕一・中村勝治1984「大隅半島から出土の蔵骨器3例」「鹿児島考古第18号」
7	財部城ヶ尾	財部町御倉長十塚	蔵(Ⅱ-1)・土師器枕	本城俊
8	牧所1号	福山町野子田牧所	須恵器蔵(Ⅲ-1)（蔵に一条の突帯と2つ耳あり）	参明館編1990「弘教文化の伝来」
9	鳥居跡1号	大隅町鳥居段	須恵器蔵(Ⅰ-1)・焼骨・木炭・軽石蓋	平田信芳・新東晃一1976「曽於郡大隅町鳥居段発見の蔵骨器」「放光寺通跡」
10	鳥居跡2号	大隅町鳥居段	瓶(Ⅵ・徳利形)	平田信芳・新東晃一1976「曽於郡大隅町鳥居段発見の瓶骨器」「放光寺通跡」
11	河子塚	鹿屋市岡崎字河子塚	壷?	鴨田綱勝1966「鹿屋町郷土史」
12	塩迫	鹿屋町塩迫	須恵器蔵(Ⅲ-1)・石製蓋	参明館編1990「弘教文化の伝来」
13	木ヶ迫横穴	志布志町安楽水ヶ迫	須恵器長頸蔵(その他)	上村俊雄1972「古代及び中世の墓地」「志布志町誌上巻」
14	猪垣	馬山町猪垣	須恵器蔵(Ⅰ-1)	上村俊雄1970「鹿屋山出土の二点」「人間科学第20・40」
15	城山山頂	国分市上小川城山	須恵器(現在行方不明)	新東晃一1977「国分平野の遺跡」「考人文化3号」
16	横木城跡（別名鬱於都城）	国分市霧島丸吉永	壷（時代未詳）	鹿児島県教育1977「鹿児島県市町村別遺跡地名表」
17	第一工業大学	国分市清水	須恵器(原点時代)	中島哲郎・長谷川勝一1987「越ノ瀬次郎墓の意義　付・鹿児島県内蔵骨器出土地名表」「川内市歴史資料館年報 昭和62年度」
18	弓崩五1号	隼人町小田	須恵器蔵(Ⅱ-2・胴に2つ耳あり)	中園晋・中村直子1987「鹿児島県隼人町弓崩五出土の須恵器蔵について」「鹿児島大学考古学会会報　第5号」
19	弓崩五2号	隼人町小田	須恵器蔵(Ⅵ)	中園晋・中村直子1987「鹿児島県隼人町弓崩五出土の須恵器蔵について」「鹿児島大学考古学会会報　第5号」
20	真孝	隼人町真孝	須恵器蔵(Ⅰ-1)・軽石蓋・焼骨	隼人町立歴史民俗資料館1994「隼人町立歴史民俗資料館年報(第4号　平成5年度)
21	新城	隼人町小浜新城	須恵器蔵(Ⅰ-2)・土師器枕・焼骨	隼人町立歴史民俗資料館1994「隼人町立歴史民俗資料館年報(第4号　平成5年度)
22	弓崩	加治木町弓崩	短頸蔵(Ⅰ-2)	中島哲郎・長谷川勝一1987「越ノ瀬次郎墓の意義　付・鹿児島県内蔵骨器出土地名表」「川内市歴史資料館年報 昭和62年度」
23	桑田	加治木町西別府桑田	土師器蔵(Ⅴ-2)・焼骨・木炭	新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
24	敷馬	加治木町敷馬	須恵器蔵(Ⅳ-1)	中島哲郎・長谷川勝一1987「越ノ瀬次郎墓の意義　付・鹿児島県内蔵骨器出土地名表」「川内市歴史資料館年報 昭和62年度」
25	馬立	蒲生町馬立	須恵器蔵(Ⅵ)	隼人町立歴史民俗資料館1994「隼人町立歴史民俗資料館年報(第4号　平成5年度)
26	本場前	姶良町本場前	須恵器(不明)・焼骨	新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
27	姫若寺	吉松町姫若寺	石枕蓋蔵（伝記から人骨入蔵骨器又は出土）	吉松町教育委員会1995「吉松郷土誌」
28	川西	吉松町川西	須恵器	平田信芳・新東晃一1976「曽於郡大隅町鳥居段発見の蔵骨器」「放光寺通跡」
29	木通橋西(上ノ木通)	横川町上ノ木通	横板（古墳期須恵器と紹介）・軽石蓋・瓶	横川町教育委員会1991「横川町郷土誌」
30	小川遺1号	愛知町黒通小川遺	須恵器蔵(Ⅰ-2)	新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
31	小川遺2号	愛知町黒通小川遺	土師器杯（高い高台）2・土師器蔵(Ⅰ-1)	新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
32	鷺巣（船津田）	愛知町本城鷺巣	須恵器蔵(その他)・焼骨・鎮（毛抜き）・子安貝	寺師見国・三島格1960「薩及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」「人類学研究7-1・7-2」
33	大迫	愛知町徳辺	土師器蔵(Ⅰ(V-1)・小蓋4・蓋蓋7袋)	新東晃一1978「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」「古代文化30-2」
34	岡野	愛知町田中	底部穿孔土師（穴穿孔）・石臼い	新東晃一1978「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」「古代文化30-2」
35	法華野	愛知町田中	須恵器蔵(Ⅰ-1)・人形・馬形土製品	新東晃一1978「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」「古代文化30-2」
36	奥ノ神	愛知町下市山	須恵器蔵・人形・馬形土製品・石蓋(八角形)	新東晃一1978「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」「古代文化30-2」
37	丸岡	愛知町丸岡	土師器(Ⅴ-1)・柳町鉄骨柵コレクション	本報告
38	矛トキ1号	大口市菅木矛トキ	軽石蓋・発見時人骨あり・石臼ル	寺師見国・三島格1960「薩及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」「人類学研究7-1・7-2」
39	矛トキ2号	大口市菅木矛トキ	須恵器蔵（Ⅱ-1・口縁内部に軽石あり）	新東晃一1978「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
40	蔵原	大口市菅木蔵原	須恵器蔵(Ⅴ-1)	新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
41	川西	大口市菅木川西	須恵器蔵(Ⅱ-2)・発見時には人骨あり	寺師見国・三島格1960「薩及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」「人類学研究7-1・7-2」
42	鳥越1号	大口市羽月鳥越(松原神社)	須恵器蔵(Ⅰ-2)・焼骨	新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
43	鳥越2号	大口市羽月鳥越（鳥居鳥居鳥）の神授谷	蔵は発見時破壊・鎮(須恵器鎮)の神授谷	新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
44	白木	大口市羽月白木	蔵(弥生土器?)(黒色土器か?)	寺師見国・三島格1960「薩及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」「人類学研究7-1・7-2」
45	原田	大口市原田	須恵器蔵(Ⅱ-1)・成人一体分の焼骨充満	寺師見国・三島格1960「薩及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」「人類学研究7-1・7-2」
46	山城原	大口市山城原	須恵器蔵(Ⅱ-2)	鹿児島県1964「大口市南大迫の山城原石棺群調査概要」「南九州の古石棺墓5号」
47	牧	吉田町北之迫牧	須恵器蔵(Ⅲ-1)・骨壺土師器13点「大」「秋」・骨片・木炭	重森義二・東才二1953「吉田村先史時代遺跡について」「鹿児島考古学会紀要　第3号」
48	小野砂	吹上町小野	須恵器蔵(Ⅲ-1)・天井部丸部底発見	上原三夫・増田志彦・辻正彦1966「吹上町郷土史　上巻」
49	阿多（新山上橋ノ丘）	金峰町阿多新山上橋ノ丘	須恵器蔵(Ⅰ-1)・杯を蓋に転用	勝森俊一1941「奈良時代の火葬骨壷」「古代文化12-3」
50	高隈	金峰町高隈	須恵器蔵(Ⅲ-1)	上村俊雄・坪根俊也1985「鹿児島県中岳山麓須恵器古墳群に関する一考察」「古文化論叢」
51	白鹿野	金峰町白川白鹿野	土師器蔵(Ⅲ-1)・鎮と城付蓋・骨・鉄滓・石枕	宮下貴浩2001「白鹿野古代火葬墓と製鉄遺跡」「鹿児島考古　第34号」
52	松本寺	薩摩川内市川内松本寺	須恵器蔵(Ⅲ-2)・軽石枕・人骨・灯明皿	鹿児島県教育委員会1973「鹿児島県遺跡地図」
53	大浦町	大浦町	須恵器(炎部穿孔)	新東晃一1978「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」「古代文化30-2」
54	小板ノ上	知覧町下郡小板ノ上	須恵器蔵(Ⅳ-1)・焼骨	新東晃一1976「隼人における共同体社会の崩壊期について」「隼人文化2号」
55	猿山岡	知覧町下郡猿山岡	須恵器蔵(Ⅱ-2)・焼骨	上田耕2001「石蔵上遺跡発見の須恵器蔵」「ミュージアム知覧紀要　第7号」
56	石坂上	知覧町郡石板ノ上	須恵器蔵(Ⅲ-1)	上田耕2001「石蔵上遺跡発見の須恵器蔵」「ミュージアム知覧紀要　第7号」
57	成川	山川町成川	短頸蔵台付壷・皿	河野良雄1985「指宿市の歴史　第1巻先史時代」「指宿市誌」
58	指宿	指宿市指宿南中	短頸丸底壷（指宿南中保管・伝指宿出土）	河野良雄1985「指宿市の歴史　第1巻先史時代」「指宿市誌」
59	屋形原	川内市高城町屋形原	合台ギロロ土師器蔵(Ⅴ-1)・焼骨・木炭	新東晃一・牛ノ浦城・高野信一1976「川内市西城町字屋形原発見の蔵骨器」「放光寺通跡」
60	越ノ瀬	川内市和田下町越ノ瀬	須恵器蔵(Ⅰ-1)・把手付蓋・土製所蔵器・石組・焼骨	中島哲郎・長谷川勝一1987「越ノ瀬次郎墓の意義　付・鹿児島県内蔵骨器出土地名表」「川内市歴史資料館年報 昭和62年度」
61	都原	川内市	須恵器蔵(Ⅲ-2)	鹿児島県立埋蔵文化財センター2003「埋文だより」
62	鹿児島市高等学校	鹿児島市高等師町	土師器蔵(Ⅴ-2)・杯・瓶	参明館編1990「弘教文化の伝来」
63	谷山弓場城跡	鹿児島市谷山下福元町	須恵器蔵(Ⅱ-2)・蓋蓋土師器杯「大首」3・刀子	鹿児島市教育委員会1962「谷山弓場城跡」
64	向姫城跡	東市来町	土師器蔵・（焼骨）	橋薗昭吾編とも

図　　版

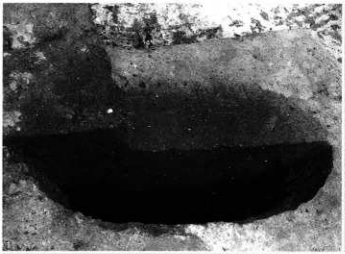
遺 跡 近 景

図版2

①

②

①標準土層（Ⅰ～XⅦ層）　②発掘調査風景



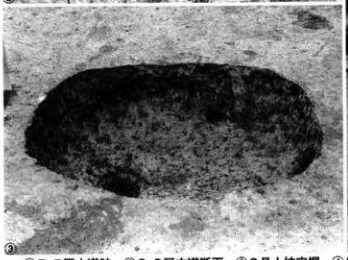
①2号土坑半掘　②2号土坑完掘　③2号土坑逆茂木痕　④6号土坑完掘　⑤6号土坑逆茂木痕　⑥6号土坑半截
⑦4号土坑完掘

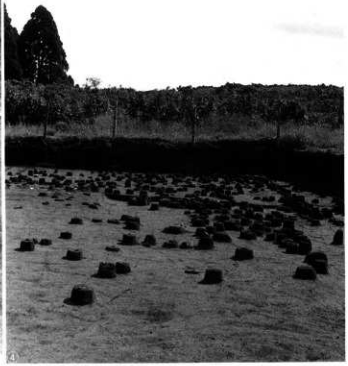
図版4

①1号掘立柱建物跡　②2～4号掘立柱建物跡

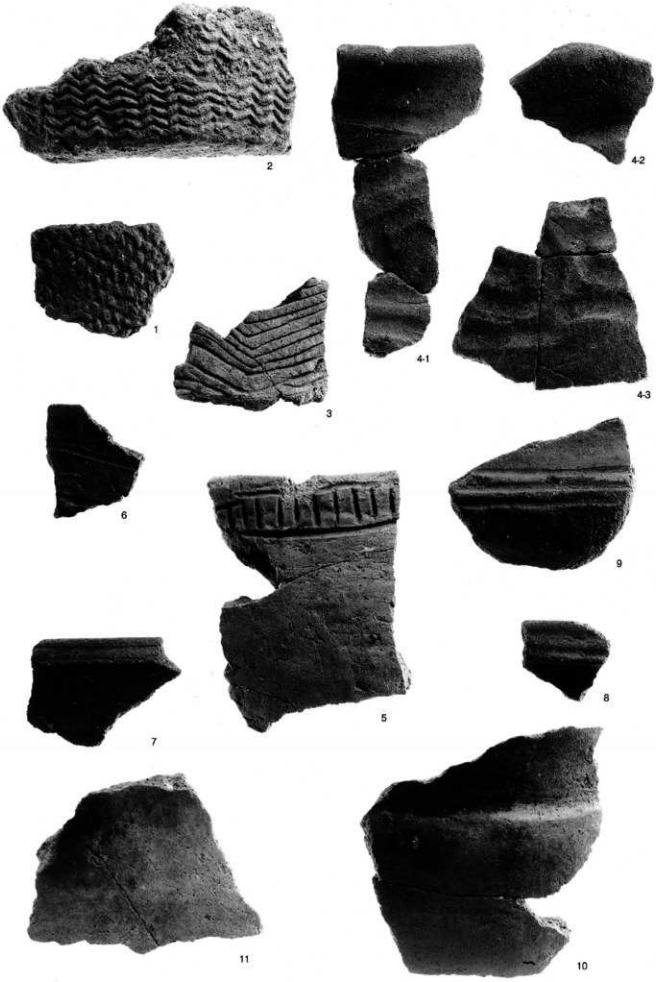
蔵骨器埋納遺構

図版6

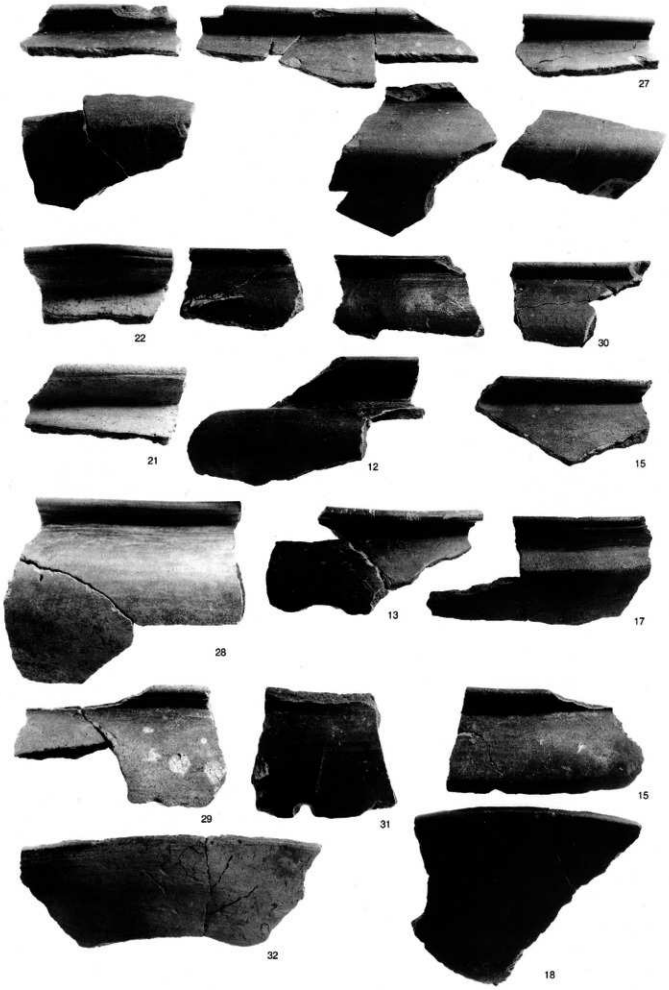




①E-5区古道跡　②C-2区古道断面　③8号土坑完掘　④F-11区古代遺物出土状況

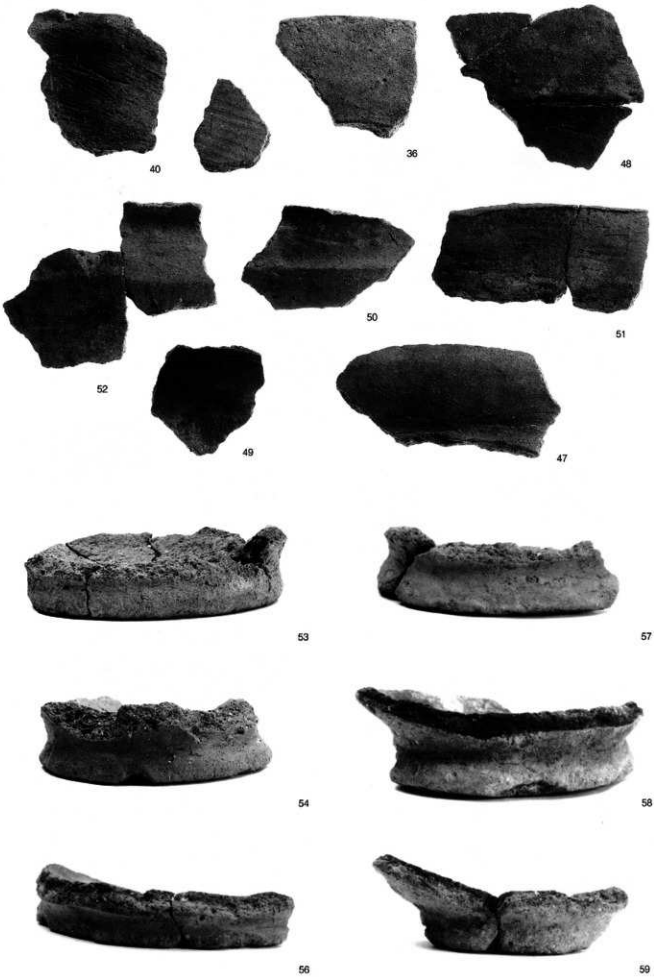


縄文時代　1類～6類土器



縄文時代　7類土器(1)

縄文時代　7類土器(2)



縄文時代　7類土器(3)と晩期土器底部

65 67 68 69 70 71 72

73 74 75 76 77 78 81

79 80 82 83 93

92 87 89 86 88 91 90 85 84

縄文時代　石器

古代　火葬墓関連遺物(1)

108

109

107

110

古代　火葬墓関連遺物(2)

古代　土器

4

19

7

22

9

28

30

31

41

42

土師器坏・椀，赤彩・黒色土器

82

85

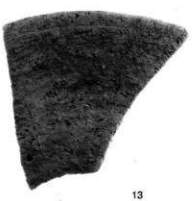
83

89

93

51

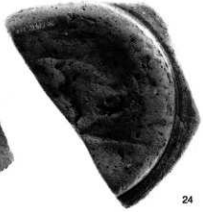
須恵器坏・皿と土師器甕(1)


13

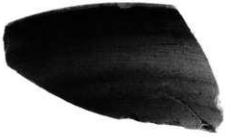
2

23

43


24

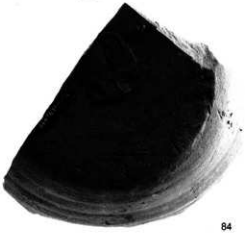
91


87

88

92

90


84

古代土器　底部ヘラ切り，火襷，器面調整痕

土師器甕(2)

59

68

75

64

60

土師器甕(3)

94

95

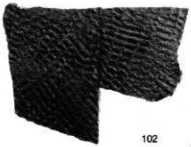
98

96

99

100

101


102

103

105

104

106

須恵器壺・甕

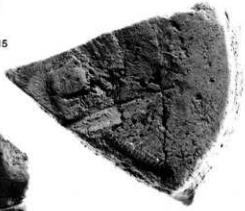
111

112

113

116

115

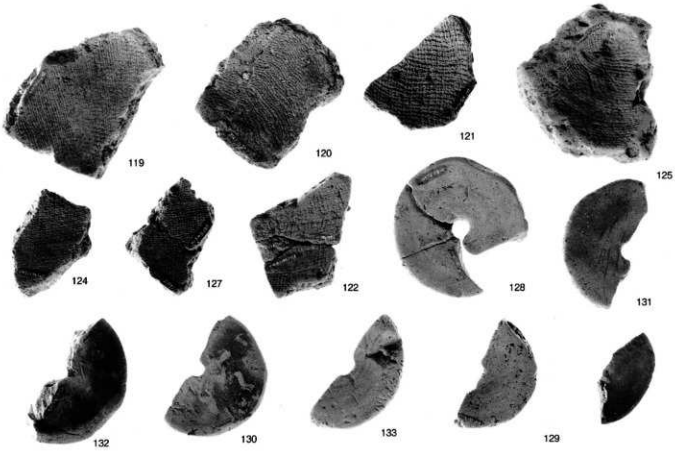


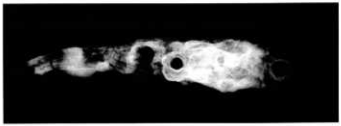
114

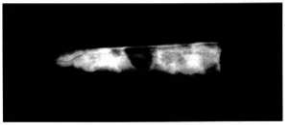
118

117

墨書・刻書土器







焼塩壷と紡錘車，鉄製品

あ と が き

高篠遺跡では「牧」の発見から，律令社会と関連した遺跡であることが指摘され，踊場遺跡では仏教祭祀とみられる特殊遺構の発見があった。今回は“古代火葬儀礼の様相”を蔵骨器の発見が提供したことになり，古代社会の様相が徐々にではあるが明らかに成りつつある。

蔵骨器の発見は，山の頂から少し下った緩やかな場所で，そこに立つとそびえ立つ高千穂峰を一望できる。現在既に高速道路が開通し，快適なドライブ道路に変身したが，遺跡に残された古代人のメッセージを読み解くことは容易ではなかった。

私たちに課せられた「限られた時間の中で調査報告書を作り，失われた貴重な遺跡を正確に，謙虚に，あますことなく後世に伝えること」の命題に近づくため，若い職員を中心に県内の蔵骨器関連資料収集に奔走した。また，これまで培ってきたデジタル技術を本遺跡の報告書作成でも大いに活用した。

報告書作成の最終章まで，“この地を選んだ古代の人々の暮らしや歴史を解明する”強い意志を持ち続けたことを今，誇りとしたい。

発掘調査から報告書作成にいたるまで関係してくださった全ての人々へ感謝したい。

巻頭グラビア
蔵骨器出納遺構検出状況

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 90
東九州自動車道建設（末吉財部IC～国分IC間）に伴う発掘調査報告書

財部城ヶ尾遺跡

発行日　平成17年3月31日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461
鹿児島県国分市上之段1175番地1
印　刷　株式会社あすなろ印刷
〒899-0041　鹿児島市城西2-2-36